

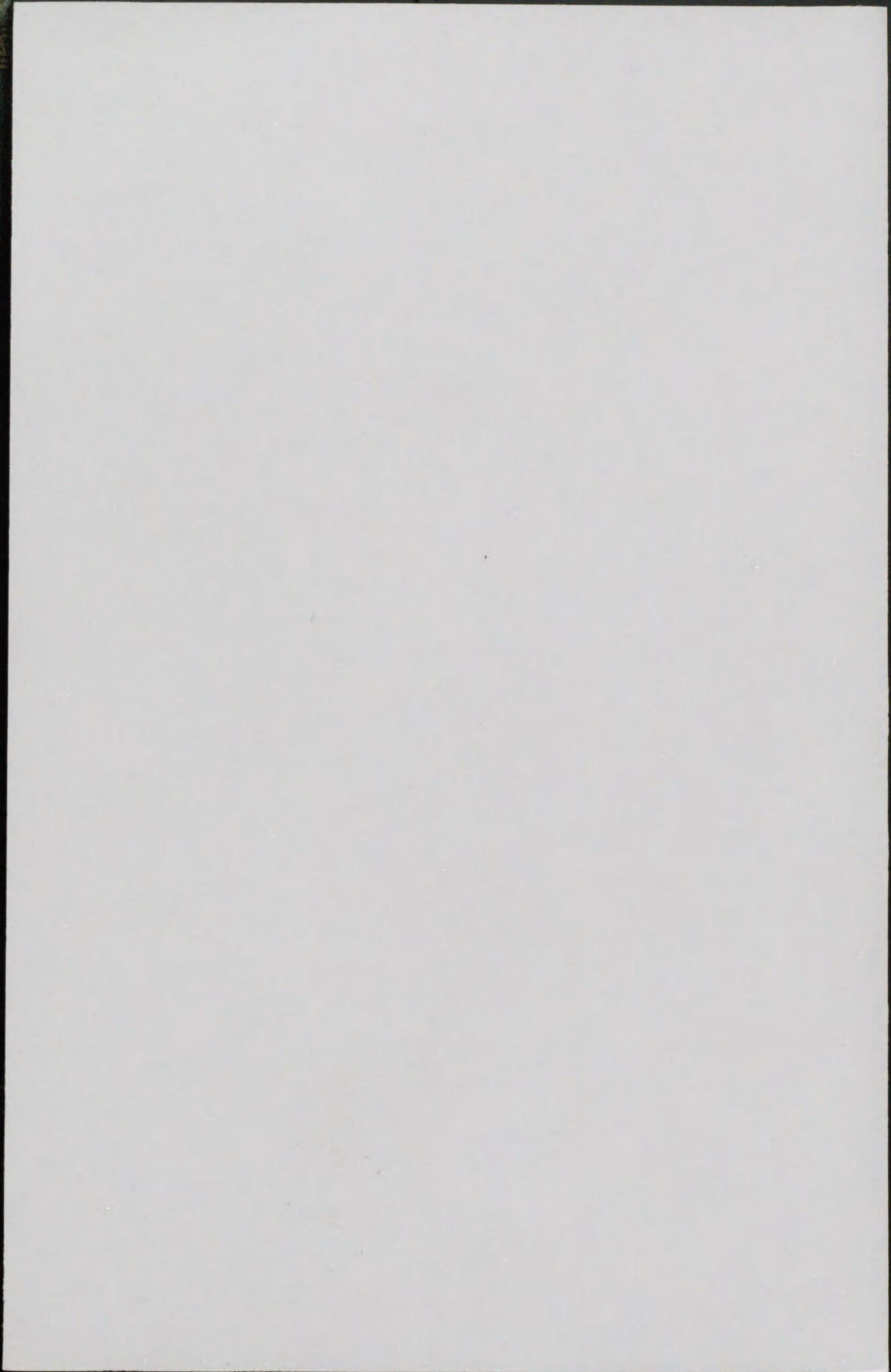
578-71



1200501520489

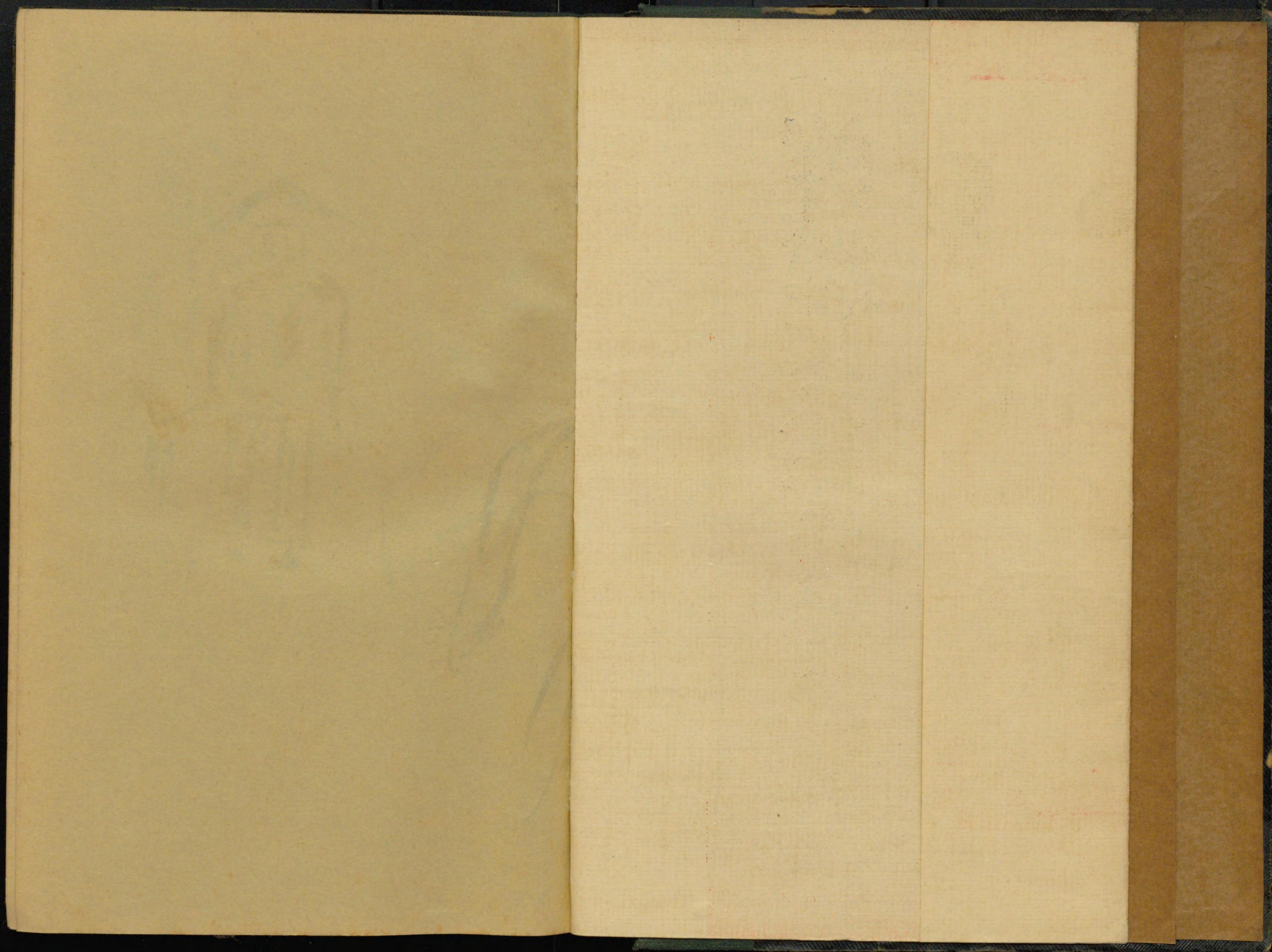
578

71



5:12.24

鮮滿支素貝



~~508~~
507





鮮滿
支素
貝





魏 敬 志 景 貝



第一八七八號

注：本寺直隸山東江蘇河南湖北
意：浙江等省如有匪徒勾結
匪徒

執 照

大日本欽命駐劄奉天管理通商事務總領事官 田為
給發執照事照得日中通商行船條約第六款內載日本臣民准聽持照
前往中國內地各處游歷通商執照由日本領事官發給由中國地方官
蓋印經過地方如飭交出執照應隨時呈驗無訛放行所有僱用車船人
夫牲口裝運行李貨物不得攔阻如查無執照或有不法情事就近送交
領事官懲辦沿途止可拘禁不可凌虐等因現據 中山正善
稟稱欲由奉天前赴 河南湖北浙江各省
請領執照前來據此本總領事查該人素稱安練合行發給執照應請
中華民國各處地方文武員弁驗照放行務須隨時保衛以禮相待經過關
津局卡幸毋留難攔阻為此給與執照須至執照者

右照給 中山正善 收執
大正十五年 八月四日
中華民國十五年 八月五日
中華民國 加印
繳銷

虎

578-71

序

日本の國內に生活してはどうしても、公平な立場に立つて日本を見る事が出来ない。頭の中で色々想像を廻らして、自分では日本を離れたつもりで觀察してゐても、遂に何とはなしに物足りない氣がして來るのは、日本に身をおいてゐる以上當然の事であらう。

然るに一寸でも國を離れるとたやすく此の様な觀察が出来る。勿論日本人である以上、獨逸や佛蘭西等の國を觀るのと同一には論じられないが、日本人なりに公平に日本を觀察し、今迄とは違つた意味の祖國の姿が描かれる。一度横濱をはなれて一晝夜も航海すれば、既に此の様な觀察が出来る。と云ふ話も聞いたが、未だ經驗のない身にはなんとも云へない。併し渤海の波をけつて天津、北京と進むにつれ、今迄は如何なる國に生活してゐる

序

一



たのか、我々の天地は如何様な形をしてゐたのかを、判然とは云ひ得ないが、頭に描く事が出来た。と同時に日本に居ては未だ嘗て感じた事のない程強く日本が戀しくなつて了つた。

百聞一見に如かず。成程色々と變つた社會を見、珍らしい風物に接して智識を増した。が此の旅行に於ける最大の意義といふものは左様な點よりも、我々の社會環境を反省する事によつて生じた何ものであるやうに思はれる。

日露の余燼未だ治まらざる時に生をうけたとは云へ、皇統連綿たる日本の、しかも國威發揚期に於て教育をうけたる者に取つては、既に維新の紛争や日清日露の役も懷舊談として語られるのみで、戰亂時代、革命時代等の無秩序の様は想像するにしてもピツタリと感ぜられなかつた。處が、朝

鮮を通り、滿洲をぬけるにしたがつて、漸次何とはなしに所謂殖民地的氣分とでも云ふのだらうか、心が荒廢的になるを感じ、ハルビンにては亡國の民のあはれな姿を目撃し、更に北京に入るに及んで、革命時代の無秩序さを幾分か實際に味へた様に思はれた。

内地にゐる時には、考へも及ばぬやうな人情、風俗等を見るに及んで、扱て日本を振返つて眺めたときの驚きは如何であつたらう。歸途、北京より奉天、京城と祖國に近づくに従つて、往路に漸次失はれていつた、社會の秩序と親しみの心とを取返していくやうに思はれて、只管、祖國に對して感謝の涙を流したのも自分一人ではなかつたと思ふ。

事新しく論ずる迄もなく、旅行は氣分の轉換について意義あるものである。或人は氣分をつまつた時、金と時間とを都合して旅行をしると迄云つ

てゐる。又歴史に例を求めると、古くはプラトーンのシシリ旅行や、近くはゲーテのイタリー旅行が彼等の思想に如何に根深く影響したかは衆知の事と思ふ。

又豫言者故郷に入れられずと云はれる如く、親しい人々の中に志を得ずして旅に出で、業をなした人々は獨り出家修業者のみならず、東西古今、其例を多く見るので、旅行はかくの如く、人を磨き上げるにも効あるものである。

然らば本旅行が自分の生涯に於けるかゝる劃期的動機となつたであらうか。期待程の收穫さへなかつたやうに思はれるが、有意義であつた事だけは斷言してよいと思ふ。

本書は一種の旅行日記である。但し、毎日々と旅行中に記入された日

記ではなくて歸國の後、事務と學究との多忙なる間に、後日の參考にと、やゝもすれば薄れ勝な記憶をたどつて草したもので、云はゞ、備忘録的な旅行記である。しかも筆を取り始めてより稿を脱する迄、殆ど一ヶ年の日數を経てゐる。其の間に大正は昭和と改元され、若槻内閣は田中内閣となつた。一方支那の時局も刻々に變つて張作霖は大元帥を稱し、南方の驍將蔣介石は野に下つて日本にやつて來てゐる。

自分の經驗内容も第二回目の渡鮮をやつたり、視察團や旅行團の報告に接して多少考へを異にする處も出來た。然し、後日の記念にと出來るだけ旅行當時の氣分になつて書いたのだが、寸暇をぬすんで書いたため、全體として統一を缺いてゐるのは残念である。

寫眞は地圖、執照其他、二三のものを除く外、全部旅行中に自ら撮つた三百餘枚中より選り出したもので、自分にとつて思ひ出深いものばかりな

のである。参考になれば結構である。

本書の題目も色々意見があつたのだが、結局「あをぎり」第四號に第一編を投稿した時の題目を用ひる事にした。

重ねて云ふが、本書は鮮滿の案内書でもなければ紹介書でもない。只、第一回鮮滿支旅行のかたみとして草したもので、云はば自由な感想を加へた紀行文の様なものだからそのつもりでお読み願ひたい。

終りに本書のために、扉字及び背文字を染筆された財津愛象先生の御好意を深く謝す。

昭和二年九月卅日

姉の誕生日の夜

染井の書齋にて

正

善

再刊への序

此の書出版されて最早數年になつた。僅か五百部ばかりの印行で個人的に讀んで貰つて居たものであるが、以來諸方から屢々公刊を薦められ、又出版所の方でもたつてと望まれるので、自分の考へよりも寧ろ此の書の爲に再刊することになつた。

此の間支那では奉天の霸業空しく消え南方亦幾變遷をたどり、世相に於ても兎に角モダン味を加へつゝある。吾亦三ツ四ツ歳を加へて、今春再び渡支の機を得たので、内外の事情共に吾が支那觀に變革を逼るものがある。故に今更この昔の書を公刊する所以は全く之が「素見」であることに存すると云へやう。猶舊版に於て諸氏の御忠告に基き訂正を要する箇所もあつたが再刊に際しても多種の雜事におはれて、遂にはたさず原型のまゝ

再刊への序

再び見えることにする。

昭和五年十月

二

著者

目次

著者序言

第一篇 朝鮮 一

渡航 三

京城 七

元山 三

平壤 一〇

第二篇 滿洲 一七

目次

一

國境……………一九

奉天……………三三

撫順……………四三

ハルビン……………六〇

大連……………七五

旅順……………八九

第三篇 支那……………九

渤海灣……………一〇一

天津……………一〇八

北京……………一一九

第四篇 歸路(北京よりちばまで)……………一六三

騒しい車中……………一六五

山海關……………一七二

二重生活(奉天)……………一七六

一視同仁(京城)……………一八〇

第五篇 支那回想……………一九三

寫眞目次

紺碧の玄海灘 京城景福宮趾慶會樓 京城景福宮趾より總督府廳を望む 京城昌德宮秘園 京城鮮人
風俗 雨後の高原 元山愛媛の夢(四一五) 平壤乙密臺 平壤玄武門、風俗(三葉) 大同門 大
同門より練光亭を望む(二〇一、二一) 内城吉順絲房露臺より奉天全景 奉天傳道廳 奉天附屬地日
本人街 奉天附屬地支那人街(四葉) 奉天廣野の放牧 奉天車軸を没する惡道 奉天北陵、石象、
隧道入口) 奉天第二小學校 奉天女子師範學堂(三六一、三七) 撫順炭坑(撰炭所、露天堀の正
午) 露天堀斷面 撫順散見(五二一、五三) ハルビンキタイスカヤ街 懐しい和装 ハルビン新市
街寺院 ロシヤ馬車 ハルビン東支鐵道クラブ 金髮小兒の遊技 ハルビン埠頭區公園 トルゴワヤ
街松浦商會前(六八一、六九) 大和ホテル玄關に於ける一行 大連大和ホテルより 福昌公司(水汲)
大連一日の勞苦の汗を流す華工 大祖神に日參の遺族連 福昌公司案内文 旅順東鷄冠山北堡壘
(八四一、八五) 淡路丸甲板上に棋を闘はす人々 白河遡航 淡路丸時鐘の朝姿 天津佛租界岸壁の
出迎人(一〇〇一、一〇一) 天津東站驛 北京驛 北京紫禁城東華門 北京草茂れる舊玉城 民國兵
と共に 楷を下る地下人 北京北海 北京全景(一一六、一一七) 北京萬壽山(四葉)
北京孔子廟 雍和宮 北京大學 北京東安市場 北京前門街 奧地より北京への唯一運輸機關駱駝
路駄の荷下し 代價を拂つた路駄の顔 北京中央公園 城壁散步 戒嚴令下の北 北京朝市 北京
天壇(一三二、一三三) 山海關異郷に見る同胞 停車中に朝食取る民國兵 北京にて苦心の結果手
に入れし撮映機 京城漢江鐵橋 京城鮮人風俗 京城南大門 土運ぶ勞役夫(一六四、一六五) 附
きまとな支那乞食 賣卜者 車夫の賭博 出征する軍隊 徵兵官 街頭に暖いものをすすめる人々 黃
道吉日(一九六一、一九七)

第一篇 朝鮮

渡

航

一衣帶水と簡單に習つた事のある朝鮮海峡も、色々な人等のにがい経験の歴史を有する玄海灘も、茄子のあさ漬色におさまり返つて、海には極く縁遠い人のみがキアピンを守つたのみで、一行中の大部分は徳壽丸のサロンドで碁を戦はしてゐる様な有様だ。『天氣晴朗なれども波高し』の海將の氣持は遺憾乍ら味ふ事を得ずして釜山の埠頭に入つてしまつた。

小さい時分より幾度となく朝鮮の話は耳に入つてゐる。又寫眞や地圖等で紹介された事によつて朝鮮と云ふ概念は、頭の中にはよくわかつてゐる様に思つてゐた。——禿山の連る、そして長い煙管の白衣の人のゐる國、チョンガの國、冠の人の國——と色々空想をめぐらして、一種のお伽話の國の様にしてゐた。又、神功皇后以來、秀吉の出兵、さては明治の二大役

等によつて、度膽のうすい、所謂蝙蝠式の國民とも思つてゐた。

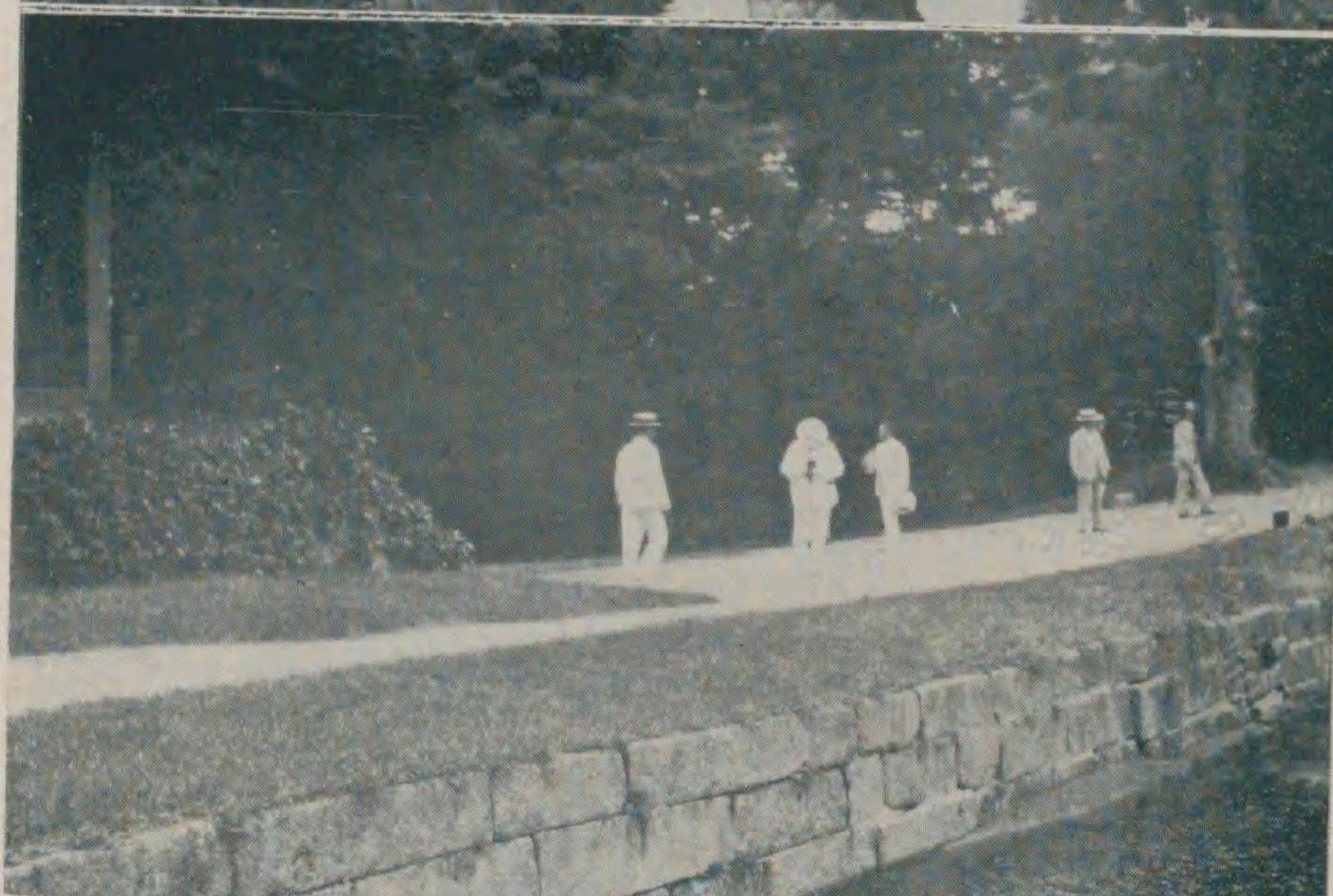
そして今眼にうつゝ、た朝鮮は、『佐渡の様な』處であつた。(佐渡へは今夏歸國の途次、新潟より一泊の行程で行つたのだが)よく考へて見ると少しも似てそうにない。が、どうしてもその印象が忘れられず、しかも、『佐渡の様だナ』と思つた瞬間には、此のお伽話の國に云ひ知れぬ懐し味を起した様だ。加之棧橋上の多數の出迎への人を見た時、植民地に着いたといふやうな氣は少しも無く、懐しいと云ふ感じは一層増された様に思つた。今日になつて考へた事だが、紺碧の日本海の波なき航海を了へて、西に傾く太陽の赫金光を浴び、而も無意識的乍らも海に對して抱かしめられた不安の風情も、陸に無事着する事が出來た上に、數知れぬ同信仰の人々に迎へられた事によつて云ひ知れぬ喜びと感謝の情とがこみ上げて來たのだ。佐渡でも釜山でもヤレ／＼と云ふ氣持があつたのだらう。その神祕の



灘海玄の碧紺 (上)
樓會慶趾宮福景 城京 (下)



京 城 鮮 人 風 俗



京 城 (上) 景 福 宮 趾 上 總 督 府 廳 望 望 望

京 城 (下) 昌 德 宮 秘 園



原高の後雨(上)
夢の媛愛 山元(下)

力により懐し味を喚び起されたのではなからうか？何れにせよ、此の懐し
みは鮮土を通じて親しみの情を増した様だ。

然し未知の國はあらそはれぬものである。事實は初見の土地なのだから
眼にふれるもの、鼻を衝くもの、皮膚を掩ふもの、一として珍しくないも
のはなく、五月蠅い程の奇異な思ひもさせられた。而してせつかくの好印
象も東萊温泉の第一夜に於て全く破壊され、翌日は日中重い氣分で油蟬の
鳴き枯らした聲に汗をしほられ乍ら、京城へと朝鮮の初旅を続けねばなら
ないとは、へと吐くものと豫期されてゐた航海中には、夢にも思はなかつ
た苦痛であつた。

兎に角、上陸第一に感じたのは、少しく暢氣過ぎるなと云ふ事と、内地
人が意張り過ぎるなと云ふ事の二つ。汚い白衣に特有の香氣を發散させ乍
らゴロ／＼と路傍に寝てゐる姿、跣足で平氣な子供、互に背中をこすり合

つて入浴に代へる女、さては又ハイカラなバラソル片手に我物顔なる内地の女、何れも意外の程度のものであり、何とも云へぬ感情がおこる。その上に、廣い軍用道路をドライブする時、子供が投石するのに出會つたが、その様も只の茶目とは受け取れず、色々な事を比較して見ると、考へれば考へる程、融合の日は何時來るのかと心細くなる。

京城

京城着の翌日、八月十三日、總督府に湯淺政務總監を訪問の後、岸君達の案内で總督府博物館を見る。王朝時代の王城であつた景福宮跡を見ては感慨無量である。「夏草や、武士共の夢のあと」と詠んだ芭蕉の氣持を百年後の今日、異境に於て悟り得た様な氣持がする。思政殿の屋根と云はず大理石の欄干と云はず、さては玉の宮居に至る迄、所嫌はず雜草繁茂して長い所では、膝頭を没する程である。「何とかもう少し保存の方法もありそうなものだナ」とは期せずして發せられた一同の言葉。一行の中には以前に來た時、玉座に南面して坐す事が出來たと昔話をする人さへある。冥想は五六十年前に溯る。

……王様は今や侍従を従へて思政殿に出御になる。朝見の式が始まる

のだ。警蹕の聲、衣ずれの音が交々に聞えるのみで、草はおろか、塵一本もない様に清められた石疊の上には、文武百官がその書き示されてある階級に應じて、うやくしく坐して最敬禮をしてゐる。しづくくと王様が玉座にお坐りになる、侍従は夫々きまりの場所につく、よく見れば王様の後に居るものは、大半は美妓の様だ。絢麗なる光と、馥郁たる香が何とも云へぬ味を示してゐる。國務大臣は國務を報告し始めてゐるらしい。王様の表情は一語々々により險悪になつて來る、餘程の重大事件であるらしい。時々日本とか清國とか云ふ言葉が耳に入る。突然『己は……』と云はれる、而して王様は、美妓を後にして玉座を下られ、後宮へお入りになる。香のみが嘲る様に百官の鼻に漂つてくる……。夢から醒めてみれば、矢張り夏草茂る百敷きの庭に立つてゐる。而もその正面に思政殿をバックとして建築された總督府の白い石の建物は、何たる皮肉な對照を示してゐるのだ。朝鮮人の目には如何に寫るか、想像に難くない。

思政殿の後よりズラリと立並んでると云ふ（今はその一部しか残つて居らぬが）座敷率様な局を見る時、又人間には見る事の出来なかつた青丹を絶した高樓の宮殿と、オンドルのみが生命である平民の住家と比較する時、有爲轉變の様を如實に示されるのを覺えた。更に後方には石の角柱の崇嚴な慶會樓がある。王朝時代の宴會場との事、今や一般の人々にも見られる所だが、その昔には後宮の妓姫達のみの樂園であつたのだらう。三軍を叱咤する將軍も帷幕の謀臣もこの樂園に入る事は容易に許されなかつたのだらう。まして一般の庶民に於てをや。酒池肉林の豪遊の夢、今や伽の國の作り話と消え、夢だに見る事を許されなかつた人々も自由に入園する事が出来る今日に於ては昔の面影絶えてなく、妓姫達の後宮は僅かそ

の一部を止めるのみで荒野原と化し、宴の臺、徒に草むす姿を古池にうつすのみ。哀れ三匹の白鳥遊泳するを見ても一入の追懷の念を深くするばかりだ。

年々歳々花相似。

歳々年々人不同。

との古人のたはむれ、新に我が胸に蘇る。

風に舞ふ心も知らぬ夏草や。

つきぬ思を夏草に托して、重き禮服の汗をふきく再び自動車を驅つて管理所に歸り、午食につく。

午後より昌德宮の祕園を拜觀。漢書に見る様な堂宇、圍碁殿、將棊樓等が所々に設へてある。何の事はない、松茸山の四阿の様なもの。大極亭と名づくる王様の遊亭もある。三千丈の瀑布は、小兒の放尿程の力もない。

賄にて洋服姿の鮮人案内者が撮影を許したのも舊王朝時代の遺風らしい。

夜、民情をさぐる。總督府の威光の如何に強大なるかはとても内地の比ではない。聞けばこれでも餘程官弊が少くなつたとの事、その極盛時代が思ひやられる。土をかためて葺くにわらを用ひた小さな所を、腰に劍をガチャ／＼させ乍ら睨んでゐるのが目に見える様だ。

何にせよ、公務多忙の身ながらも、京城の風情をくまなく案内し、且つ平壤まで見送つて下さつた岸君に謝意を表する次第である。

元山

今度の旅行は非常に忙しい。しかも朝鮮を従にして、滿支、殊に滿洲を主としたのであるから、朝鮮では出来るだけ簡略に見物する事にしてゐた。しかし特に元山へのより道をする事にしたのは、縦貫山脈で二分された地方が如何に異つてゐるかを見たかつたのだ。己の心にはたしかに山陽と山陰との如き差異を發見されるにちがひない。而して過去の文化は兎も角として現在ではやはり京城附近とは比較にならぬ位だらうと思つてゐた。此の様な前提の下に元山に臨んだのである。そして高原をはしる汽車の雨中に段々と冷されるのを感じた時、いよく野蠻に近い所へ來るわいと感じた。

然し間もなく全く、豫想外なのに驚かされた。愛媛館へと向ふ神宮警察

署長の自動車中より眺めると、町並は内地風であり、靜かな所である。且つ宿の窓より港灣を見るに、やはり日本海の水とかはりなく、なつかしい茄子のあざ漬色であつた。

雨のために豫定の海水浴は出来ぬ。と云つて外に見る所もない町だ。加之要塞地帯だからカメラははたらかすわけにもゆかぬ。一同は昨夜の汽車の夢と、おちば出發以來連日の暑さの爲に、ポツ／＼旅の淋しさを感じてゐる矢先だから、あちらこちらで愛媛の夢をむさほつて、午後の港灣見物までの時間を費す。しかしその間に、獨り神宮氏から色々土地の事情や風俗の話、民情等を聞いたので、徒然な雨の半日も有益な所が多かつた。今氏の話の中で思ひ出せるのを二つ三つ記してみよう。

咸鏡道の人間は朝鮮の中でも慄悍な種類の方で、併も李朝はこの地方より起つた爲、王朝時代には特別に取扱つた位である。今でもやはり國際間

題（露國や支那）のよくおこる所で、所謂間島への要路にあたるため、不逞の徒の出入多く、警察問題も厄介な所だとの事。次に朝鮮の裸山は有名なものだ。それは李朝時代に王宮を建造するのに各郡に命じて大木を献じさせた。しかもその木はその地のものが、京城迄運ばねばならぬので、郡守にはいじめられ、おまけに勞力迄かけねばならぬのなら一層の事一思ひにとて、焼いてしまつたのだそうな。

今一つ。朝鮮の名物ぬぐての話がある。ぬぐてとは狐の様な奴だが人間を喰ふと云ふ事だ。それは鮮人の家は冬向に出来てゐるから、夏は暑くて家の中で寝られぬ爲屋外で寝る。この様は朝鮮で到る處で見かけた姿なのだ。併しそれに對して警察が如何なる態度を取つてゐるかは興味ある問題であつたが、『實は致し方ないし、いくら警察からやかましく云つても實行されないから、近頃では戸外に寝る人達を一ヶ所にあつめてその周圍に

鐵線をはりまわし、交番で見張をつけさすと、ぬぐての害はいくらか減じた様ですが、見張が時々寝てしまふので矢張り年々いくらかはぬぐての餌になります。虎や豹は今頃滅多に此の附近には出て來ませんが、日露戦争の時には、あの家の處にあつた警察にやつて來ました。』とて旅館の辻向ふの家をさし示される。今更乍ら恐い土地に來てゐるのだなと思ふ。

午後より署長の好意により、警察の汽艇で港内を一周した。船名は失念したが何でも密航者や密獵船又は赤い船を追ひかける舟だ。内地でも乗つた事のない舟に意外な所で乗り、意外な經驗を味うたので、少々尻が落ち着かぬ。雨後の爽々しさを味ひ乍ら見渡せば、元山は朝鮮には珍しい青々とした山で圍まれてゐて、その麓には到る處に煉瓦造りの家が見える。朝鮮に來たと云ふより、未だ見ぬ事乍ら外國の港町はこの様だらうと思はれる。聞けばこの地は東海岸唯一の不凍港であり、又干満の差の少い、朝鮮

一とも云つてよい有数の良港だとの事。それを知つてか毛唐の奴等は、獨逸、佛蘭西、さては米人までも宣教に事よせて乗込んで、此の元山津を占領せんとした。今尙此の港の一部に外國人の土地となつてゐる所があるとの話、何にせよ彼等は『裸山に植林して御覽の通りの青々とし、又カリフォルニヤより林檎を移植して鮮人に栽培法を教へました。それが今日ではあの様な立派な果樹園になつてゐます。又宣教の傍、學校を建て、鮮童を教養しましたので、始めは民間に大いにひろまりましたが、今日では左程でもありません。唯感心さゝれるのは宣教師の熱心さで、あの洋館は獨逸の宣教師が人手を借らずにつくつたので、彼等の中には大工をする宣教師等色々な分業になつてゐる』のだそうだ。林檎林及學校は立派なものだ。しかも米人經營の學校の様にゴマ化す様な事なく正規に總督府の命令を聞いてゐると云ふ。元山まで來て獨逸人に感心させられてしまつた。

次いで上陸、警察署の自動車で、又署長の案内で、元山を隅から隅まで案内してもらつた。出遭ふ鮮人の面相は京城や釜山よりは引締つてゐる様である。又婦人の顔及動作も上品に見える。外國人の教養によつたからかも知れぬ。

車中で色々問答した。先づ鮮人の臭氣についての話に、彼等は、にん、にん、くを喰ふばかりでなく、馬糞を以て壁を塗り、その生乾きの中からオンドルを炊くために、あの様な鮮臭を放つ様になつたのだそうな。『これでも元山は町内の豚小屋を全部郊外へ移轉さしましたので、いくらかましになつたのですよ。』とて署長はいかめしいカイゼル髯の下で微笑された。

次に結婚年齢を尋ねたのに、婿さんが六七才で十四五乃至十七の嫁さんを迎へる。而して女はその夫に一種の性教育をなすので二三年後には男の方も一人前の作用が出来るとの事。然し何分にも此の様な不自然な結婚だ

から、妻にしてその夫を殺害する事件が多く『何にせよ夫が何もわからぬ子供ですから、せんだく用のソーダ(?)を混入してわからぬ様に殺す』のだ。近頃は結婚年齢も段々とおそくなつて來たと云ふ話だが、それでも此の様な事件は數多い事件の一つをなしてゐる。子供のある中學生や女學生が多いのも早婚がまだ盛んな事を示してゐるものだ。

思はぬ所で意外な参考を得て、雨のために殆ど無意味と思はれた元山訪問は本旅行中特筆すべき意義あるものとなつた。翌朝(十六日)しめやかな雨の内を出發するまで終始案内の勞をとられた神宮氏によつて、思出深い元山となつた。又雨をもおかして嬉しげに出迎えてくれた人達に會つては、何處でも同じ様に、未知の土地へ來たと云ふよりも懐しい土地と云ふ氣持が早い様に思はれた。

車中、一宣教師に會ふ。彼には僕達が日本人だと云ふ事が一見してわか

らない様だつた。聞けば二三十年朝鮮に居るのだ。オンモン文字は少し讀める様だつた。内地へは行つた事がある様には云つてゐるが、日本語は讀めない様子。『今朝鮮には三百萬のクリスチャンがゐる』と云つてゐる様だ。廣々とした高原を走り乍ら、此の老人と相對してゐると何となく考へさせられるものがあつた。洋々たる空想乃至豫想を廻らしてゐる内に汽車は京城に着した。而して金剛山は再訪のためにと残されたのである。

平壤

雨にぬれつゝ、汽車はひた走りに北上する。又何時見るのかも知れぬと思へば、徒にはうちすぎ難い。加ふるに車中で雨に見舞はれてゐるのだからぬれもせなければ酷暑も知らず、此上もないあつらへむき。浴衣の肩を汚すことも少くて平壤につく。

驛頭には教師、信徒が迎へてくれ、道廳の學務課長といふ人も出迎へてくれたのには心強く感じた。驛長の案内で歩むと、一群の白衣のかたまりがある。きけば郡山の部屬のもので、數里はなれた田舎より、わざわざ臨時列車で出迎へに来てくれたとの事、涙ぐましい程うれしい。

鐵道ホテルで午餐をとつて後、郡山部屬の平南宣教所に參拜、其後は市内見物にドライブする。



平壤乙密臺



(人商傍路)俗風 壤平(上)
(場市)上 同(下)



門武玄 壤平(上)
(夫役勞)俗風 壤平(下)



門 同 大 (上)
む望を亭光練りよ門同大 (下)

坦々たる街路には街路樹の影も繁く、道行く人の歩みも京城とは事かはり稚かで、未知乍らも鮮土古來の風俗ではないかと思はれる様な姿も多い。白布をかむつた婦人、甜瓜を嚙る乙女、さては勞役夫の長閑さ等、京城の地では充分に見られなかつた風情である。時に大きな牛が首にて車をひける姿、又牛に蹄鐵をはかす等、内地人の想像もつかぬ様だらう。朝鮮古代の長き歴史を語るは此の地において他に少い事と思ふ。朝鮮の古都、雅風の巷、歴史の都として平壤再遊の念が頓に強くなるのをおほえる。

而も亦一面には決して博物館の様な意味からではなく、赤煉瓦のチャーチや住宅を見る時、外人の早くも手をつけて、而も人心を歸する所のあるを見て、元山で得たる感が、一段と強められるやうだ。カメラを手にして鮮童につきまとはれつゝ、スケッチしてゐる折しも、漏れ來つた讚美歌の韻律は如何に心を刺戟しただらう。私に對する歡迎の歌か。それ共、嘲笑の

叫びか。

乙密臺に辿りついた時、俄然驟雨の襲撃する處となる。一襲又一襲と濃き緑の山に時雨れる様を、彈痕尙鮮やかな此の臺よりながめる時、一陣又一陣とあの大同の濁流をわたつてせめよせた同胞の苦心の様も斯の如くであつたらうと思はれて、案内者の萬言よりも深く膽に銘じた。

『昔に箕子と云ふ賢人、亂世の唐土をのがれて鮮土に來り、その國王となる。』

東洋史で得た箕子の智識で今尙残つてゐるのは此二行だけだ。何と云ふ國だつたか何時頃だつたか判然とはせぬ。唯神武天皇と附會してあつた様にも記憶してゐる。兎も角箕子は「えらい人」である。

この箕子の廟は「櫻の牡丹臺」の一方の赤松林の中にあつて、其の鍵は

一人の可憐な鮮娘の手に握られ、望に依つては誰でもその陵の頂上にさへのほりうると云ふ様な廢れ方だ。昔時はその拜殿も立派にあつたとの話だが、今は亂暴な旅行者に荒され、風雨に曝されて、瓦も碌にない。『時の力は何とまあ』と云ひたい位だ。しかもその麓には、競技場が立派に出來てゐるのだ。

翌十八日道廳に知事を訪ひ、學務課長の案内で樂浪の古墳見學と出掛けしたが、生憎雨に妨げられて目的を達し得ず。然し特産官妓學校を見學する事が出來た。

春は櫻の牡丹臺

秋は紅葉の金剛山

花の官妓誰をまつ。

と詠はれる程美人の産地としても第一の地である。官妓學校と名づくる特別な名物のある位で、全鮮の名妓は此地に培養されるのだとの事。内地に於ける鴨川の水にも比すべきものが大同江であらうが、意外にも其の水は清水でなくて、『これはくくと濁水の大同江』である。之は不幸にも雨のために災されたので、平素は畫舫とか呼ぶゴンドラに、風流子の心膽をとろかす川なのだそう。道理でと美妓發生の背景をも肯定される。

官吏に案内されて官妓學校へ、と云へば何となくかたい學校の様でもあ
るが、その實は學校とは名づくるものゝ、檢番の如きものだそう。但し
當事者にとつてはどこまでも學校で、教頭とか教務主任とかの話を聞くと、
『今は夏休みですから生徒の集りが悪く』と云ふ。但し『夏休み』でない
時でも學校の始業時間は正午頃だと云ふ所にもその特質を見出だされるだ
らう。

かくして數年しこまれたものが官妓として活動するのだ。而かも官妓と
は内地藝者とは少し風がはりたる、音にきく平安朝よりの白拍子なるもの
に似てゐる様である。野趣そのものではなくして、ある一種の高尙味を有
してゐる様である。聞けば、李朝時代には朝廷の宴に待りしも彼等だとか
云ふ。

此の學校で『劍舞。』『僧舞。』と云ふ鮮舞を見學した。コロンブスがアメ
リカに上陸して悠悠王者然として土人の朝見をうけ、演舞を見る様な格好
をして。但し不幸にして未だ彼等の氣風を充分にのみこめぬ爲、巧者な手
踊りも音學教授連のオーケストラも唯珍奇に耳目に觸れたのみであつた。

その日の午後の汽車で、此の古都につきせぬ名残をのこして再遊を念じ
つゝ、鴨綠江を『渡れば廣漠南滿洲』の重鎮奉天へと出發した。

第二篇
滿
洲



境

名残の雨に送られて、白衣の裾をからけ乍ら泥川を渉る人達をあとに、新義州についた。例によりこゝにも百餘名の同教の人々に迎へられた事は、心強く感ずると共に無邊の神恩を感謝せずにはをられない。おぢばで會つた顔も幾つかあるのだなと思へば、身は何處にあるのかはつきりせぬ位だ。列車給仕の『國境ですから荷物の検査があります。』との注意に、初めて邊地に來てゐる事を感じた。注意すれば注意する程、何とはなくザワザワしてゐる様に思はれる。巡查の眼光さへもちがふ。鮮満と一口に云ひなれてゐる自分は、今更乍ら、鴨綠江をわたれば他國の土だなと思はなければならぬ様な氣がした。

汽車は慢々に江を渡り出した。連日の降雨に濁流満々としてレールの

二三間下はすでに水面である様に思はれる。デッキに立つて懐中電燈で照して見てみると、うしろから専務車掌が、『今日は少し増水してゐますので。』といふ。成程汽車のあゆみも一向に早くない。

やがて彼岸に入つた。橋のたもとにあるポストに日本の軍人が武装して立つてゐる。通行人は一人々々そこで検閲されてゐるのだ。まだ外國とは云ひ得ない様だが、それでもいよいよ物騒な土地へ入つて來たと思ふ。今迄の様に夜目にもすかせる白衣でふら／＼漫歩してゐる人々とは違つて、黒ずんだ、さわがしい人々がうよく／＼してゐるのも尙更無氣味だ。

安東のプラットフォームに着くと大勢の人にむかへられた。中には出水をおして來た人も多いとの事。他國についたといふ氣分も瞬間は忘れてしまふ。

どや／＼と車中に入り來る様子だ。見れば支那の制服をつけた肥えた英人とやせた華人が三名ばかり。蚤とり眼で荷物をしらべてゐる。後よりは日本の税關吏も來る。政治的國境をこえて了つたのだ。滿洲は支那領なのだといふ事を無理矢理に思はされた。次いで憲兵と巡查とが刺を通じて一行の人員及び用務等を調べて行つた。何でも上司に報告して滿洲旅行を安全にしてくれるためらしい。態のいゝ護送の様なもので、内地では一向に見向きもしてくれない官憲に特別にもてなされるのは有難みもあるが、布衣を充分に味へぬ不自由もある。亦有難迷惑を文字通りに味ふ。

やがて發車した。支那時間となつた、め時計の針を一時間逆行させた。列車の乗務員は滿鐵の者と交代した。春廣服の車掌さんは内地では見られぬ姿だ。

ふと耳をそばだてれば警鐘が鳴つてゐる。火事か、水難か、將又異變かと見廻しても一面の暗で火事らしくもない。水は陋屋を浸して居るが、寂

として静まり返つてゐる。國を離れて早や旬日近くなるこの旅窓に、耳近くカランコロンと聞ゆる此のえたいの知れぬ鐘の音は、何とはなしに滅入りそうな氣持ちがする。語る處によれば、滿鐵では驛の發着にこの警鐘を鳴らすのだそう。何のためかはつきりは知らぬが、屯への發着をしらすと共に馬賊を豫防するためだとも云ふ。或は電燈の設備のないブラットフオームに居る乗客や驛員に對しての信號かも知れぬ。何にせよ寂しさをそゝる此の鐘の音に、内地より來た人は必ず一度は故郷戀しの思ひを一入にするとの事だ。無理もない事だ。僅か十日の旅の身でさへ、而も寢臺に納つて居乍ら、雄圖に潤の來すを感じる位だ。まして百千の事情で、故郷を涙と共に別れ、なれぬ天地に起伏する日がかさなるにつけ、この鐘が故郷戀しとなりわたるのも尤もな事だ。

奉天

例の故郷戀しの鐘がなり出した。雨はやんで、すがすがしい朝の風が面をうつ。見れば大きな驛がある。これが奉天かと思ふと假のまどろみ乍らも、意外にもあさかつた事よと嘆きたくなる。

入場券なしに自由に出入の出来る驛頭に立つと、放射状の市街には早や支那人が喧しく商賣をはじめてる。カツカツと蹄音高く集つてくる馬車の馭者はと見ると、或は長髪巨軀の老露人、或は紅顔可憐の洋童、さてはナツバ服の支那人等色とりどりだ。乗合自動車の運轉手もロシア人らしい。毛唐崇拜の氣分がぬけきらぬ人々の眼には、異様に映るのも無理はない。舊式の自動車は立派な歐風の市街地を縫つて走つて行く。これが日本人専用の土地かと思ふと、心強さと淋しさとが同時に湧いて來る。支那人が

多く見うけられるのも海外氣分と云ふのだらう。

附近の住家は皆赤煉瓦である中に、唯獨り瓦ふきの日本流に見える管理所に入る。管理所を建てた時代には、附近には全く人家がなく馬賊の出沒する野原だつたのだ。それで今の様な住宅に對しての制限もなく、自由に建てられたのが此の日本流の家なのだ。扱て内部に入ると、内地氣分といふよりも大和氣分の充滿した所だ。參拜してすがすがしくうちくつろいだあとで、先着の後藤總一郎君と話す。これは思ひまうけぬ事であつたが、忘れ得ぬ懐しい思ひ出となつた事なのだ。

奉天の町は大體内城、外城、商埠地及び附屬地の四部分に分れてゐる。内城とは城壁の内部を指すもので、他の部分は壁外にあるのだ。而して内城、外城とは支那人街で支那の統治の下にある所、附屬地とは滿鐵の附屬



地で日本の勢力範圍に屬し、商埠地とは一種の不完全な租界の様なもの、外國人の居住及び商賣を許してゐる特別區域だ。色々な統治がしかれてゐるのも奉天の一特色だらう。

午後は所謂内城見物に出かけたが、マスクをかけた鼻にも異様な臭ひが入る程のひどい所だ。それでもその街路にならんでゐる店頭で、ほこりと蠅とで色が變る程洗禮されてゐる食物を喰つてゐる人々を見ると、どんな事をしてでも暮せるものだと思ふと共に、我々の生活程度は高いものだなと思ふにはをられない。

鐵筋コンクリートの百貨店吉順糸房の露臺より見下ろすと、南滿の覇府は一目に見られる。一言にして言へば灰色の城壁にかこまれた灰色の町が即ち奉天で、その中央に唯獨り蔓を光らしてゐるのは、昔の宮殿、今の張作霖の軍營であり役所である處だ。此の廣々とした平原の中で、特に此の

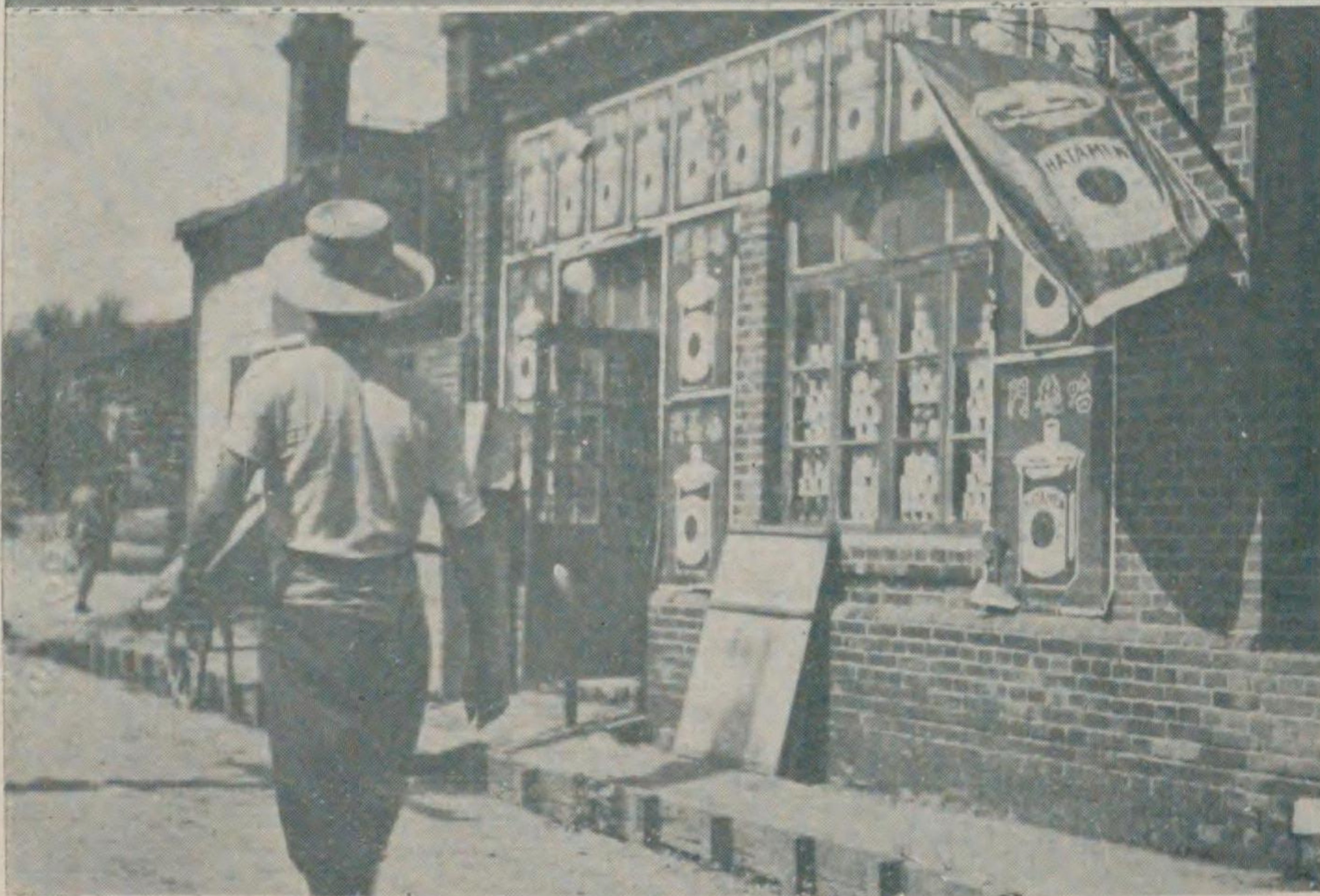
地を卜したのは何故だらう。今や時めく張氏が、どんな風にあの軍營にを
さまつてゐるのだらう。門外漢の好奇心はしきりと動いた。

自動車は神経質な金切聲を立て乍ら、人々に黄塵をあびせてゆく。道ゆ
く人の殆ど全部が平氣のへいざで、無神経らしく口をポカンと開けて送迎
する。中には洋装の美人もあるが、數へても退屈する位だ。一番多く目に
つくのは何と云つても軍人だ。しかし軍人と云つた所で日本の概念ではあ
てはまらない。將校らしい者でも丸腰でポカンとしてゐるのだ。他はおし
て知るべしだ。それでゐる虎の威を借るとでも云ふのだらう、泰平な横着
そうな面をしてゐる。成程亂國の様だと思はれた。

張作霖の役所や、白い洋館の私宅には、武装した連中が立つてゐるが、
それも數人かたまつてゐる處が支那式ではないかと思つた。身分のある人
の外出とでもなると、自動車に數人の軍人がぶら下つて護衛してゐる姿を



景全奉りよ臺露房絲順吉城内



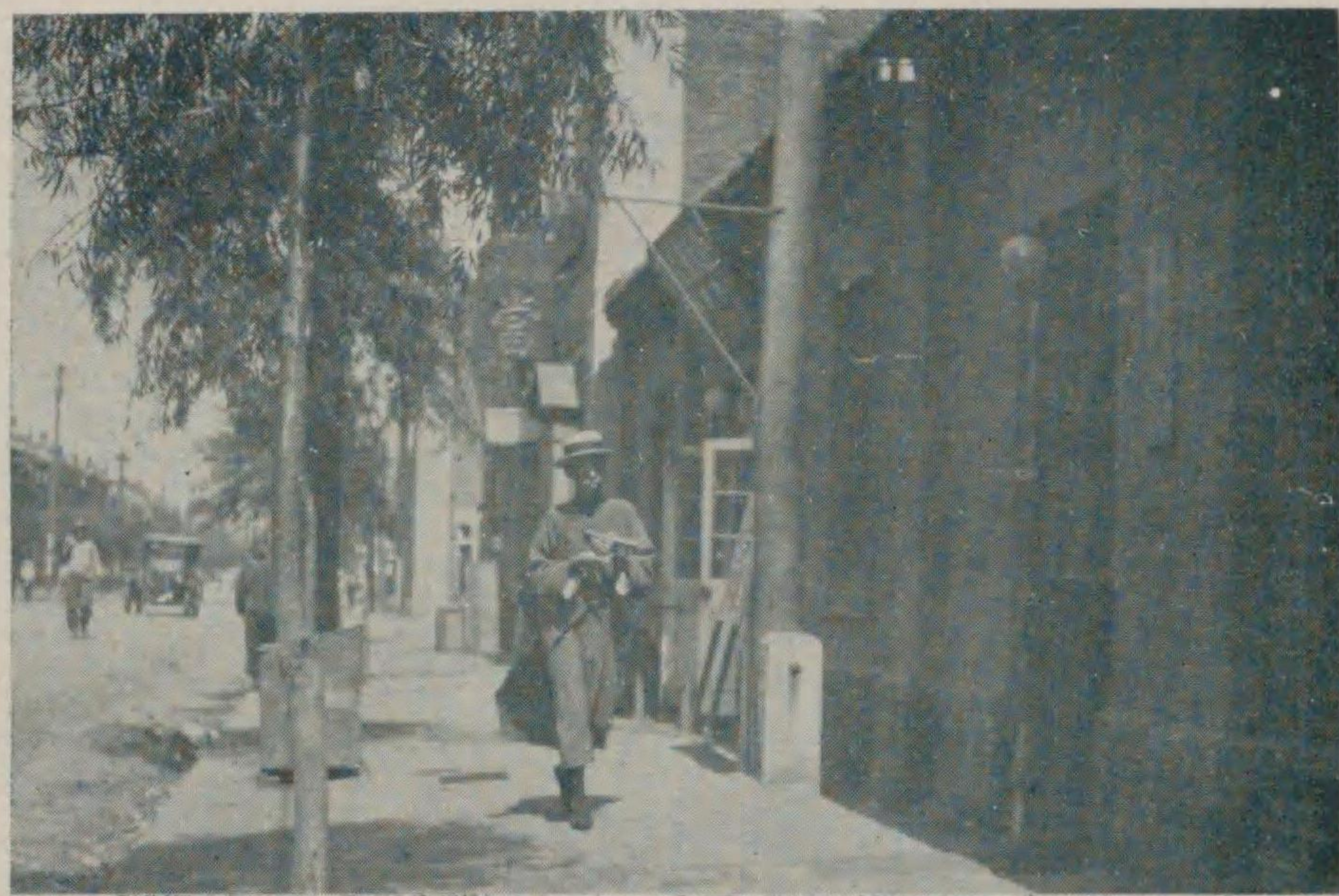
(店替兩)街人那支地屬附 天奉 (上)
 (店草煙)上 同 (下)



(所理管教布洲滿)廳道傳天奉 (上)
 街人本日地屬附 天奉 (下)



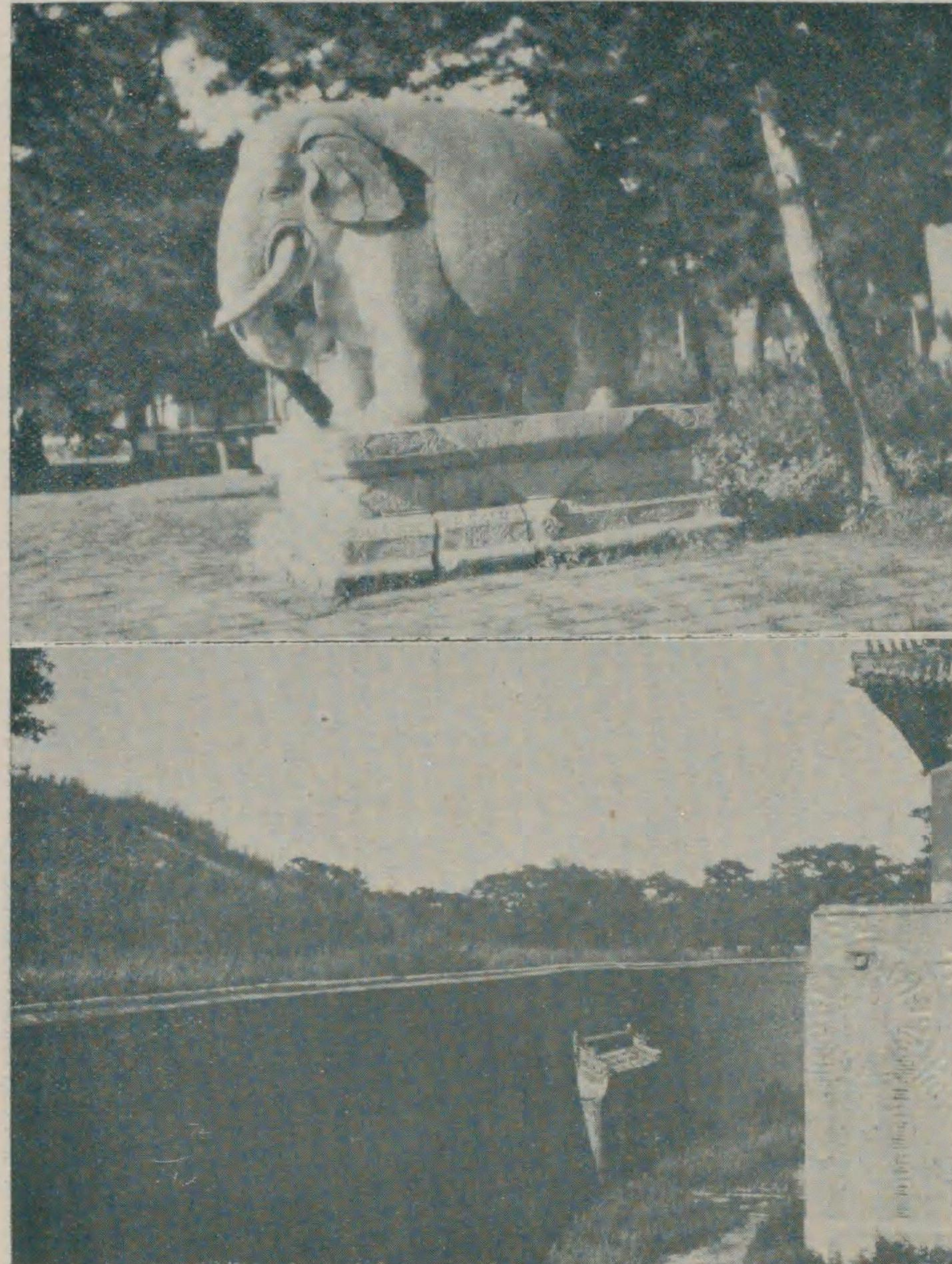
(頁六四)牧放の野廣 天奉(上)
道悪るす没を軸車 天奉(下)



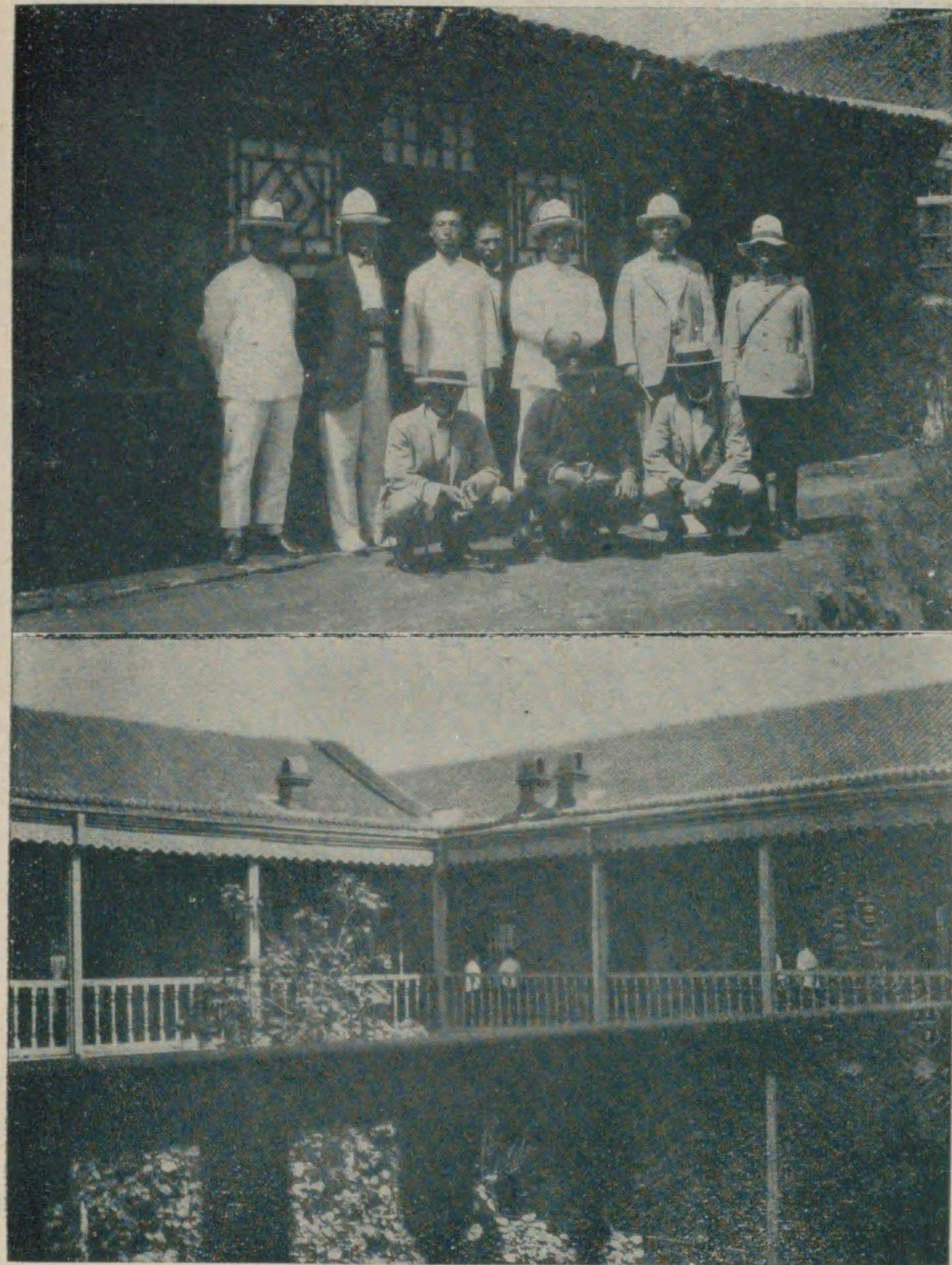
(店質)街人那支地屬附 天奉(上)
(髮理)上 同(下)



奉天第二小學校



奉天(上) 北陵(石象)
 (下) 同(上) 隧道路口



奉天 女子師範學堂

よく見かけたが、（特に北京にて多く見受けた。）数の多い方が強いと思つてゐるに違ひない。水鳥の音でなくとも蝗の大群を見たゞけで腰をぬかす事だらう。又見方によると此の様な大儀をしなければ安眠も出来ねば外出も出来ぬ人は、如何に天下を取つたとて不幸な者ではなからうか。或は川原乞食の方がのんきな果報者かも知れない。

黄塵を十二分にあび、茶碗蒸をかきませた様な城内を後に、道中廣い商埠地に來て、初めて幾らか氣持を回復する事が出來た。やがて奉天神社と表忠塔に參拜して歸館す。

椅子に懸つてくつろぐに従ひ、色々な事柄が次から次へと浮んで來る。私が此世に初聲をあけた時分は、血腥い風が此の曠野に漲り、同胞幾萬の精靈は鬼と化して、永久に此地の守りとなつたのである。其の表忠の塔の大いさはその力が如何に大きかつたかを表すものと思はれる。然るに、此

の血と肉とによつて得た滿洲の特權は如何に保持されてゐるのだらうか。武力で得た此の貴重な權利は、その後如何に進展してゐるのであらう。多くを話さなくともよからう。附屬地に侵入して來る漢族の數が日々に増加し、退嬰的な日本人を經濟的に大いに壓迫してゐるのである。然らば此の占領地に移住した日本人は如何なる者であつたのだらう。一言にして云へば、内地をやむなく流れ出た、所謂、喰ひつめ者が大多數で、さもなくとも利權のみ漁らんとした者が多いのである。彼等は勞せずして益のあつた時が忘れず、何日迄もその氣風に浸つてゐる時、一方漢族は大陸的な氣風を以つて、又その特有の經濟的才能を利用して、戰禍絶間なき中原を見かぎり、滿洲の曠野に手を入れそめたのである。されば彼等の心には恐らく故郷に錦を飾らうといふ慾望もなからう。只管身の安定を得て拜金主義を徹底せしめるのである。戰敗國であり乍ら戰勝國民を壓迫してゆく彼等

漢民族を指して、世界の異例なりと云つた人もあるが、これはよく支那人の氣分を云ひあらはしたものと思ふ。嘗て漢族には決して土地を賣るなと命令された蒙古に於てさへ、今日では如何に多く漢人の土地が耕作されてゐるかを見ても、漢族の長所がうかゞはれるであらう。又手近の奉天の附屬地を見ても、日本人は身分不相應に體面の維持を要求されるため、且成功者の或者は故郷へ錦をかざるため、その眼貫きの大通りを遠慮もなく支那人にあげわたす者、年を追ふて増加するとの事である。これは支那人が生命財産のより安全な附屬地に集る故からでもあらうが、一面明かに移住日本人の心の歸着點、及び一致點を失つてゐるためではなからうか。武力征服の時代は過ぎ去りつゝある。而も在留邦人の唯一のたのみは守備兵だと聞く。識者は奉天神社を鎮めまつりて人心の歸趨をはからんとした。しかも千種萬別の人心を充分に結合し得ないのである。此處において我等の

使命の如何に意義ぶかいものなるかを感じずにはをられぬ。獨り日本の爲のみならず、世界人類のためである。

——萬感は尙も走馬燈の様に頭中を往來する。——

今日の行動で思はぬ不覺を取つた事がある。それは、言語不通の嘆である。國を出る時、同文の國だから筆談で事足りぬ事もあるまいと高をく、つてゐた。しかるに住民の大部分は一丁字もなき人々である。且つ突嗟の間には筆談はどうも出来ぬ。和久田君の勞を多とすると共に、つくづく傍で馬鹿づらさけてゐるのが嫌になつた。實際洋車ではしる事も出来ない。言葉不通で完全に相手出来るのは喧嘩位のものだらうとつくづく感じた。

夜は誰かのすゝめにそゝのかされて、支那服をきこんで月下に出る。同行は野郎三名と和久田通辭。辻馬車を驅らせた御者の男、ジロくとながめてはしきりに話しかけるが、何の事かさつぱり解らぬ。和久田通辭の言

ふ所によると、自分の着用に及んでゐるのは立派な貴人の服だそうである。御者君等にはあまり縁のない服なのだ。そこでよくうつるとか何とか云つて話しかけてゐるのだそう。しかも自分は話されてもだまつてゐるので變に思つてゐるらしいから、此の人は南方の人で北京語は一寸もわからぬと説明したとの事。いよく尻のすわりが悪い。

アスファルトの上を轍の音かるく、哀調のあるベルをならし乍ら月下をゆく時、夏とは云へ涼風が肌をなで、何とも云へぬ情緒を味ふ。快々の！馬は鹿の様に馳る。蹄は氣持よく鳴る。車體はゆれる。月は笑ふ。思はぬ所でゆたかな情緒を味つた。

奉天第一夜は耳なれぬ物賣りの聲に驚かされた。

『キウリマイマイ』

奇な節をつけてさわぎ廻つてゐる。物靜かな、寧ろ寂寞を感じるやうな鮮土を渡つた身には、漢人は活動的だと、一入深く感じたが、氣持はよくない。その何者かの判断に苦しむからだ。一寸日本語の様でもあり、他國語のやうでもある。説明されてわかつた事だが、胡瓜賣の呼び聲は半日本語半華語なのである。彼等の如何に努力的に商ふかは以て知るべきであらう。

舊式の箱自動車に乗つて總領事館を訪れ、漢人の學校を參觀したいからと申込み、次いで小河沿と稱する支那公園へ行つた。公園とは名ばかりで内地人には場末の盛場と云つた方が早わかりする様な處。名物の蠅が處嫌はず飲食物を侵してはゐるが、一向平氣な人々で一ぱいである。兵隊さんが一番多數で目立つが、中流以下の男女も可成り多いやうである。流石に鮮人とは異り、ゴロムと寝そべつてゐる人は少いやうだが、何か食つて

ゐない者はベチャベチャとしやべつてゐる。唐人のねごと、でも云ふのだらう。その騒々しい事はお話にならない。中には賣卜者の前に物思ひに沈んでゐる壯年の男も可成り見うける。戀の痛手かも知れぬ。

通りすがりに我々を目して『ヨボヨボ』と呼ぶ者がある。此の事は北京やハルビンでは度々出喰はした事だが、鮮土と別れて間もない私に取つて、而も鮮人とは判然と區別が出来得るものと自覺してゐる私に取つて、此の最初の呼びかけは少からず面喰はされた。と同時に、日本の勢力の濃厚な、且内地人の數多居る此の土地でさへ此の調子だから、海山萬里の異國の空では支那人と見違へられるのも無理もない事だと思はれた。まして彼等支那人はその舊き文化に於て、我々日本人よりも早くより、廣く世界中に紹介されてゐるのであるから。

何處へ行つても塵と臭氣には暑さ以上に苦しめられた。もし此の二つ

がなかつたならば、如何に愉快に、且つ詳細に彼等の内状にふれる事が出来ただらう。否此の大きい希望を以て、又此の好奇心の強さを以て當れば、左様な障害も反つて有難い経験なのだが、しかも前途の長い鐵路の旅を思ふと、まだ若い心には餘儀なく我が身案じの消極的態度を取るより外ない。且つきりつめた日數で豫定の行路を終へるには、出来るだけの便宜的手段も取らねばならない。節を曲けて一行と共に豫防注射をうける。注射によつて自ら安心するといふよりも、一般の人に安心してもらふためのものなのだ。醫者の注文通りに節制の守れぬのも自分には理由がある。

「毒を以て毒を制する。」とはよく聞く言葉であるが、注射後の徒然さをつぶす爲の銷夏法として北陵見物を決行する。幌馬車を驅るには時間がゆるされぬから自動車を走らす。汽笛を騒々とならし乍らやつと城外へ出たと思ふと、さあ事だ。天井に頭がつく時には、臀は座席をはなれてゐる。而

も間斷なく上下左右とゆられるのだ。十數間後の僚車は後塵を拜して例の黄塵の中に隠されてゐる。道ゆく人も馬も、頭と云はず衣と云はず、所きはらず土塵で粉をふいてゐる様だ。悪路も此處までくれば、全く愛嬌である。車軸を没するとか黄塵萬丈とかよく云はれるが、必ずしも垂涎三千丈式の唐人の寢言とは思はれぬ。朔風にさそはれて襲つてくる此の塵の様も想像に難くはないし、雨のため戦争を中止せなければならぬと云ふ話も成程と思はれる。一方高校時代に無類の悪道ときめてゐた阿部野街道や堺街道も、此の土地の人に見せると、立派な道路と思はぬまでも余程氣持よく歩くだらうと考へると、何とはなしにおそろしい様で、あはれつぽくなつて獨り失笑される。

數知れぬ荷馬車に邪魔されながら、冬の燃料となる山積された張氏の軍用薪の傍をすぎ、豚羊の草喰むにまかされた墓地を横切り、限りない野面

の中を凸凹に走る。今少し手を入れると、如何にも心地よいドライブ道となるものと思ひながら、前方を見れば牧童の追ふ一群の羊牛。カメラをさめたく思ひ降りて構へると、彼童私に近づいてしきりにしやべり、レンズの前に立ちはだかつて動かない。運轉手の力をかりてやつとの事で二枚とつたが、その童は金をくれたら撮らすと云つて邪魔するつもりで近づいて來たのだと云ふ話だ。此の牧童すらの打算的な態度に、折角撮つた廣野の放牧の雄大な詩趣も自づと消されて、氣まづい思ひ出の形見となつて了つた。

北陵に入れば流石王朝の盛時を偲ばしむるものがある。犠牲の變形か裝飾のつもりか知らないが。色々な大きな石造動物が參道の兩側にならんでゐる。馬、象、駱駝等皆大きな動物ばかりだ、日本の様に犬で我慢して居らぬのも支那趣味だ。冲天に聳える樓門の臺は陽炎しきりにもえて居るが、

鋪きつめた石が徒らに雜草にうもれ凸凹の甚しきを見るにつけても、時の力と人の力とを比較して考へざるを得ない。入口を守る少年兵にカメラを向けると上官が來たからと拒られた。封土を巡る城壁を歩き乍ら、明治の役に日本兵が此の上で食事を取つたと聞かされて、何とはなしに腹立たしく思つた。傾陽をあびて青丹に映える樓閣の内に大きな石碑がある。頌徳碑とでも云ふのだらう。殆ど永久的だと思はれる石に、朽ちやすい木の家をこしらへてあるのも變なものだ。未だ一度も開かれた事なしと物語る鏽ついた錠に守られた隧道は、清國王者の墳墓たるを示すもので、昔時の中夏文化を思ひうかべ、又今日の亂脈に比してしばらくは歩を止めたが、うながさるまゝに車上の人となる。途中喇嘛廟で音に聞く陰陽像を見たが、左程思ひを深くする程のものでもない。豫防注射の片手を變にブラ下け乍ら「熱が出て來た。」と顔をしかめてゐるものもある。何れにせよ、歩行さ

へ困難な田舎道になやまされ乍ら、東北大學の前を通り、ゆられく／＼て城内へ急ぎ歸つた。

あゝ荒城の夜半の月

めぐる杯かけさして

千代の松ヶ枝わけいでし

昔の光いまいづこ

幼時覺えた唱歌がなんとなく眼前に髣髴として來る。廣野の只中に城壁を高くして偷安の夢をむさほつた時代、幾多の詩人學者等によつて詠はれた春秋の歴史は旅行者の懐古とのみ残り、城壁高樓の廢墟は物語るに友なくて徒らに時を過してゐる。年々歳々相似たる人は生死するも、昔時の文化を只夢と見て、數多き宮殿寺塔の語り草を聞かず、反つてそれを以て糊口の資料とする民族なのである。時代の爲とは云へ、又歴代の惡政の結果

なりとは云へ、此の儘では廿一世紀には如何になる事だらう。取り越し苦勞が又頭をもたける。支那都市を最初に味つた此の奉天において、(後日北京にて一入肝に銘じた感想だが)榮枯盛衰は夢よりも淡いものだと言つた古人の詩を思ひ出さずには居られない。

此の文を草する一年後の今日、新聞はしきりに奉天軍の敗北を報じ、加ふるに張作霖の大元帥説さへ賑々しく世に出てゐる。之を思ひ彼を考ふるとき、奉天城内を闊歩してゐた兵士達の悲喜の情と、位を極めて亡ぶ歴代覇者の轍をふむ張氏の運命とを思ふ。「荒城の月」影淡きを如何にせん。

「荒城の月」と「ロシアダンスの見學」とに第二夜をふかし、明くれば城内に奉天第二小學校を參觀する。支那風の灰色の煉瓦にかこまれた穢はし

い屋内にある。紹介状により、校長の案内にて隅なく參觀したが、和久田君を煩はさなければならぬ憾みがある。外國人の子供も机をならべてゐるのに奇異の眼を開き、紀念撮影に校長を共に撮つて、城壁外側の奉天女子師範學堂を訪ふ。

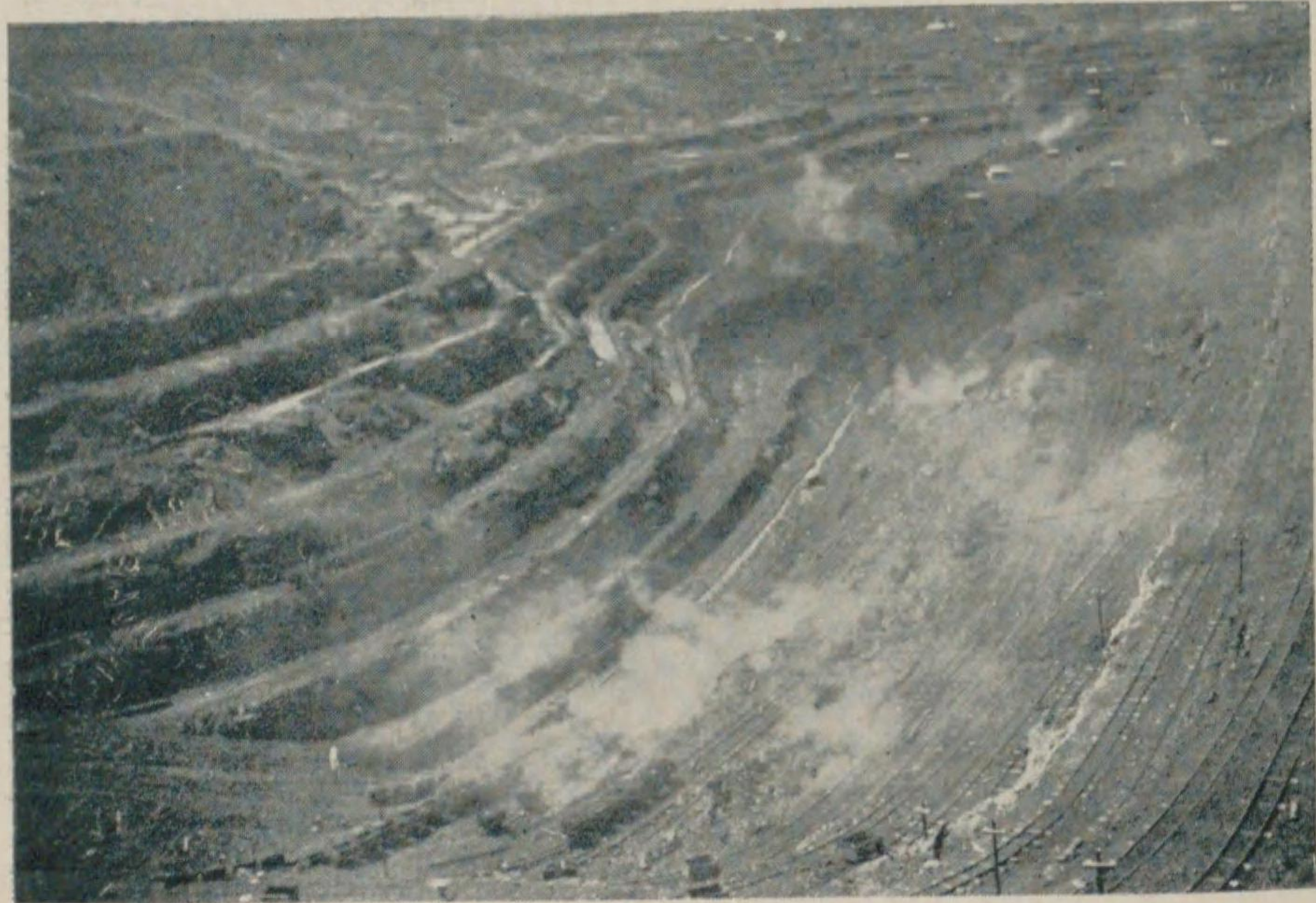
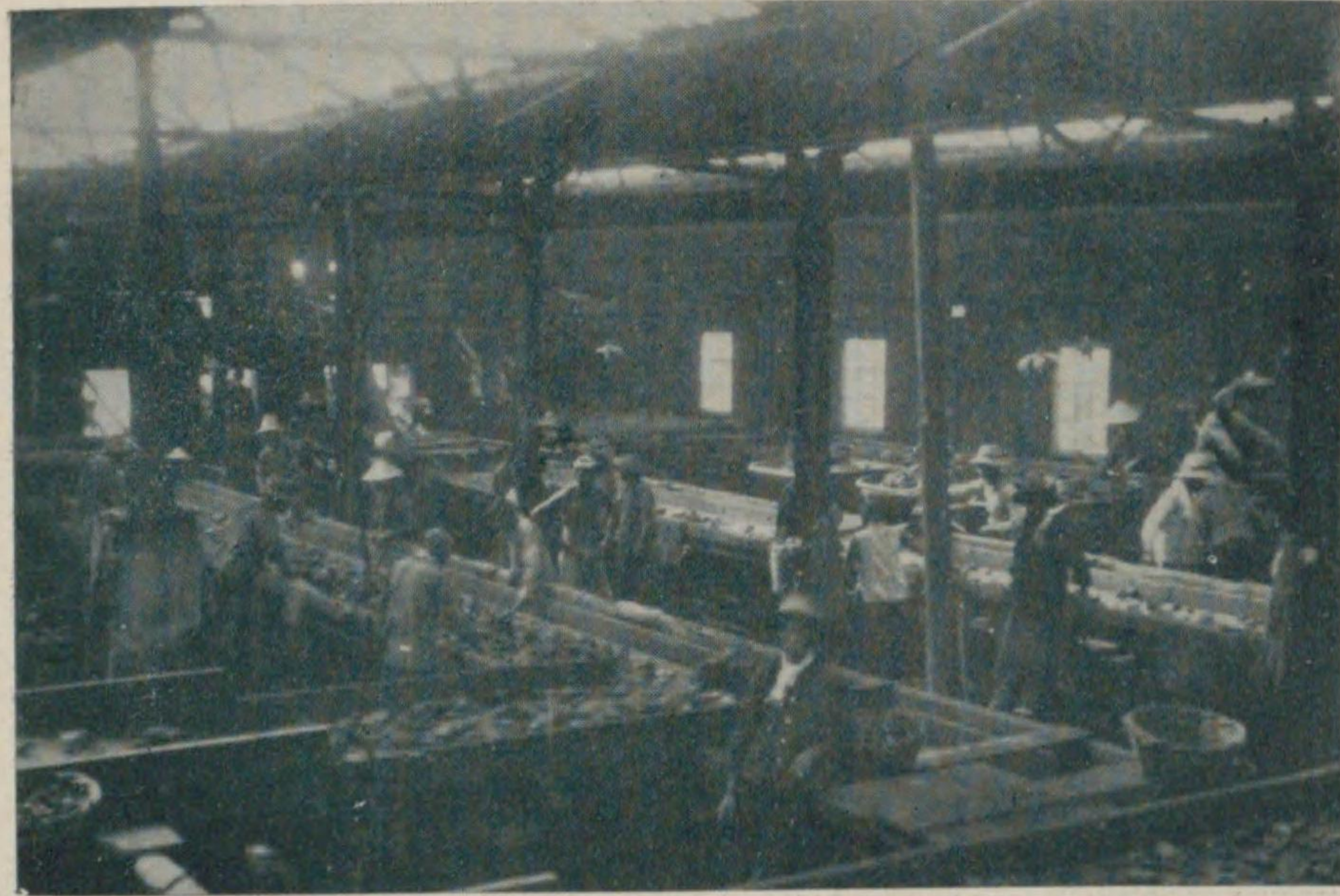
幸にも、此の校には東京高師出身の教師あり、日本語で案内されたため、詳しく聞き又尋ねる事の出來たのは今尙喜ばしく感じてゐる。即ち此の學校は張作霖の出資によるもので、女學校を併置してあるとの事、附屬の小學校まであり、生徒は多くはないが、遠方よりの者もあつて校舎の二階は教室、階下は寄宿舎となつてゐる。その舎たるや實に驚く外はない。疊一枚位の所が自分の席で、その上で寝もすれば勉強もするのだといふ。枕元は土間の通路となつて居り、中間に食卓兼物置(?)がある。見れば着衣のまゝ、横たはつてゐる娘もあれば、亂暴な風采をしてゐるものもある。又

食卓の上に靴とか洗面器とか、雜然と置き散らしてある。これが儒教の國の娘達かと思ふと、日本の娘の方がまだく、いくらかましだと思ふ。

次いで附屬幼稚園を見せてもらつたが、此處でも頭髮の一部をのけてあるものが多い。この風は支那人間によく見る風で、一昨日來不思議に思つてゐた事なのだ。例の先生に聞いて見た所、『今迄辨髪だつたのが急に散髪にした爲に、親達はその子の頭を玩弄するに都合悪いから一部分だけかけてあるので、何も意味はない。』との話だ。得心はゆかなかつたが、それも理由の一つかなと思つて面白く聞いた。先生は言をあらためて、彼の理想抱負を語りだした。『支那にはまだく、舊思想があるため女子の運動等は一向に發達しない。且つ繪畫等もみな此の通りの舊弊なもので、新しい畫風は家庭に合はぬため、父兄に歓迎されぬからやむを得ない。日本の様になるまでには我々は余程の努力をしなければならぬが、又一方年限もか

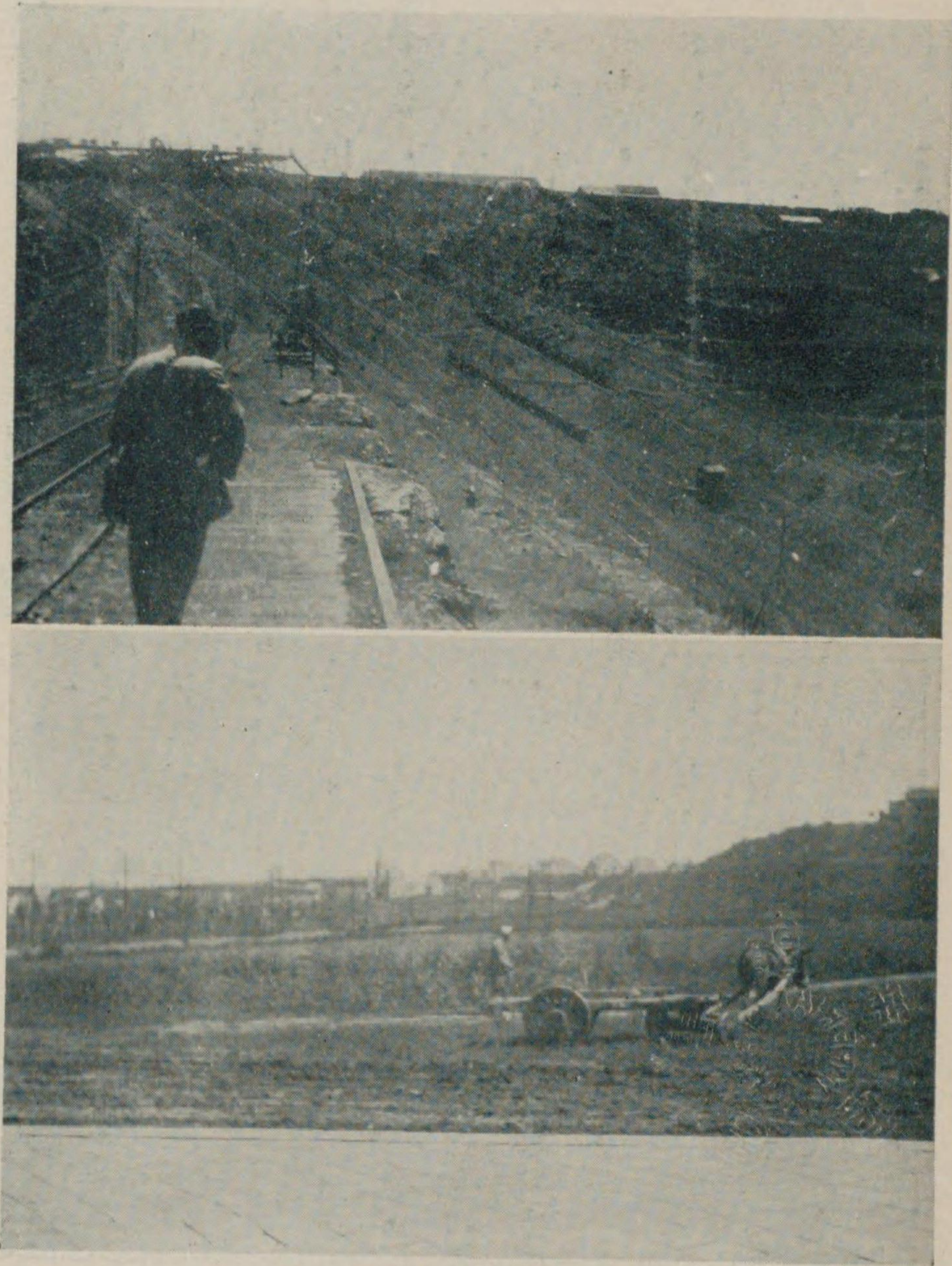
「るだらう。」とて成績物展覽室を見せてくれた。

奉天を去るにのぞみ、特に忘れ得ぬ事をかきのこしたい。それは去る三月迄同居してゐた和久田又治、悦夫婦との會合と、舊友後藤總一郎君との遭遇である。丁度七月末であつた。後藤君がおぢばへ歸つて來ての話に、これから滿鮮へ旅行するとの事で、滿洲へ來てゐる事は知つてゐるが、旅程の都合上遭へぬと思つてゐた。所が京城への電報で後藤君が奉天で待つてゐる事を承知し、次いで奉天驛頭に迎へてくれ、かつ共に話した事は、自分の旅情に云ひ知れぬ力をあたへてくれた。且つ獨身ハルビンを訪れた經驗談に強く刺戟され、ハルビン行斷行を決心せしむるに大いに効があつた。次いで後藤君は私達の通つて來た朝鮮へと立つた。彼の立つに及んで驛頭に見送り且つ朝鮮の談を分ち得たのは又痛快な思ひ出である。



所炭撰 坑炭順撫 (上)

(頁七五)午正の堀天露 上 同 (下)



コツロト降昇力電堀天露 (上)

見散順撫 (下)

和久田君（むしろ又光といつた方が情がうつる。）の一別以來三ヶ月の生活は知らないが、その語學の力は幾分たのもしく思はれた。吉順絲房における支那人の又光に對する歡迎振りは驚くよりもうれしく思つた。且つ普通案内以上に立ち入つた見學を得たのも、又光の力が大いにあづかつて力あるのだ。又歸途お悅ちやんの態度も今回の旅行を彩つたうるはしい一滴だらう。エピソードとして時々其の場面が思ひ出される。

撫順

日程がきめられてあるので少々疲れ氣味ではあるが、撫順炭坑を見學に出かける。元來、撫順は、文明の華かな生活文物とは風變り、その基となるのだが、何の味もない石炭堀りだし、やれ東洋一だの、やれ日本人の世界的事業だの、やれ滿鐵の弗箱のと、あまり人々が口やかましくほめたので、内心所謂敬遠主義にかたむき、オミットしてもと思つてゐたのだが、來て見ると、どうして／＼滿鐵の弗箱であり、日本人經營の可なるものとして見のがすべからざるを説かれ、あたかも滿洲に來て撫順を見ないのは龍宮に入つて乙姫様にお目にかゝらぬ様なものだときめつけられるので、成程とさとする所あり、見學に行くことにした。萬餘の人々を使用してそれに住居を供給し、衣食の便をはかつて大規模の組合をつくつてゐる

等、内地には他に例のない事で、しかもすべて日本人の計畫になる市街である點等も、此の都市の世界的誇りだ。今や炭坑擴張のため巨萬の資を費して舊市街を新市街にうつしつゝありとの事が、大いに私の好奇心をそつたのである。

汽車は鐘をならし乍ら奉天郊外に出たかと思ふ頃、ふと見れば小さい河の鐵橋の兩側に圓筒形の壘状のものがある、聞けばこれは鐵橋を保護する爲のもので、平時は馬賊にそなへてあるのだそうな。一旦緩急の場合を偲ばすと共に武斷的平和状態の植民地氣分を濃厚に感じた。勿論北は長春より南は大連に至る滿鐵の主なる鐵橋には皆此れがついてゐるのだ。

名物の高粱畑と大豆畑の中をはしる無聊さは暑さよりもたえがたい。幸ひ京大軍事研究團の一行と同車して、高校時代の郷友戸尾君等と話すことを得て大にたすかつた。君は例の元氣な口調で、彼近來の哲學を説き、最

後に、『將來のオレタンの天地は滿洲だ。』と云ふ。又『旅行團中の靜寂黨の一人で昔の様にさわがないので皆感心しとる。せやで。』と一人で自家廣告をやつてゐる間に撫順驛内へと入つたので、運あらば北京か天津でと再會を約してわかれた。

驛長の案内で坑内の電車に乗る。多くの信徒と異國の熱下に相會するの
も一種の納涼だと強く感じた。外部の熱度以上の熱を内心にもやすとき
外的の熱さを感じなくなるのは物理學的にも説明出來よう。しかも信仰生
活を味へるものにはそれ以上の根據があるのだ。今更乍ら水を冒して夜中
出むかへてくれた安東の信徒達の心情が懐しくもよみがへつてくる。

滿鐵の好意で、特別仕立の電車で廻る事になる。車中では滿鐵の事業に
關しての概略や弗箱の現状、扱ては従業員の組合状態等の話を聞き、大陸
にはそれ相應にめぐまれた氣分があつて、島國根性の日本人でも、やれば

大きな事もやれるものだなと感じる。車窓はるか丘上には今や計畫中の
新市街の新家がポツリポツリと聳えてゐる。

やがて名高い露天堀へと來た。丁度正午の爆發時だといふので、信號所
では白旗をかゝけ各所で鐘をならして知らせると、豆粒大の坑夫等はみな
避難所にかくれた。蛇行してゐた坑車も一時に停車してしまふ。やがて旗
は赤色のものに變つた。と發火演習でも見るやうに白煙と共に大音響が各
所に相次いで起る。石炭の飛び出す様、其状態は決してペンではかゝれぬ。
カメラの力をかりる事とする。

特別電車は時間でしばらくは残してゐる。後に心を残し乍ら車中に歸り、見返
れば赤旗が竿頭にヒラヒラと無心な姿を示してゐる。ふと死刑執行の黒旗
の事が思出されて心は次から次へと空想を追つてゐる間に、所定の晝食場
所であるクラブへと着した。

クラブは舊市街にある。注意されてよく見れば壁等に龜裂がある、丁度地震に遭つた家の様に。此の市街下が全部石炭だそうである。而して縦横に炭坑が掘られてあるため土地が年々陥落するので、此の様に龜裂がゆくのだ。これだけでも危険だし、尙此上石炭をほるにも横坑ではいよく、人家があぶない。石炭はほしい、命をしい、そこで遠大の計畫の下に地上の住家を移轉せしめ、數十尺の土をはねのけて露天堀にする方が算盤に合ふので、大けさな移轉にかゝつたとの事だ。石炭を掘るために彼等は集つて此處に市街を作つたのである。然るに彼等は生活のために終にその居をあぶなくしたのだ。『毒喰や皿まで。』とよく云はれるが、如何にも皮肉に思はれた。

午後からは歩行して色々な機械場なり撰炭所等を見る。大山坑の縦坑に下らなかつたのは残念だつた。又坑夫の大半は辨髪だ。日清戦争の繪巻物

を思はしむ。汚はしい市街、面相のよくない人々の群れ、騒しい會話等、炭坑町の氣分を充分に見られたのは嬉しかつた。

歸途造營半ばの新市街を通る。赤煉瓦の長屋に社員を收容してゐる姿は内地にもあまりあるまい。宣教所もやはり町に相應しい造りであつた。

奉天歸着後支那料理を御馳走になつたが、その不潔なものと疲勞とで料理は咽喉を通らず、いらいらと歸宅に及ぶ。

ハルビン

八月二十二日と云へば内地では酷暑の候であるが、滿洲でははや秋口にかゝつたと見え、朝鮮で味つた程の熱苦しきもない。釜山より京城迄の車中で、此の調子ではハルビン迄行け相にもないと思つたのは全くの取り越し苦勞で、八月下旬にはすでに秋風の味へる土地である事をしらなかつた爲である。

午後三時といふ晝の最中に、いよくハルビンに向つて出發する。豫防注射の加減で皆相當に變な顔はしてゐるが元氣がそがれる程でもない。歸途には立ちよらぬ事になつてあつたから、見送る人も見送らるゝ人も色々な表情をしてゐる。警鐘と共に汽車は灰色の町奉天を後にする。當分は見をさめかと思へば二日の歴史がなつかしい。昨日砂塵をあび乍ら訪れた北

陵への道には相變らず、豚羊の群と、ガタガタとゆられてゆく荷馬車の影が見える。東北大學喇嘛寺等の遠景もなつかしいものである。

汽車は北へ北へと走る。しまりのない高粱畑の中にはさへぎる山もなく、川とても少き坦々たる鐵路の旅である。その音楽も一律で變調の響もないので、寝む氣をさそふ事甚だしい。手持無沙汰の連中、例により浴衣姿と變り、將棋にトランプに時を忘れる工夫をこらし、或は又晝寢に故郷を訪れて身を朔地に運んで居るものもある。公主嶺、四平街等三四の驛頭に出迎へをうけ喜びを分つ。

『赤い夕陽の滿洲』を如實に味はつたのは此の北上車中である。

限りなき高粱の平原に入る赫然たる陽影、草に出て草に入ると詠はれた武藏野の昔を偲ばす。否武藏野に數十百倍するこの土地の夕陽は、開闢以來此地に吸収された幾多の人血の反映ではないかとさへ思はれる。ジんギ

スカン、女真國等の蠻史より日清日露の戰役史に至る迄、此の土地に血を流した物語ばかりではないか。彼等、所謂成佛せんとしてなし得ず、西方億士の淨域に向はんとして今一度此の世を見返へす流血の姿が、此の夕陽にあらはれてゐるのではないかとさへ思はれる。空想は追へどもく限りのないものである。

夕昏漸くとざす頃、多數に迎へられて長春に着いた。滿鐵線はこゝで東支鐵道に聯絡するのだ。長いブラットフォームを歩む内、又もや國境の感に襲はれる。日本兵、支那兵、露人等混然と警戒してゐる。まして東支線車中は言語不通の支那兵で出入も自由でない。一々名刺を求められ保護する旨を聞かされた時、これから外國旅行になるのだなと思ふと異様な緊張を感じた。

又もや時計を三十分、逆行さした。何となしに、實際と契約との矛盾を感じず。一等車中は美麗であり便利であるが、初旅の者には何から何迄皆不氣味である。肥つたボーイは親切にして呉れる様にはしてあるのだが、やはり氣味悪い。彼は何か聞いてゐるらしい。がさつぱり通じない。支那語と露西亞語は共に解らないのだから。やつとの事で『テイー』のみが聞き取れたので、『ニエツト!』と強く云ひ放てば愛嬌をふりまき乍ら出て行つた。實はこれが習つて來た露語の使ひ初めであり又終りとなつた。

東支線の汽車は警鐘を鳴らさない。又號笛も聞かなかつた様に記憶してゐる。ノロノロと發車し、又停車する。停車時間の長い事と、走る速力のろいやうに思はれるためか何時出て何時停つたのか明瞭^{ハッキリ}りわからない。車體がゴトゴトとゆれ、ば走つてゐるなと考へ、窓外に蠻聲を聞けば停車中だと思つてゐるより外ない。馬賊でもやつて來たらと考へると一行の大部分とへだ、つてゐる一等車に乗つてゐるのが反つて氣味悪く思ふ位だ。

扇風機をながめながら、色々な事を思つてゐる間に連日の疲れのためか、不氣味ながらもトロトロと夢路に入つた。

覺めて窓外をのぞけば思はず首を縮めた程、涼しさが寝起きの亂れ氣分を収縮させた。さてもく、北部に來るかなとあられもない事に感心してしまつた。官符をおびて拾數年匈奴の國にとらはれの身となつた蘇武も、此の邊を行つたのかなと考へてゐる間にハルビンへ着した。

ハルビン驛頭にも相當の出迎へを受けたのは心強く感じた。やがて朝の爽かな通りを北滿ホテルに入り、身の穢を流し、腹をつくつて小雨の晴れ間を見物に出たが、時々やつて來る小雨に北國の淋しさを深くする感がある。流石帝政時代の露西亞が巨萬の資を投じて、その帝國主義の東方第一の都として作つた植民都市であるだけ大規模なものであり、通行人の大部分が支那人或はスラブ人であるのも異様な感をそゝる。しかも歐風に潤歩

してゐる婦人達を見れば、日本婦人の服裝は如何にも不活動的に思はれるが、又云ひ知れぬ懐しきを感じるものである。

歐風家屋の下を通る人々の内、特に目立つのは巨大なる體軀の男女の多い事で、一行中の太人も目立たぬばかりではなく反つて可愛らしい。もし我等が太つてゐて暑いと云へるのならば、此のスラブの男女は身體が燃えたとでも云ふ権利があらうと思はれる。馬車も今迄奉天で見た様な小さい馬によつて曳かれてゐるものもあるが、大部分は大きな馬のロシア式とでも云ふのだらうか、馬の頭の所がアーチ形になつてある馬車で、可愛い少年によつて御せられてゐるのも目新しい。が一方には舊帝國時代の軍帽や軍服のボロボロしたのを身につけて、御者や乞食をしてゐる人々を間々街上看見受けたのには、何とも名狀の出來ないあはれをもよほされた。全く運命のいたづらであり、因縁の然らしむる處にはちがひないが、華かなる前

半世の生活にひきかへ、此の現在の生活、彼等は果して何れを夢と見てゐる事だらう。前半生が夢か今の生活が幻か。多分彼等にはかゝる考もなく唯パンのみを夢みてゐるのだらう。哀れなものは、夢に迷へる人達である。デパートメントストア、チューリンに入る。色々な雜貨はあるが、靴類や寫眞機の類は日本より、或は上海より陸送されたものであるから、一向にお安くない。毛皮や寶石は安いとの事だが、夏でもありあまり心を引かれない。やがて啞の買物も切上げて荒い丸石をしきつめた街上をゆられ乍ら遠く郊外に沖、横川志士の遺跡を訪ふ。

その昔はるく北京を出で蒙古を通り、此の地に重大任務を帯びて來た志士が、今や虎穴に入りながら虎兇を得ずして刺された、恨みのこもる土地なのである。この處は、嘗て西伯利亞出兵の際、我が軍隊の營舎となつてゐた所で、廣大な練兵場や射的場のこつてゐるが、今はその跡に支那

兵が入つてゐるとの事である。

ロシア革命の勃發するやその植民地に於ける勢力もその手を離れ一旦は日本の軍隊によつて支へられたが、やがて撤兵となつた今日は全く支那人の統治下にあるもので、此のハルビンも表面は支那の軍隊、巡查によつて警備され、色々な名譽職も露人の手よりうばつたそうだが、それでも舊來の露勢力を全く抜く事は出來ず、實際に於ては露支等分の勢力だとの事である。東支鐵道の經營に於ても露人の技術を全く抜く事が出來ぬとの事だが無理もない事だと思ふ。

遺跡を辭して東支鐵道クラブに入る。新市街よりも少しはなれた所にあつたかと思ふ。爽々しい、公園風のクラブである。元來當地智識階級の露西亞人の唯一の俱樂部としてつくつたもので、圖書館もあればステーチも出來てゐる。晝はその廣々とした庭園で子供の教育(?)が施され、夜は

ダンスや演劇等の娯樂に明されるそうである。而して無節制な支那人の入場を制限する方法として入場料を取る事になつて居るのだ。平滑でない而も汚い街路を見て來た目には清爽感をふかくする。夕食まつ間に庭を歩けば若い女教師の下に一群の小兒が遊技をしてゐる。藍眼であり、金髪ではあるが子供の心理は一樣と見え、日本人の子供と變らぬ無邪氣ないたづらをするのも面白い。カメラを向けると坐り直して撮らす所は、朝鮮や奉天で未だ嘗て経験しなかつた所である。日本内地の子供でも儒道德でたゞき上げられた結果か、すなほに寫眞をとらす子供はまだ多くあるまい。この點にかけてはスラブ族は開けてゐる。

導かるゝまゝに閱覽室に入れば、多くの西洋の新聞雑誌が自由に見られるやうになつてある。しきりに讀書してゐる者もあれば西洋將棋に耽つてゐる者もある。庭に戯れる小兒よりは少しく大人らしいガールやボーイ達



街ヤカイタキ シビルハ (上)
 (頁五六 装和いし懐 上. 同 (下))



(頁八六) 技遊の兒小髮金 プラク道鐵支東ンビルハ (上)
 (上同) 供子なほなす 上 同 (下)



(頁二七) 院寺街市新 ンビルハ (上)
 (頁五六) 車馬ヤシロ ンビルハ (下)

によつて利用されてゐるのだ。隣室よりもれて来るソブラノの練習は耳の底までこたへる様に振はす。あんな聲をだしてよくまあ血をはかずに居られるものだと感心はしたが、上手か下手かは勿論わからなかつた。

食卓が開かれた。卓一面に色々な食物が皿に盛別けてある所は一見支那料理風にも見えて、西洋料理を加味された一種の東洋風の料理だと獨り斷定する。どれから手をつけてよいかわからぬが、空腹にまかせて盛にやつた所、これは唯食欲をつけるだけのもので本式の料理はこれから一皿づゝ出ると話されたのに少々驚かされた。名物のスープの様な、薩摩汁の様なものの味はスラブの氣風を思はず。下戸の身に火酒の味はわからぬが、これをなめつゝ、數知れぬ料理をつまみ乍ら夜明け迄喰ひ且つ踊る人々は、内地に居ては想像のつかぬ事である。或はスラブ人の消化器は牛の様になつてあるのかも知れない。



園公の頭埠ンピルハ (上)
前會商浦松 街ヤワゴルト (下)

夕暮れ近くなれば追々と子供が集つて來た。今日は子供達のために活動寫眞が上映される日なのだそうだ。誰か、下手ながらも完全な日本語で

『仁丹下さい』

と云つた。喜多さんはその所有を傾けてあたへると、たちまち洋童達は群つて來て争ふ様、恰も猿澤池の魚の様だ。直に品切れとなり引上げると、大勢のものは砂中にかくれた二三粒の仁丹を一心に探してゐる。仁丹の販路に感心すると共に、革命後の露西亞の教育状態、生活状態乃至營養状態が思ひやられる。此の子供達の多くは革命前後に生れた不運な人達なのだ。燈涼しく見ゆる頃ホテルに歸る。

ロシアは夜の國だとよくきいてゐた。又ハルビンの淫風もよく耳にしてゐた。されば夜になると裸ダンスが公然と至る處で行はれるものと思つて

ゐたのだが、今日では左様な事はないようで、唯午後七時以後は如何な人でも自由に踊り狂へるのだそうだ。その結果とでも云ふのだらう、此の地もスラブ風に正午より三時間は晝寝時間とかで、勤人は皆自宅に歸つて寝るそうだ。したがつてその時間は全市を揚げて商賣が休止されるわけで、これ等は内地では見られぬ事である。かくして待設けられた夜は、ある定つた時間以後は、ホテル、カフェーの如き或特定の商賣以外は何も賣買せぬ事になつてゐるのだ。而してあらゆる人々は晝の労働をうち忘れて、徹宵踊り通すのだそうだ。北滿ホテルにも、ステイヂダンスと社交ダンスとが行はれた。中世紀風の装をした女達が盛に踊る。彼女等は勿論専門のダンサーもあるが、多くは晝間は令嬢(?)や事務員だとの事である。旅行者には令嬢だか女優だかさつぱり區別がつかない。

明くれば二十四日、買物に自由行動を取る。新市街に行き秋林商會を訪

ふ。通譯の御世話にならなければならぬのは勿論である。新市街は東支鐵道の役人達が多く住む處で靜かな所である。最も目貫きの場所にゴシック式の尖塔が高く冲天にそびえてゐる。ロシア正教の教會であるにちがひない。

「外國人が植民するとき或は新開地を開拓する時、數箇の家族が集ると、必ず彼等は教會を計畫する。それ故に、その新開地が、一つの町になる時には既に教會を中心とした町が成り立つのだ。鑛山や、工業地に於ても同様だ。しかるに日本人が集り出すと第一に計畫されるのは料理屋だ。それ故に、日本人の新開都市の中央は大抵花柳界が占めてゐる。」と話された事を思ひだす。夜の都ハルビンに於ける此の教會と、奉天城外の附屬地とを比較するとき、先の言葉がひし／＼と思ひあたる。

午食はヨットクラブといふ松花江畔にあるクラブで喰ふ。ロシア料理と

獨逸ビールに氣焔を上げながら、ながめる濁流滿々たる大河の對岸の綠蔭に、白い物が二ツ三ツ。如何にしても氣は大きくならざるを得ない。志士の空しく恨を残した大鐵橋は少しく霞んで見えるのも物語りの様だ。

食後赤褐色の貨物列車がコトン、コトンと浦鹽さして走るを見乍ら、公園に向ふ。埠頭區公園とは云ふものゝ大して得る處もない支那風の公園だ。三人の巡查がのんきに歩いてゐるのも晝寢時間だからかもしれぬ。

夜行に乗る仕度も出來て後、未だ時間はある。天中出身の山口氏の案内で郊外のスタール・ハルビンの方へドライブする。市街を離れると兩側に並木のある田舎道を只管に走る心地や、手に手を取つて並木道を歩く幾組かの人々の姿等は内地では味へぬ所である。聽て停車せしめて廣野の眞中に歩み出た。シベリヤ出兵時代は我軍の練兵した所だそうだが、今は幽に支那兵のラツパを聞くのみである。レインコートの襟を立てポケットに手

を入れてゐるが尙涼しく感ずるは流石に北國だ。電光が雲の中で閃いたかと思ふと長くその尾を平野の端にたれて終る。内地の様に山の端にかくれるのではない。虹等は完全に近い圓弧を描くとの事である。雲はおどる、涼氣は身を引きしめてたまらなく嬉しくなつて來た。心行く迄に天理唱歌を歌つた時の氣持は多分たれにも想像出來まい。時々、の稻妻の外には蟲の音さへ耳に聞えぬ。此のスタール・ハルピンの散策は確かに忘れ難い形見であるのだ。

やがて十時の汽車に乗り日本の方に走るのだ。愈々踵を返したのかと思ふと元氣になつた人も多い様だ。一慷慨記者の訪れを受け又支那兵の騒しい中に心よりの見送りを嬉しみつゝ、北方第一線のハルピンとお別れする。

大連

さむい風に夜は明けた。小さい車窓より首を出せば高粱畑の細路に小馬に乗る滿洲人の服装も温か相に見える。獨り旅にハルピンを訪れた友の事や二等車の無禮極る支那人の横暴に思ひをはせてゐる内に、早くも寛城子站に着す。見れば武装嚴しい支那兵が堵列してゐる。長春はコレラの検査が激しいので多くの支那人は此處から下車して徒歩で長春に入るのだと、事、うそか本當かは何とも云はれぬが、兎も角多くの人が下車した。

次の驛が長春だ。成程検査が嚴しい。且つ又外國人に對しては旅券の検査もやつてゐる。迎への人の顔は見えても荷物も渡せないのは變なものだ。滿鐵車に入つてから食事をする。偶然にも陸軍大將武藤滿洲軍司令長官と同車である。嚴しい武装の下に汽車はどしどし南へ走る。偶々専務車掌

が信者で色々な便宜と説明とをしてしてくれる。車中の疲れを大いに緩和された事は非常に有難く思ふ。

汽車はもと来た道をひた走りに走り、やがて奉天を通過す。『では左様なら。』御機嫌よう。』との挨拶には云ひ知れぬ意味がふくまれてゐる。勿論此處を通過する時分には上海迄足を延ばすつもりだつたのだから。半月の後に再び奉天へ舞ひもどらうとは誰も考へては居らない。

湯崗子の一夜、温泉氣分は至つて稀薄な所だが、その代りか、支那ボーイに撞球術を教授された。何ぞ知らん、この餘技が大連に於ける唯一の暇潰し（？）にならんとは。

二十六日の朝は麗々と明ける。一同旅館前の小庭に集つて、はるかぢばの方を遙拜して汽車に乗る。目にふれる山野には同胞の流血を見ぬ所なく、遠近の山上には苦戦を物語る記念碑が聳立して居り、又昔時の塹壕の遺跡

歴然と佛を止む。朝鮮貫通中、盛であつた老人組（？）の日露戦話が又ひとしきり熱を加ふ。今はなき親族の名や武將の驍名を口に、その苦心を語り乍ら旅をする事は、或は怨をのんでうせた英靈を慰める唯一の回向かも知れない。遠近の山影より笑聲がもれてくる様にも思はれる。

やがて警鐘と共に大連に入る。今迄の風物とは事かはり、流石南滿第一の都會の佛、車中より見て明かである。豫想外に多數の信者に迎へられて旅の疲れも俄に軽くなる心地がする。滿鐵の好意により、その差廻しの自動車に乗つてヤマトホテルへと向つたが、道行く内地人の姿も、ハルビン直後の身には心嬉しく、まして堵列して迎へてくれた信徒の心は直に自分の心と思はれた。

洋風のホテル生活は旅なれぬ者に取つてピッタリと來ないものだ。勿論

ハルビンでも北滿ホテルといふ洋風のホテルに泊つたのだが、日本流の風呂もある所だし、食事等も不自由でないから、大して異風を感じなかつたが、此のホテルは全く調子が違ふ。宿泊料も食費とは勿論別だし、立居振舞は皆異様な外國風だ。唯日本語で事足りるだけが我が領土の延長の様な氣がするのみ。二十六日の夜を此の毛唐臭の中に終るのは何となく苦しい。よつて一同うちつれて日本食を取る事にした。

二十七日の朝は滿鐵の好意によりその自動車で市中見物をやる。そもそも大連は南滿洲の大御所たる滿鐵本社のお膝元であり、ロシヤ人の計畫になつた市街地に美事な日本製の洋風家を建設してある。學校圖書館病院から社員の住宅に至る迄、内地では見た事のない位整つてゐる様に見える。成程勞銀の安い地でなければ一寸實現のむつかしい事かも知れぬ。戰勝國の繁昌を思はしめられる。

しかしこの大連の心臓部は云ふまでもなく埠頭である。背後にひかへた廣野の産物を送り出す所は此の港を除いては外にないのだ。遼河の河口の營口等も凍結期には役にたゝない。埠頭事務所の高い露臺より見れば東洋に覇をとる港の設備は、巴里を真似たと云はれる市街より、遙かに麗しいものである。

説明者の熱舌は絶え間ない。輸送能力より港灣の増設等、巨大な數字を羅列されて海事にあまり明くないもの達は、全くお上りさん情緒を味ふ。説明者は更に冬期に於ける活動期の話をはじめた。天賦の少い滿洲の諸港はその能力を失ひ、獨り大連は格納しきれぬ大豆を普通より廣く造られてあるこの棧橋に、うづたかく露天に積まれるのである。まして嘗て浦鹽斯徳が時局のために休止の状態にあつた時には、北滿の物貨までが皆大連に集つたのであるが、今日では長春で荷をつみかへなければならぬ不便か

ら、やゝともすると浦鹽へ取られるとの事だ。かく聞く時には長春以北の鐵道を彼の手にのこした經濟的損失を痛感すると共に、軍人的愛國心が萌えるを禁じ得ない。

辯士の聲は一段とはり上げられた。

「かくの如く南滿否滿洲全體の物貨を集散し、又新に需要物を供給する、言はゞ滿洲の生命の鍵は此の埠頭に握られてあるのだ。しかも世界の驚異とも云ふべきは、かゝる仕事が決して外國の様に機械によつてなされるのではなく、人力により機械以上の能率を上げてゐる事である。見よ、無數に働けるあの華工を。機械的人間たるあの華工の無數に働ける様を。彼等は機械的人間である。彼等の勞力が當港の特徴であると共に生命とも見られるものである。此の珍重な華工の生活状態は至つて低く、二十錢足らずで一日は樂に生活し得る。且つ名を書きうる者は十人に一人か二人位で、

他は全くの一丁字もなく、文化の餘澤は殆ど受けて居らない。それであつて彼等は日々十時間余りも働き、一日五噸乃至十二噸あまりの仕事を行なうるのである。冬期になると山東地方より出稼ぎが雲集し來つて、いつはりの出來ぬ實力試験を経て埠頭華工として採用され、福昌公司に一手に收容されるのだ。その試験たるや普通の日本人では一枚も持上げ得ない様な豆糟を、數枚運搬する能力ありや否やを試されるのだ。かくして合格せる埠頭華工は他の苦力よりも上等なもので、繁期には一萬二三千人、閑期にても五六千人は居るのだ。此等の華工は日給五〇錢乃至一五〇錢位のものだがそれでも相當の金を得て故郷へ錦を飾る者も數多いとの事である。」

案内辯士の熱辯は漸次愛國的憂國的色彩濃厚となり、滿洲在住民の共通な、滿鐵的大氣焔となつてくる。彼は言葉を次いで、

「此處の華工は内地の勞働者よりも其思想に於て、約五十年遅れてゐる

故に、彼等は此れ程の薄給で満足してゐるのだ。しかし時代の力は如何ともすることは出来ない。既に上海では罷業が行はれた位だ。我が滿鐵としてもそろ／＼五十年後の華工を考へなければならぬ。見よ！向ふに見えるは人力によらずして石炭を積荷する機械で、試験的に採用されてゐるものである。今日でこそ能率は上らぬが今後においては大に期待されつゝあるものだ。滿鐵は内地の様な代議制（？）によるものではないから、かゝる遠大の計畫によつて事業を遂行する事が出来るのだ。此の灣も百年の後には此の倍以上の取引能力を發揮出来る様に着々と歩を進めてゐるのである。

今や此の百年計畫の下に着々進みつゝある此の事業は、將來に於ける滿蒙の鐵道網と相まつて世界第一の商港として列國をアツと云はせる覺悟である。即ち滿蒙に物質文明を普及せしむるは我が手にある責任だが、精神

文化の開発を我々は大きい天理教に期待してゐるもので、兩者相俟つて日本倭人の意氣を大に宇内に發揚したいものである。』

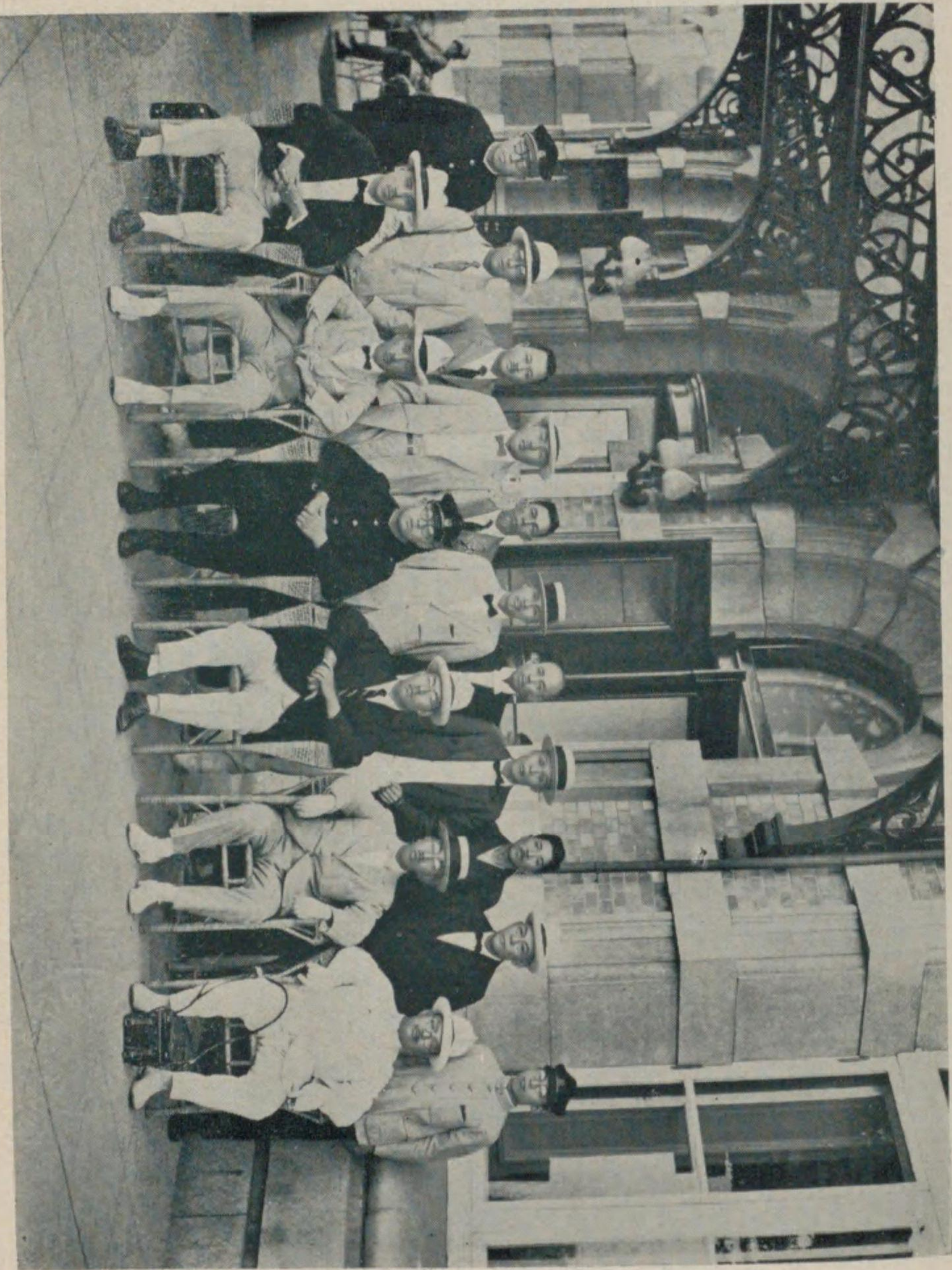
愛國的説明者の熱舌はその渴れるを知らない。きゝ入る者共彼をして今の地位におくを惜しまざるはない。彼に若し社長の地位をあたへなば……。

希望は理想を段々と空想化してしまふ様に思ふ。感謝をのべて、うながされる儘にホテルへ歸る。

午後より滿鐵本社に安廣社長を訪ふ。大した體格の持主ではないが、その眼光に異彩をうかゞふ。辭してより埠頭華工（埠頭では苦力の事を華工とよんでゐる。）を一手に收容してゐる福昌公司を訪ふ。蠅の多い支那街を通つて行くと煉瓦で築き上げた異様な樓門がある。碧山莊とあるも支那趣味だ。これが華工の合宿所かと思ふと、苦力だとして馬鹿に出来ないやうな氣がする。門をくゞれば中央に道があつて正面の鐘樓に通じ、兩側に行儀

よく宿舍が並んである。數へて見なかつたが九十五棟の宿舍と其他の附屬屋があつて一萬三千五百人位は優に收容出来るとの事である。病室もあれば購買組合もあつて飲食物から燈料日用品に至るまで皆そなはり、而も工頭(?)の發行する傳票で現品の授受をなして現金は使用しない。又彼等の好みを以て自由に裝飾された俱樂部や、支那民衆の歸崇する廟所天徳寺や太祖神等をも祭り、又不慮の死をとけたものゝ爲に萬靈塔をたて、靈を慰めてゐる等、よく注意されてあるに感服す。一鐘時をつけば何の訓練もない華工が立ち處に參集し來るかと思へば云ひ知れぬ神祕の力にうたれた。

時も時、異様な奏樂を先頭にして異様に慟哭する行列が來た。男女共に白衣を着し、丈餘の長い喇叭を先頭に吹奏し乍らオンオンと泣いて來る。例にはもれずその後よりは群集がぞろぞろやつて來る。好奇心をいやが上にそゝられて行つて見ると、太祖神の前にしばし働してぬかづき、又行列



大 和 ホ ル テ 玄 關 に 於 け る 一 行

井東。田久和。辻田村。田澤。郭高。藤高 (りよ右で向列後) 野平。多喜。善著。山中。谷深。佐土 (りよ右で向列前)



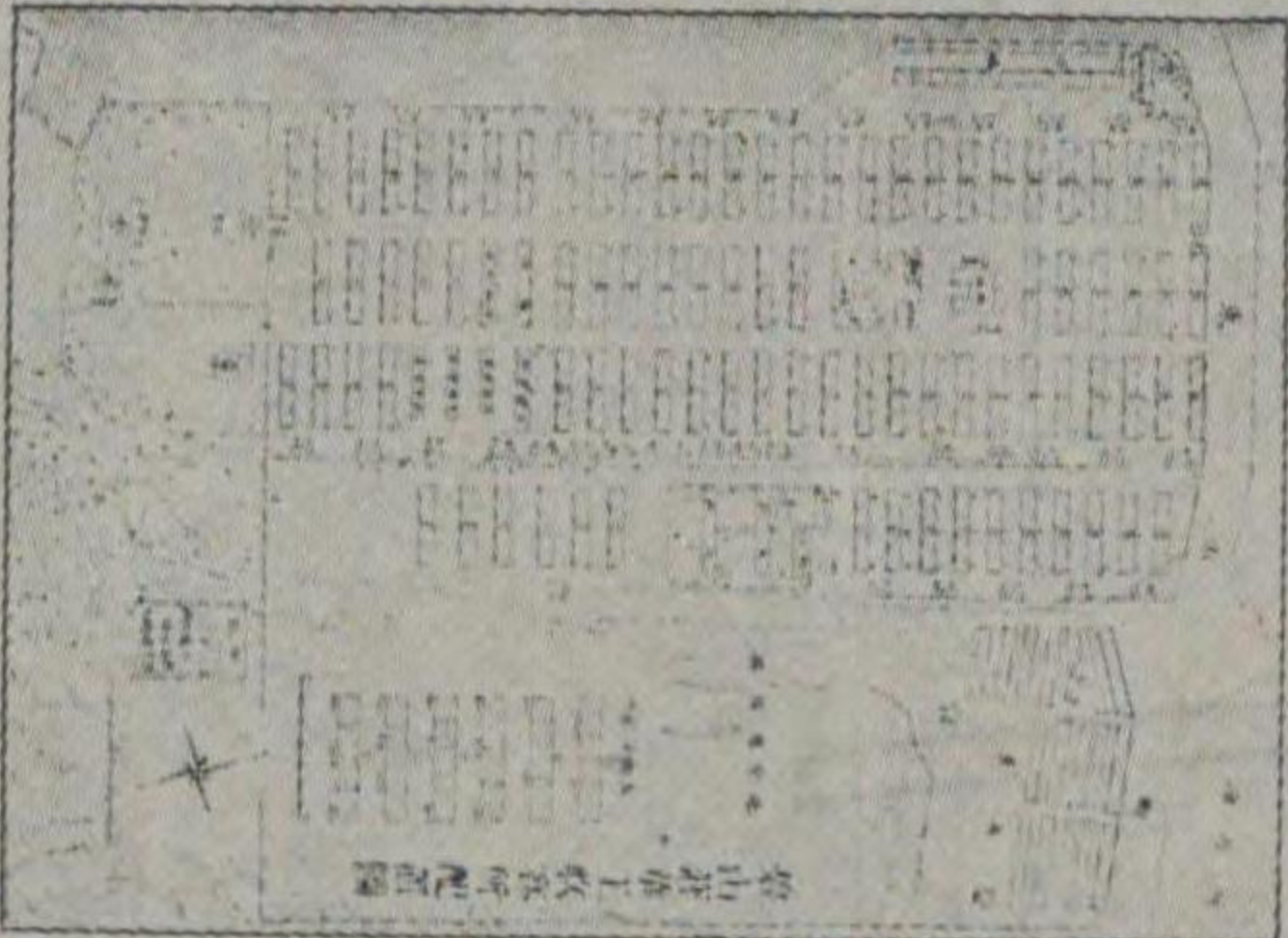
(頁八八) 工華す流を汗の苦勞の日一 連大(上)
(頁四八) 連族遺の參日に神祖大 連大(下)



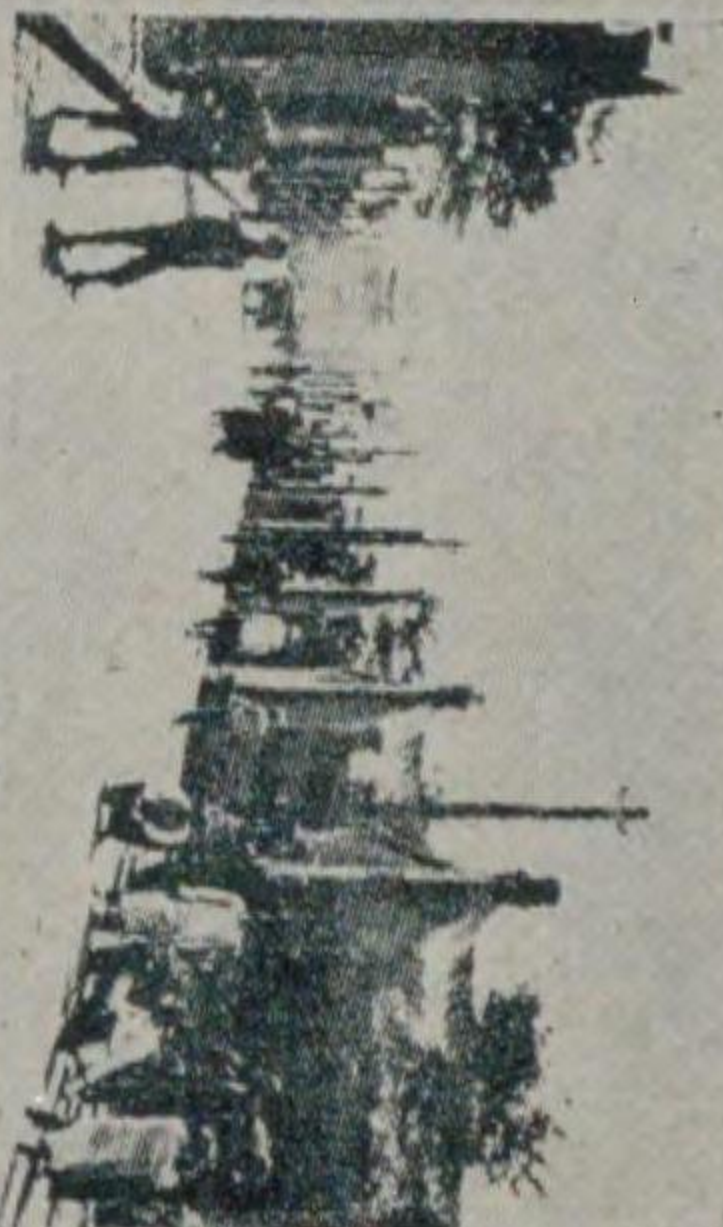
リよルテホ和大 連大(上)
(汲水)司公昌福 連大(下)

鞍山莊概要

鞍山莊之建設，係由本莊主人，自前清光緒年間，即開始經營，至民國初年，更趨發達，現已成為東北重要之工業中心地。本莊之建設，係由本莊主人，自前清光緒年間，即開始經營，至民國初年，更趨發達，現已成為東北重要之工業中心地。本莊之建設，係由本莊主人，自前清光緒年間，即開始經營，至民國初年，更趨發達，現已成為東北重要之工業中心地。



(鞍山鐵礦全圖)



(鞍山街景)

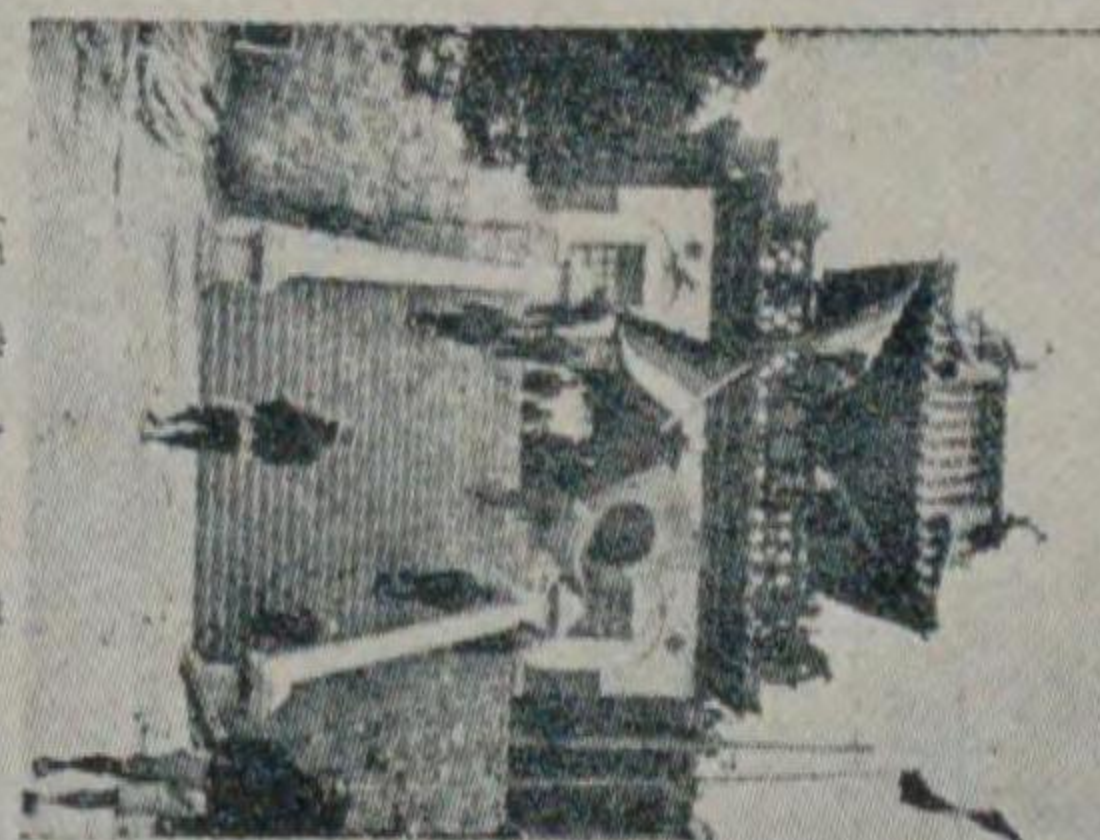
第一等 產

一、鐵礦	420	5000
二、煤礦	120	4000
三、石油	30	1000
四、其他	50	2000

鞍山鐵礦之產量，每年約達四百二十萬噸，煤礦產量約達一百二十萬噸，石油產量約達三十萬噸，其他產物約達五十萬噸。本莊之建設，係由本莊主人，自前清光緒年間，即開始經營，至民國初年，更趨發達，現已成為東北重要之工業中心地。

第二等 產

一、鐵礦	100	1000
二、煤礦	50	500
三、石油	20	200
四、其他	30	300

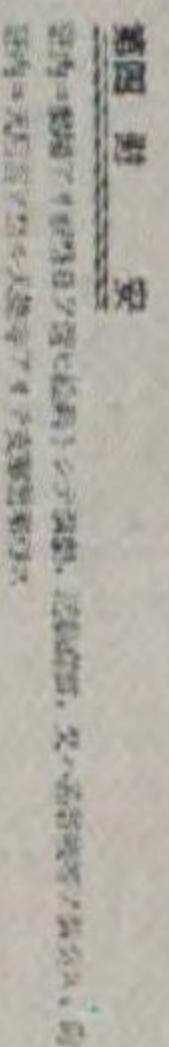


(鞍山工廠)



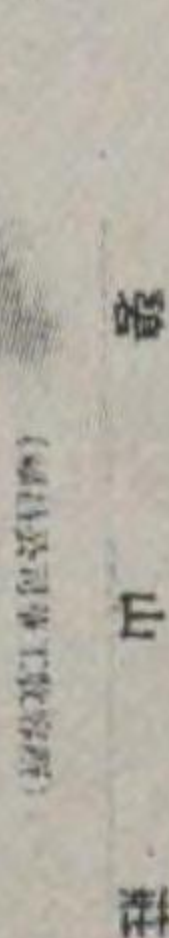
(鞍山街景)

鞍山鐵礦之產量，每年約達四百二十萬噸，煤礦產量約達一百二十萬噸，石油產量約達三十萬噸，其他產物約達五十萬噸。本莊之建設，係由本莊主人，自前清光緒年間，即開始經營，至民國初年，更趨發達，現已成為東北重要之工業中心地。



(鞍山街景)

鞍山鐵礦之產量，每年約達四百二十萬噸，煤礦產量約達一百二十萬噸，石油產量約達三十萬噸，其他產物約達五十萬噸。本莊之建設，係由本莊主人，自前清光緒年間，即開始經營，至民國初年，更趨發達，現已成為東北重要之工業中心地。

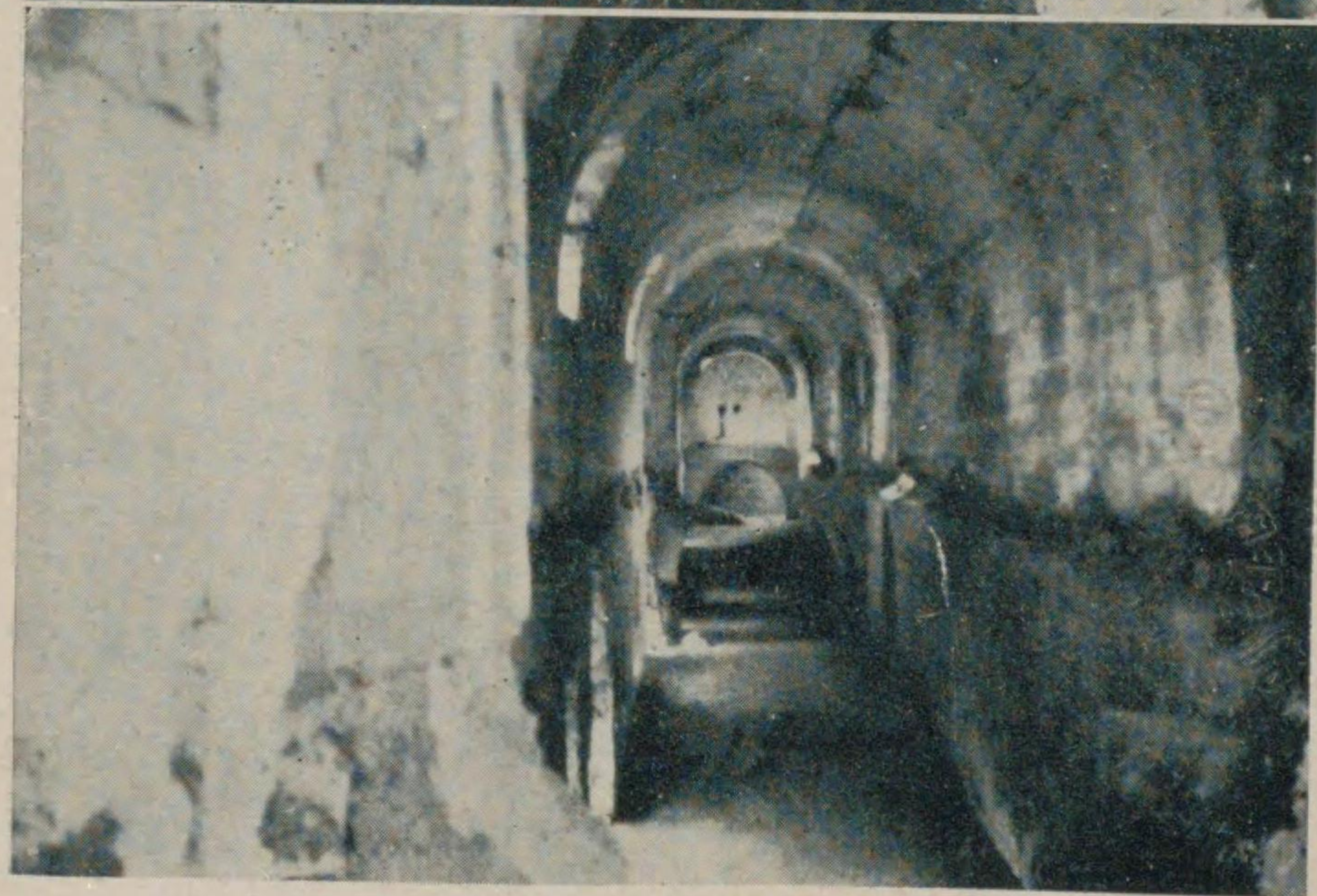
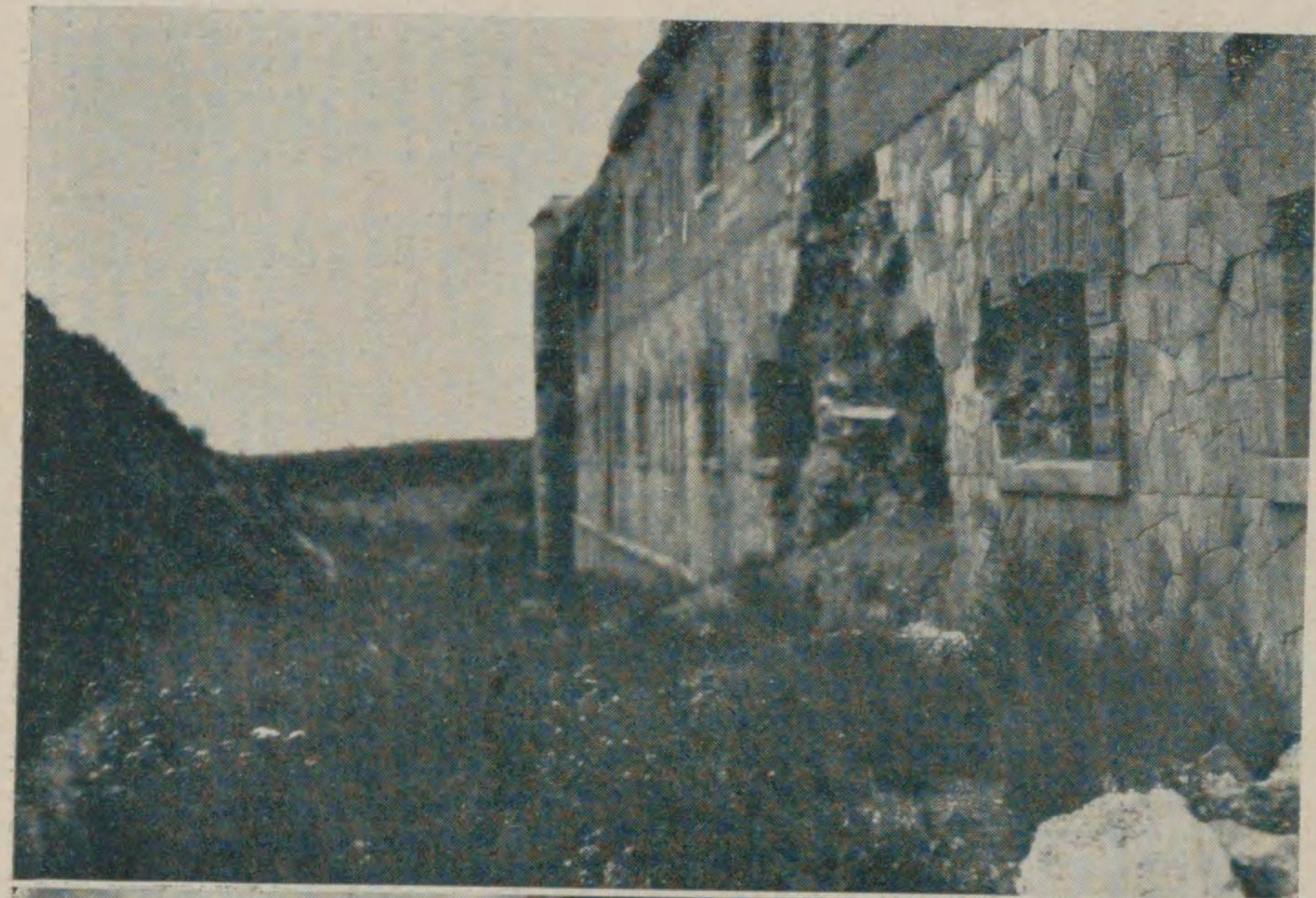


(鞍山工廠)

鞍山鐵礦之產量，每年約達四百二十萬噸，煤礦產量約達一百二十萬噸，石油產量約達三十萬噸，其他產物約達五十萬噸。本莊之建設，係由本莊主人，自前清光緒年間，即開始經營，至民國初年，更趨發達，現已成為東北重要之工業中心地。

鞍山鐵礦公司
相生由太郎
第四層

(本莊十週年紀念)



(頁五九) 壁堡北山冠雞東 順旅

を立て直して歸つて行く。之は支那風俗で家内の誰か、死ぬと、その葬式を行ふまでに數十日此の様にして日參するとの事である。支那民衆の參集地にはこの太祖神が必要であるのだ。初めは此處に收容されてゐる華工のために設けたのだが、今では附近の人々にも利用されてゐるとの事である。思ひもうけぬ風俗を見る事が出来て、我々も亦ゾロゾロとついて行つた。やがて宿舍の内部に案内された。窓に側した方に巾六尺位のアンペラをしきつめた臺がある。その上に窓側を頭として一同がゴロゴロと寝るのだ。そうな。丁度奉天の女學校の寄宿舎と同様のつくりだが、一人々々の區切りがなく、且つ枕もとにある毛布の一卷が彼等の全財産であり、體の伸す所が彼等の住居なのである。入口にパンをこねてゐた裸體の男は、追へども眞黒にたかる蠅を睨みつけながら平氣で働いてゐる。背後に見物する一行を見てそのすごい面相に愛嬌笑みを浮べ乍ら、一片を取つてお喰べなさ

いとばかり差出した。が誰一人として彼の好意をうける事が出来ず、思はず顔を外むけて戸外に出てホット息をついたのも一人や二人ではない。

云ひおくれたが、此の會社の制度は軍隊の生活によく似た所もある。會社としては工頭を相手に萬事を交渉するのである。工頭とは内地の親方の様なもので、幾人かの華工を手下に使ひ、何人分かの席を會社と契約するのである。會社としては仕事にふり向ける事から、勞銀を拂ふ事等に至るまで、皆工頭と懸合ひするので、工頭は適宜にその配下に分配するものである。食事もそれ／＼工頭の指揮によつて調理されるのだが、大體日に二十四錢位で賄はれてゐる。常食としては麥粉のねつたもので、支那人社會では中流處の食物だそうで、苦力としては勿論分にすぎる食事だとの事だ。その上、衛生にも注意を怠らず夏季には早くよりコレラ等の豫防注射を行ふので、毎年如何に外部の支那人間に疫痢が流行しようとも、大した影響

を受けないとの事である。

此の模範的華工收容所をはじめた相生氏は元滿鐵のお役人だつた人で、華工と埠頭事務との關係を痛感して、偶々『明治四十四年二月ベスト流行後東部華工收容所として關東都督府の認可を得滿鐵の承認の下に』自ら此の事業をやり、埠頭の各種作業に従事する仲仕華工を供給して滿鐵を助けてゐるのだと云ふ話だ。

港灣を一望に收めうる形勝の地にその生命を握つてゐる大衆の居城。考へれば考へる程味ひのある對照ではないか。しかも華工收容所だから支那街以上の臭氣はあるものと覺悟はしておつたものゝ、來て見れば案に相違して臭氣の少いの返つて驚かされる程だ。可程までに衛生設備（？）を整へ、且つ此の無知無秩序の大衆をして之程迄に馴致した人々の努力に對しては、唯感謝の念を禁ずる事が出来ない。

夕餐の煙は各棟毎にたな引いてゐる。あちらこちらの木蔭家側には夜具の風を取るものゝり、一椀の熱湯をすゝるものあり、或は一日の勞苦の汗を流すのもある。清らかな水を運ぶ男の數ふえて、收容所には平和な夕の團樂の模様だてに忙しい頃、一組の勞働服を分與して貰つて歸路に着いた。

旅 順

日露役と云へば、奉天戦よりも何よりも先づ旅順攻撃が直ぐに頭に浮んで来る。それは實質に於ての關ヶ原であり、且つ多くの日數と人血とを要した點もあらうが、それよりも乃木將軍や廣瀨中佐の如きドラマチシユな物語を止め、共に血も涙もある武將として軍神の名さへ稱へられた爲めであらう。軍國日本の全盛期に生れて子供時代を戦争ゴッコですごした者に取つては、武人の花やかな生活が憧憬の對象となり、戦へば必ず勝つものとして日本軍人の武勇を教へ込まれたものである。今日に於ても、

僕は軍人大すきよ

今に大きくなつたなら

勳章下けて劔つけて

お馬にのつてはいどうく。

と他愛もなく歌ひ廻る子供を見る時、

日本勝つたく／＼ロシア負けた。

とはね廻つた自分達の幼時が思ひ出されてならない。

何にせよ、これ迄色々想像を巡らして作り上げられてゐる想像的な旅順を、實地に踏破せんとしてゐるのである。

汽車は今迄の様な一望千里の廣原とは異り、約二町とは見通しのつかぬレールの上を、丘陵の間々々と隠れる様に走つて行く。例によつて車中では回想談に花が咲き、窓外では同胞の流血の跡が展開されてゐる。遠近の山上の記念碑は数へきれぬ程で、あれが皆激戦地だと聞かされてはあんな小丘を取るのにと不思議に思ふ位だ。蜿々たる塹壕の残骸、補充兵役陸軍歩兵の身には判然と意味もわからぬが、大した努力の跡だといふ丈は、

何人にも伺ひ知られる。

旅順驛より直に關東廳に兒玉長官を訪ふ。小さい白堊の家だが前面灣口を一望に見晴しうる形勝の地だ。舊ロシアの誰とかの宅だとか云ふ話だ。あの灣口を閉塞するに、あの様な犠牲がいつたのかと思ふと不思議な位、小さなものだ。巾にして二丁もあるまい。來て見れば聞いてゐるより易々として閉塞出來たらうと思へる様だが、あの時代に取つてはこれが難事中の難事であつたのだ。兩岸の砲臺が如何にして近寄る船をうちとめ得なかつたかと、ロシアの不甲斐なさも考へられる程だが、彼我共にその任務は、極く易く見へて而かも至難であつた事によく善處して、あの様な歴史を止めたのだと思へば涙がこぼれる。

長官は心よく一時間許り滿洲について話して下された。年のわりにふけて見える顔を熱辯に引締め乍ら、滿洲に於ける日支二重政治より、此の土

地に居る者のあらゆる點に二重性なる事を説明された後、

『往々にして、日本人は殖民的性質に乏しい人間だと云ふ者があるが、余は決して左様に考へて居らぬ。寧ろ殖民に於て天賦の性質を惠まれてゐるものと思つてゐる。明治四十五年の治蹟の結果を見るに、北は樺太より南は臺灣に至る領土を獲得し、更に朝鮮を合併し滿洲に新天地を開拓してゐるのである。その地理的分布より見れば、北は寒帯より南は熱帯に入る地域で、而も相當の殖民統治の實蹟を上げてゐるではないか。』

又朝鮮滿洲に於ても決して失敗してゐるものではない。即ち新に委任統治領となつた南洋を除けば略ほ同種の民族であり、且つ先進文明國として嘗ては教を受けた國なのである。かくの如く先進民族の國に殖民政策を行つてかゝる實蹟を上げてゐる國は他にあらうか。これが英國佛國和蘭西班牙等の如く、異民族であり且つ文化のひくい、人口の少い土地に於て殖民

統治を行ひ、而も今日の如き様となれるに比べて、等しく論ぜられぬ所である。故に余は日本人を確かに殖民統治に長所ある民族だと云ふのである。諸君は今内地より朝鮮を経て滿洲に來られたので左程には思はれぬが、一度支那を見て再び此の地を見られたならば、必ずやその着眼點を異にされ、日本の殖民政策は失敗して居らぬと感ずるであらう。』と。

―實に後日再び奉天を経て京城に出た時の驚きと喜びは例へ様もない。國家の恩を深く感ずると共に、意を強くした次第である。―

充分な満足と感謝とに満ちて關東廳を辭し、白玉山表忠塔下に一行の大半と合し、先づ英靈の社に參拜して晝食を取る。

二十幾年の昔には、此處に海を見下して辨當を開き、懷古談に花を咲かす様な事を夢みてゐたものは果して幾人あらうか。此の塔下に眠る英靈の中の幾人が果して此の海を見下した人であらう。それを思へば、かく長閑

に食事を取れる時代に生れ合せた身は限りなく勿體無い様に思はれてならない。丁度例の小さな灣口を出て驅逐艦が三隻、漣けたて、何れかへ出動してゐる。その白浪こそ海底に眠る海人の快心の笑でなくて何であらう。辨當に舞來る蜻蛉も陸人の遊魂喜遊する様に見える。若し卅八九年頃此地に蜻蛉が一時に増加したのならば、定めて「倭蜻蛉」とか「軍蜻蛉」とかの名稱がつけられて後年に及んだであらう。丁度平家蟹とか源氏螢の名が今に残る様に。

空想の道は行けども盡きぬものである。案内者は「左の山に現れた第何聯隊は全滅した。」とか「あの谷で二箇聯隊動けなくなつた。」と戦争物語を手取る様に説明して下さつたが、大部分ぬけてしまつたやうである。

ロスケが脳味噌をしほつて作り上げた間道をたどつて東鷄冠山に向ふ。此の道は外輪山からは見えない様に各砲壘を聯絡せしめたもので、日本軍

には容易に知れなかつたのだ。若し血なまぐさい物語がなかつたならば、よい散歩道だのと思はれる程、木蔭ばかりを縫つてある。若し此處が内地であれば、利權屋連が納涼とか國立公園とか名づけて俗化するにきまつてゐるやうな恰好の土地だ。

やつとの事で東鷄冠山に着した。聞きしにまさる慘澹たるものである。中央砲臺を巡らすに、數尺の厚さあるベトン掩蔽濠をもつてし、その間に二丈にあまる谷をつくり、萬一堡壘をのりこされても中央砲臺までには此の谷をわたらねばならず、すれば掩蔽濠の内部より之を全滅さす様に機關銃がそなへられてゐたのだ。之を占領するに數ヶ聯隊を全滅にしたと云ふのも無理ではなく、又堡壘の下まで暗濠で突進して敵兵の會話をきいたの、又一時に六百人からの生命を失つたの、又敵味方パンを分ち乍ら土囊戦を行つて占領したのといふのは、皆此處の話で、大正の御代となつて尙數百

の遺骨を掘り出したといふのも、皆小説の様な事實談である。

更に有名な二百三高地に向ふ。飛行機のない時代だったので旅順内部の様子は、我が軍には何一つはつきりせぬ。此の高地を占領してはじめて港灣の様子より全般の防備が覗はれ、戦況が大いに進んだとの話である。來て見ればこれが名高い二百三高地かと思はれるやうな平凡な丘陵である。

併し長く自動車にゆられた身には疲れが一時に増してきて、流石の在郷軍人も弱音をはいて了つた。とても登る元氣がない。而も大連で船まちの都合上、二三日滞在せねばならぬ破目にあるのだから、又來る機會もあらうと横着心も頭を出し、終に下より見上げて敬遠して、やかましく聞かされてゐた旅大道路をドライブして歸館す。

思ひ返せば難攻不落と世界等しく認めてゐた旅順の要塞も結局は落ちて

しまつたのだ。如何なるものにも屈しない絶えざる努力の前には、如何なる者も敵し難い。あの肉弾の痕鮮かな東鷄冠山北堡壘をヤンキーの如き機械萬能と心得てゐる國民に見せたならば何といふだらう。要するに『精神一到何事かならざらん』の古諺にもれず、熱と團結との結果此の成功を見たものである。七轉八起はおろか、十轉も十一轉もしてやつと占領したのである。吾々の學ぶべき所は此の點にあると思ふ。

のこる二日は、船待ちの滞在である。お江戸表に山と積まれた用務を氣遣ひ乍ら、川止のため如何とも出來ず、徒に怨めし相に大井川をにらんでゐる形である。老虎灘や星ヶ浦を見物し、馳け出しの撞球に時を忘れ、大和渡來の西瓜に里心をもやした以外に、ほんやりとくらししてしまつた。

偶々同宿に張將軍の第五夫人の一行あり。護衛の支那武人横暴を極めて

驚かしてくれたのも旅情をなぐさめる一興であり、タハラン王女の容貌に同種族の感を深うしたのも悪くない思ひ出である。

かくて八月三十一日天長節の佳晨、大和ホテル玄關での記念撮影を名残りに、愈々正午出帆の淡路丸（近海郵船會社）で日本臭をはなれて支那へ向ふ事となつた。

今になつて思ひかへせば大正の御代最後の天長節を海外にて祝し、而もその日に領海を舟出して唐國からくにへと向つたのである。意義あらばあれ、事は後世の歴史家にゆづる。

第三篇 支那



(頁八〇-) 々人すは鬮を棋に上板甲丸路淡 (上)

航 迦 河 白 (下)

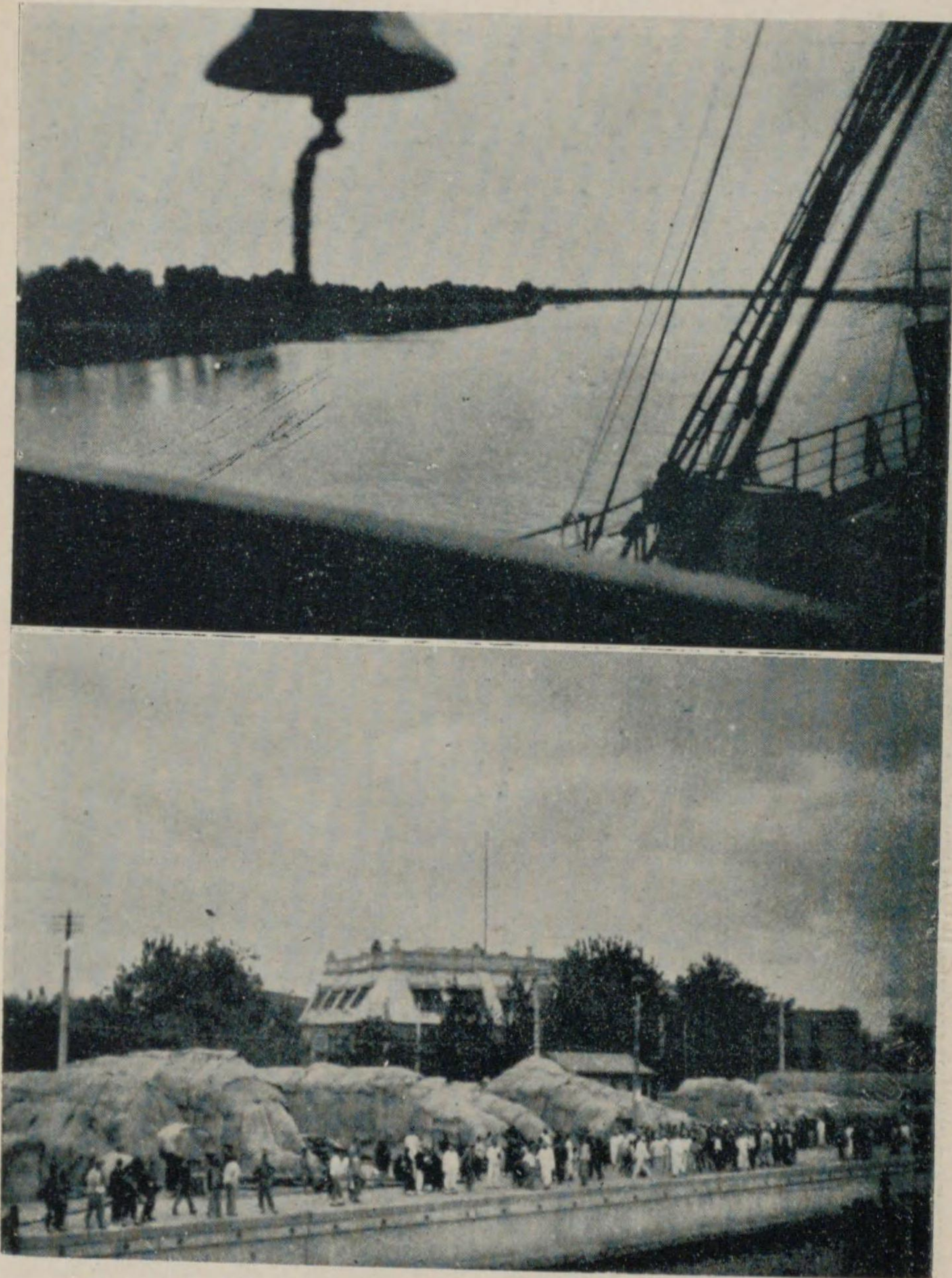
渤海灣

埠頭事務所の上より見ると歩くとは大異ひ、確かに夏の日に見ればあた
ら巾ひろくしたきらひのある棧橋だ。相當な大きさの船がついてゐるが、
さて乗用の淡路丸はと見ると倉庫の片すみに小さくなつてゐる。

「二千トン級だ。」「いや三千トンある。」
とやたらに通らしく云つてゐる人等の心中は、少しでも大きくあつてほし
いと非海國的な心から出てゐるらしい。

數日來色々と骨折つて貰つた滿鐵の木部氏や、多くの人達に送られて棧
橋を離れた。ハンカチをうちふるもの、帽子を動かすもの、様々に「さよ
なら」のしるしをしてゐる。

「萬歳！」



(頁八〇-) 委朝の鐘時 丸路淡 (上)
人迎出の壁岸界租佛 津天 (下)

と船から呼ぶ。

「萬歳！」

と合唱して陸から答へる。

船は方向をたてなほして静々と灣口さして進んで行く。

「さよなら。」

と金切聲が静波をわたつてくる。顔は分らぬが人らしいものが動いてゐる間よりハンカチや、帽子が動いてゐる。

「さようなら。」

と男性的な胴羅聲が響く。

「萬歳！」

と呼ぶ。

「さよなら。」

と答ふ。

海陸の別れをおしむ聲も終にはきこえずなつた。只、人らしい集りを陸に見るだけだ。

海は静である。天長節の佳辰を祝する様に旅大の連山はくつきりとあらはれてゐる。五日に亘る思ひ出の山、川、さては大連の市街までもなつかしく思はれる。

「碧山莊が見える！」

と誰かと呼ぶ。成程、海岸近くに整然たる棟並をして異彩を放つてゐる。是こそ大連埠頭と共に日本人の誇りとしてよいものと無暗と嬉しくなる。

両眼鏡を手に「星ヶ浦が見える！」「老虎灘だ！」といつてゐる間に、段々と陽はかたむき出した。旅順の外輪山上の記念碑が墨繪の様に美しい姿を現してゐる頃船室にしりぞく。

海上涼しと思ひの外、船内の暑いことお話にならない。加ふるに大連で積込んだのだといふ蠅の大群、卓上と云はず床上といはず、無暗にたかつてゐて、文字通りに手のつけ様もない。例によつて喜多さんがイマズ式驅逐法に大童になつた効あつてか、食事の頃にはいくらかましになつた様ではあるが、それでもたえず蠅を追はなければたかつてくる。

食事は出た。一同勇しく卓を圍んだが、意地悪くも船は少々すね出した。見る／＼話題が途切れる。箸の運びがにぶる。顔色さへ物すごく見え出して、鼻頭にのみ愛嬌の冷汗をためてゐる人も一人二人。

先づ一人、側目もふらずキャビンに突入する。同類の一人見舞に行けば無言で手を振つたとて笑聲一しきり賑つたが、間もなく元の無音の行にかへり、次から次へとキャビンに突入し、食後のサロンには將棋を戦する者一人も居ないといふ淋しさ。蠅のみ我が物顔に戯れてゐる。

暑いサロンをのがれて甲板に出た。浴衣一枚では手足がさらさらになる程の涼しさである。漸く没した太陽のあとを追つてキラリキラリと星が光りだす。一ツ二ツと數へてゐる間に數へきれなくなつてしまつた。

洋々たる渤海の行手には何も見えない。左を見てもはるか故郷だと思ふ位の事。右手背後には遼東半島があるはずだが定かならず。身は一葉の鐵片に委ねて、はてなき海中をあてどもなく流れ行くのである。

星を仰視しながら又あられない空想の世界にさまよふ。

その昔、蒸氣機關や羅針盤といふもののなかつた頃、星を唯一の標識として風のまにまに大海原を漂うたのだ。彼等は自分の技倆と、天とを信ずる外には何も信じられない。身を委ねるは、一片の木屑なのだ。倭寇も然り。四つの舟もそうだ。しかも、唐はおろか天竺までも征服し得たのは我

が身思案をすて、友の屍を乗りこえて信ずる處を敢行した、めなのだ。然るに何ぞ此の文明の利器によりながら此の態は、、。

——空想は慷慨ともなる。——

合理的に出来た機械に、合理的のたのみをかける。しかし我が身には心といふ非合理的な作用をするものがあるのだから、此の部分は合理的な説明だけで満足しない。

例へば船は決して沈むものではないとは説明出来る。しかしそれだけでは不安だから心は動揺する、氣持が悪くなる。さては敬遠主義を取り、君子危きに近寄らずとをさまりかへつて、海の旅行は危いものときめてかゝり、なるべくさけようとする。この説明し得ぬ心情が海をおそれさす一因だらう。萬が一の事は何處にでも伴ふが、汽車なら骨だけなりとも得られるが、『水づくかばね。』とならば一物の形見もなくなるのだから、我が身を

考へるときは心細くなるのだらう。

船はマストに小さい光をともし何處とも知れず走つてゐる。波の音、汽罐の音の外は何一つ、活動してゐる様子を見せるものもない。時間を知らす鐘音が時々人の居る事を思はすだけだ。誰か顔を出した者があつたが二言三言話してゐる間に又キャビンへと退きかへして行つた。後は又獨り星と談る。

今が昔であるならば、己でも星の暗示を聞きわけ得る様になつてゐたらう。丁度アリが隊商のキャンプをソツとぬけ出して、一人で沙漠を逃走した様に、星の光を唯一の目標に此の海を渡る事も出来たらう。或は倭寇の一人として天竺までも歩いてゐるかも知れぬ、、、。他愛もなく空想を續けてゐるが、ひしひしと迫る夜風と睡魔のために、ベットにつく。

天津

一日。夜は明けた。ハッチを通して眺めると、海上特有の色がたゞよつてゐる。いち早く甲板に出た。波は夜半の様に音も立てず、油の様な水面である。しかも心なしか少しく濁つてゐる様だ。

昨夜ベットに先陣を競つた連中が、ゾロゾロ出て来て、將棋に打與じだした。實に現金なものである。

時間のたつにつれて、濁水の色も濃くなつた。黄河や白河の放水の故だそう、二十哩沖まで影響すると聞いては、流石に黄河だと驚かざるを得ない。しかも未だ、陸地の影さへ見えないのだ。

十時過ぎ、白河の河口太沽を通る頃には一寸下も見えぬ泥海である。天地創造時代の世の様を目撃する様な氣持がする。潮時はよし、直ちに白河

を遡航する。時速五哩以上は、堤のない河岸を破壊する慮があるので、許されぬといふ事だ。河はと見れば、巾は二丁とあるまいと思はれるが満々たる濁水をたゞへ、平原の中に百折して、のたりくと流れてゐる。勿論、堤はない。汀の上には、直に農作物が青々としてゐる。而して船の通るたびに濁水をあびるあと歴然としてゐる作物や、又は水のため土地が洗ひながされて横にかたむいてゐる柳等は、至る所に見られるといふ有様だ。しかも、それにもまして眼をよろこばすのは、眞赤な服装をした女や小兒がジャンクを操つてゐる姿で、内地では考へも及ばぬ風俗である。

『傳説によると、昔此の河は百河と云はれ此の沃野を百折して海に入つてゐたのであつたが、或時大水が出て其の一曲がなくなつた。よつて今は白河と呼ぶのだ』とは船員の話。たしかに曲り曲つてゐる遡航はしてゐるのだが、何だか河口に向つて逆航してゐるやうに思はれる事も度々ある。又

面白く思はれたのは前方に行く黒船が稻田の中を歩いてゐるやうに見える事だ。それも青い平原をおいて時々すれ違ふ様に見えるのだから、『船頭多くて船山へ登る。』といふ言葉が何とはなしに思ひ出されて笑はされる。

滿洲とは異り、沿岸の部落が樹木の青々と繁つてゐる曠原に散在してゐるのをながめ乍ら、晝の二時迄白河を上る。初の内こそ珍しかつたが變化のない泥水の中を行くのだから、終には見物する氣力も失せてキャビンに欠伸しながらゐるうちに、天津へ入港した。天津は、やはり北支那の門戸である。河の兩岸には大船が數知れず、夫々の國旗をひるがへしてゐる。英國の旗を立て乍ら支那流に船名を横腹に大書してゐる様等も珍しい。且つ兩岸には、露國、英國、佛國、日本等各國の旗をひるがへしてゐる。即ち租界なのである。美しい森、廣大な會社等、見る眼も新しくて異國情緒の第一印象は素晴らしく氣持がよい。いよくフランス租界の岸に横付と

なると、群つて來た苦力のために再び騒々しい支那があらはれた。寬大な税關検査をすませて上陸し、日本租界の大和ホテルに入る。

天津見物と云つても極く小時間しかないのだ。翌朝は直に北京入りをするつもりだから。それでも自動車の力をかりたので先づ表面的に一巡する事が出來た。

第一に頭を刺戟したのは租界の事だ。天津は地理的には明白に支那領である。しかるに來て見ると、各締盟國は各々其國旗をひるがへして、恰も世界の縮圖の様な氣がする。しかもその繩張區域では、地主たる支那人にさへ何の自由もあたへないのだから、彼等の怒り出すのも無理はない事だと思ふ。丁度縁日に香具師のために店頭を占領され、又は自分の土地を用されて泣きね入りの態たる商家や地主の立ち場が支那人で、他人のものを自分勝手に相談して分配し、互に繩張をおかさないうやうにしてゐる香具

師の親分達といふ格が各國なのだ。但し所謂親分の権力といふものは、その道の人でないといふからぬ蔭の力とでも云ふやうなもののだが、それを堂々と銘打つて表沙汰にして、我儘勝手に他人の屋敷を治めてゐるのが租界なのだ。一寸でも理論を戦はしたがる連中の不快に思ふのも無理もない事だ。併し、老衰國のかなしさ、道理ばかりも主張出来ず、理論と實際との矛盾悲劇は此處にも現れてゐるのだ。

一九一〇年、長江のほとりにおこつた革命のために清朝が滅されるや、支那は全く戰國時代、三國時代の昔にかへり、朝に君を弑して天下を取つた者も夕には又腹臣に亡される状態である。中原の鹿は追へども追へども確實に射とめるものがない。廣大なる沃野は兵馬の蹂躪に委されてゐるのである。されば民心の安定と云ふものは少しもなく、彼等は生命財産の保全を自國の政府にたのむ事は風前の燈以上に危いと考へてゐる。

利にさとい民族なれば、彼等は生命財産の安全を期するためには其手段を論じない。往昔、義に勇み仁に泣いた聖君の道も今はすたれてしまひ、昔話として誇るものはあつても、それをもつて處世の法と考へて居るものは一人もあるまい、と思はれるのが今日の状態なのだ。此の亂離の極にある彼等にとつては、租界は唯一の生命財産の保全の地なのである。朝夕にかはる自國の法によるよりか、他國の法下に守られるが利なのだ。

要路の大官はもとより豪商は勿論、さては無頼の徒にいたるまで、皆そのかくれ場所を租界に有してゐるのだ。而して一旦此の區域に逃入した以上は、政治犯國事犯を問はず該國の許可を得なければ政府として手がつけられないといふのだから始末が悪い。支那當局より見れば獅子身中の蟲といふ様なもので、又大官豪商及無頼漢にとつては、地獄中の極樂とでも云ひうる處だらう。更に變に思はれるのは租界をつくつておけばその國の利

益ある事は勿論だが、その下に使用されてゐる支那人、即ち外國人のためにはたらいてゐる支那人は、あらゆる點で支那街にゐる同僚より得意な様に見える事である。例へば最も目立つ巡査にしても、支那巡査の穢い服装に反して、ヘルメットをかむり三尺位の棒を持つてゐる等、比較的整つた、而してハイカラな服装をしてゐる上に、體格の點に於てもお話にならない程、租界の巡査の方が實に立派なものだ。六尺豊かの男なのだから一見して異彩を放つてゐる。加ふるに給料問題になつては亂國の悲しさ、支那巡査の方は不渡りとなる月が重なる事もめづらしくないとの話。これ又租界の巡査に幸福感をいだかしむるものなのだらう。

以上の様に現在の様な國狀にあつては、租界は或種の支那人に取つて必要と思はれてゐるのではなからうか。成程國の體面上その不合理をせめ、還付を要求してゐるが、本心よりとなへてゐる人は幾人あらう。その衝に

あたる人々の家族や家財が、租界に於て保全されてゐるのではないだらうか。租界還付が聲明されて居乍ら、實現される事の遅々として進まず、又督促する側においても、にえきらぬやうに思はれるのは此の様な關係からではなからうか。何れの國でも私利を第一に算盤に入れるときは大成出來ぬものなのだ。

「無理が通れば道理はひつこむ。」との諺はあるが、今や、

「我利を通せば大事はひつこむ。」とでも云ひたくなる。

「女の虚榮は亡國」と痛破した辯士が、「家へ歸ればかゝ天下」だとの都々逸が思ひ出され冷笑される。

兎に角、天津租界は政變にはつきものゝ如く唱へられる處で、しばしば耳にはしてゐるが、來て見れば一入感を深うした。且つ各國が思ひ思ひの装をこらしてゐるのであるから、一目にして比較が出来る。その内に多少

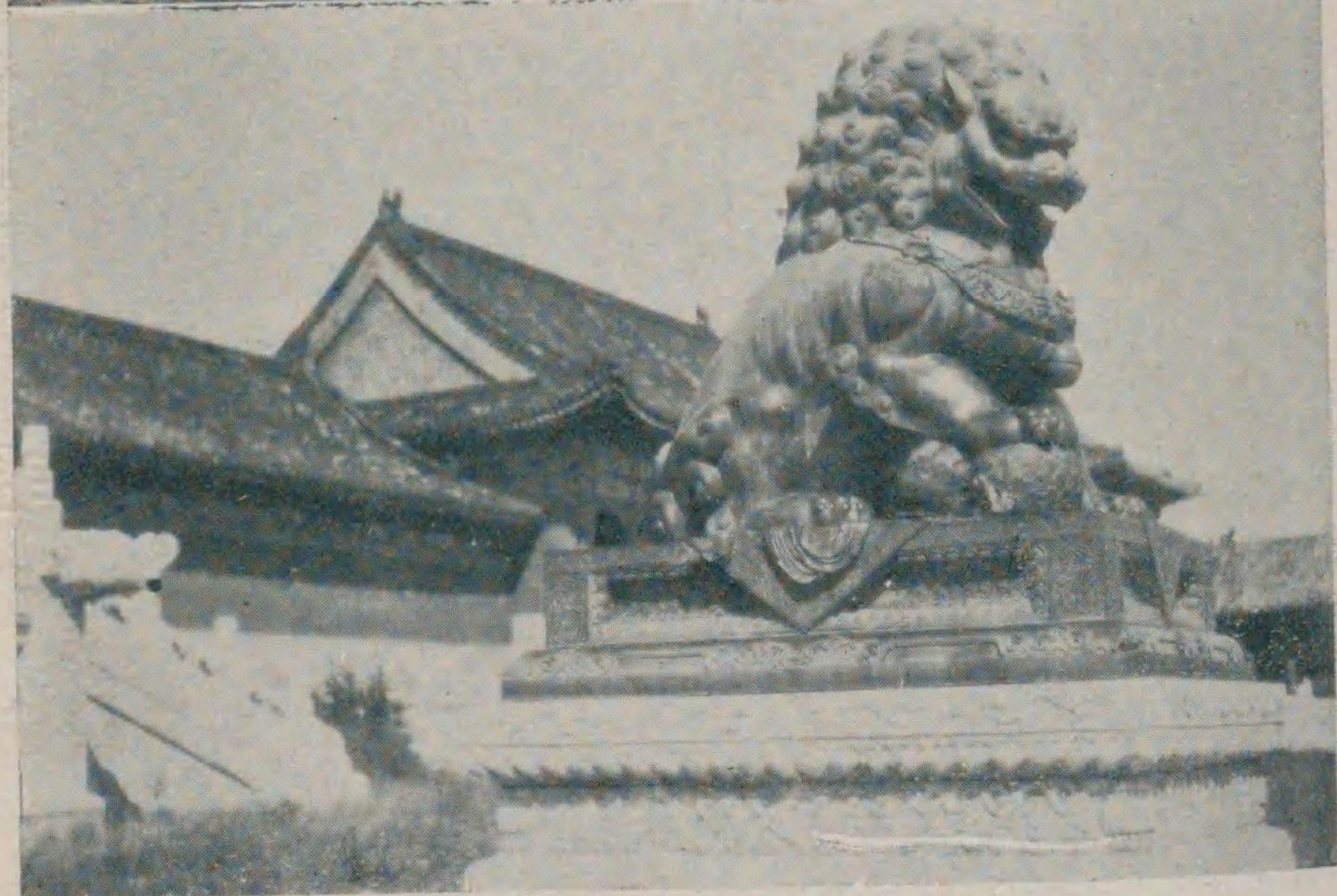
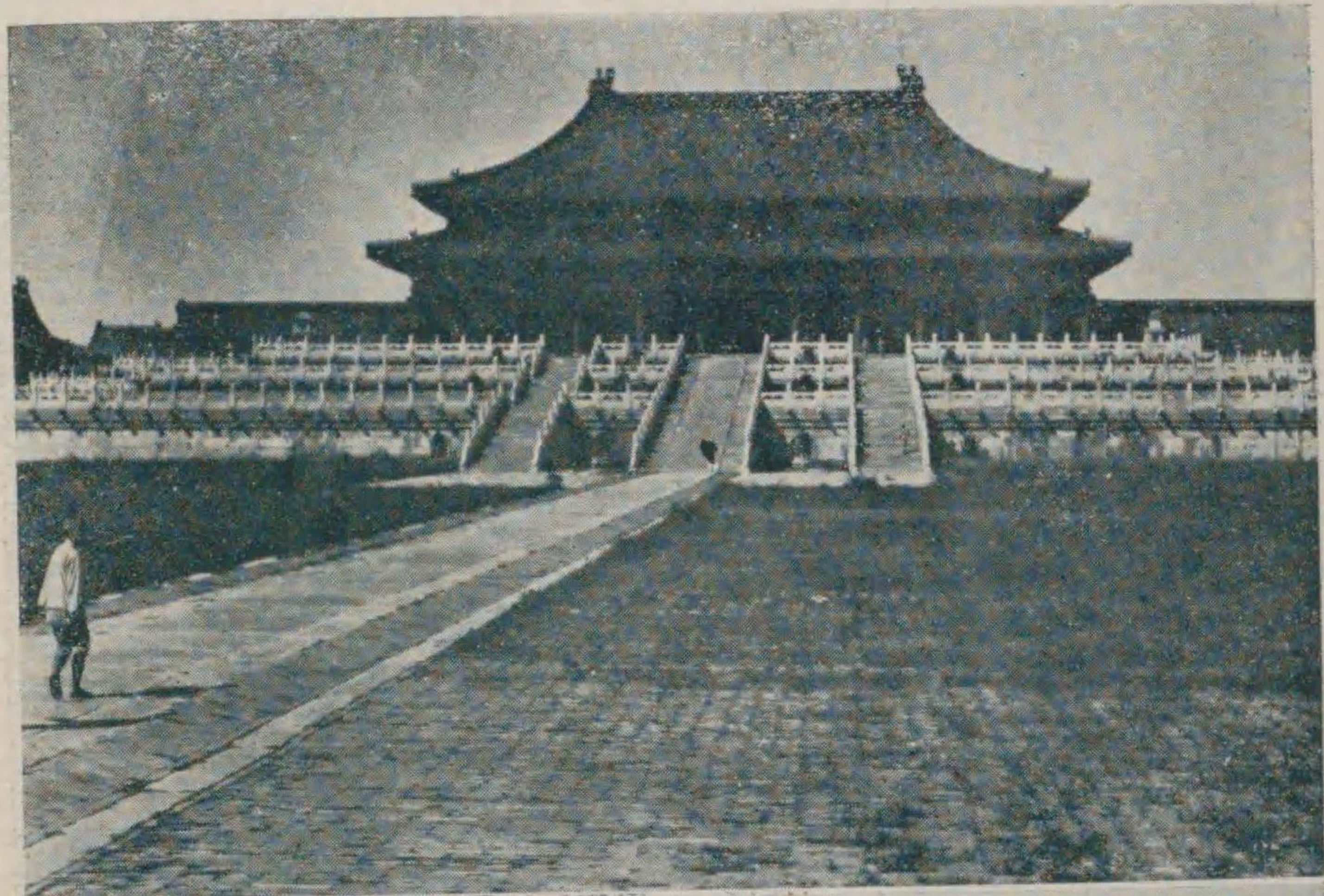
なりとその國民性の香がたゞよつてゐるのであるから、長所も短所も直にわかるやうに思はれる。見物者には至極便利だが、そこに居る人々にとつてはそれだけつらい事だらう。日本租界にも『外出の時には足袋をはく事。帽子をかぶる事。』等の掟があると聞かれては、日本人も此處にくると變な所で體面を維持しなければならぬわいと思つた。

整つた租界をはなれて支那街を見る目は、恰も光よりも早い速力の飛行機を飛ばして、空の一方からふりかへつたやうに、時代はまさしく逆行して了つてゐる。多くの人はボロボロの衣はまとつてはゐるが、マア半裸と云つてよからう。而してその土褐色の皮膚は顔と云はず胸といはず土埃のために汚れてゐる。短く剃込まれた頭上は太陽にピカピカしてゐるのも、珍しく思はぬ程ざらにある。白河の濁水をくみ上げて甕にため、その沈澱するを待つて飲料にすると説明されたが、嘘か眞か自分には得心が行かな

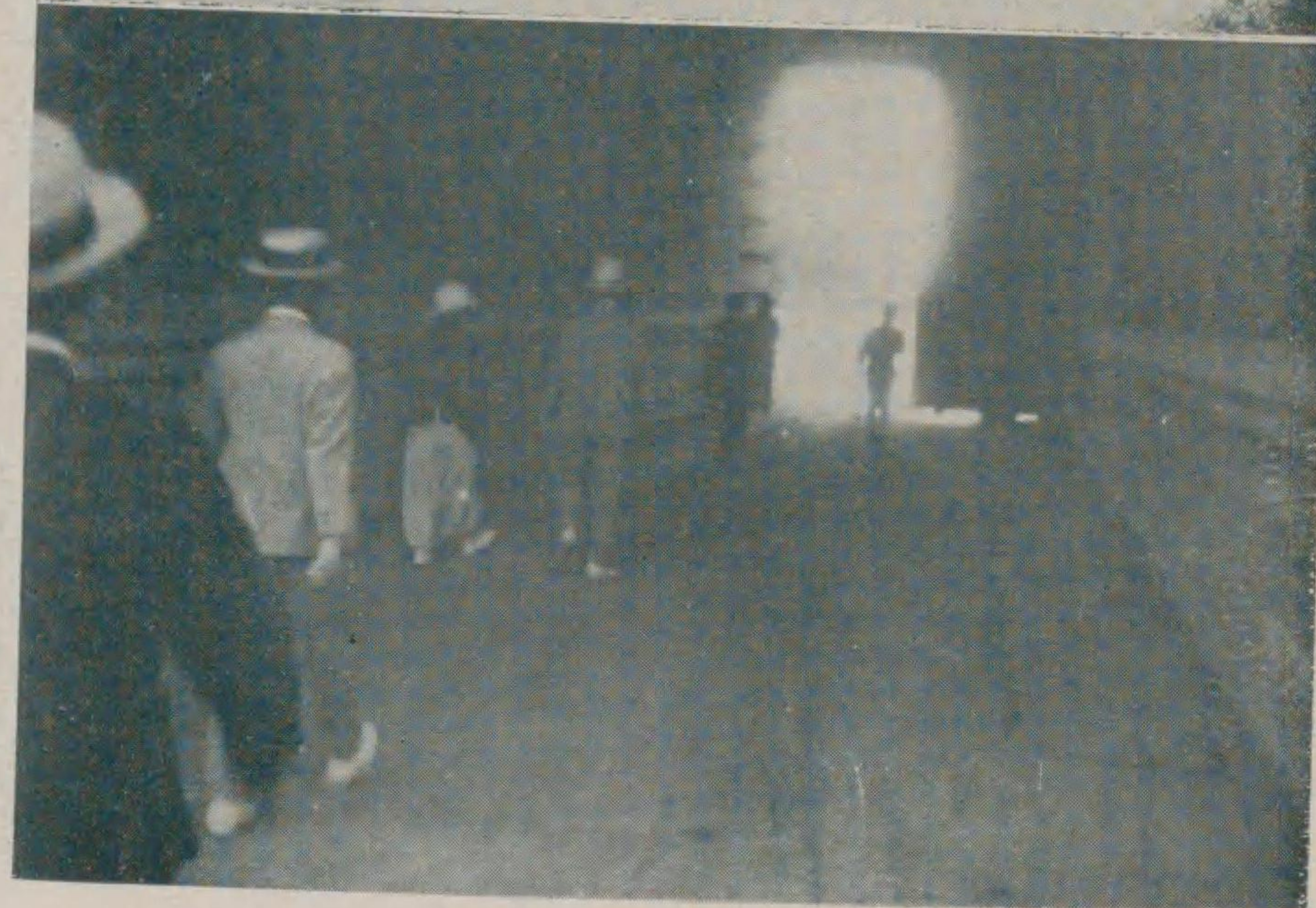
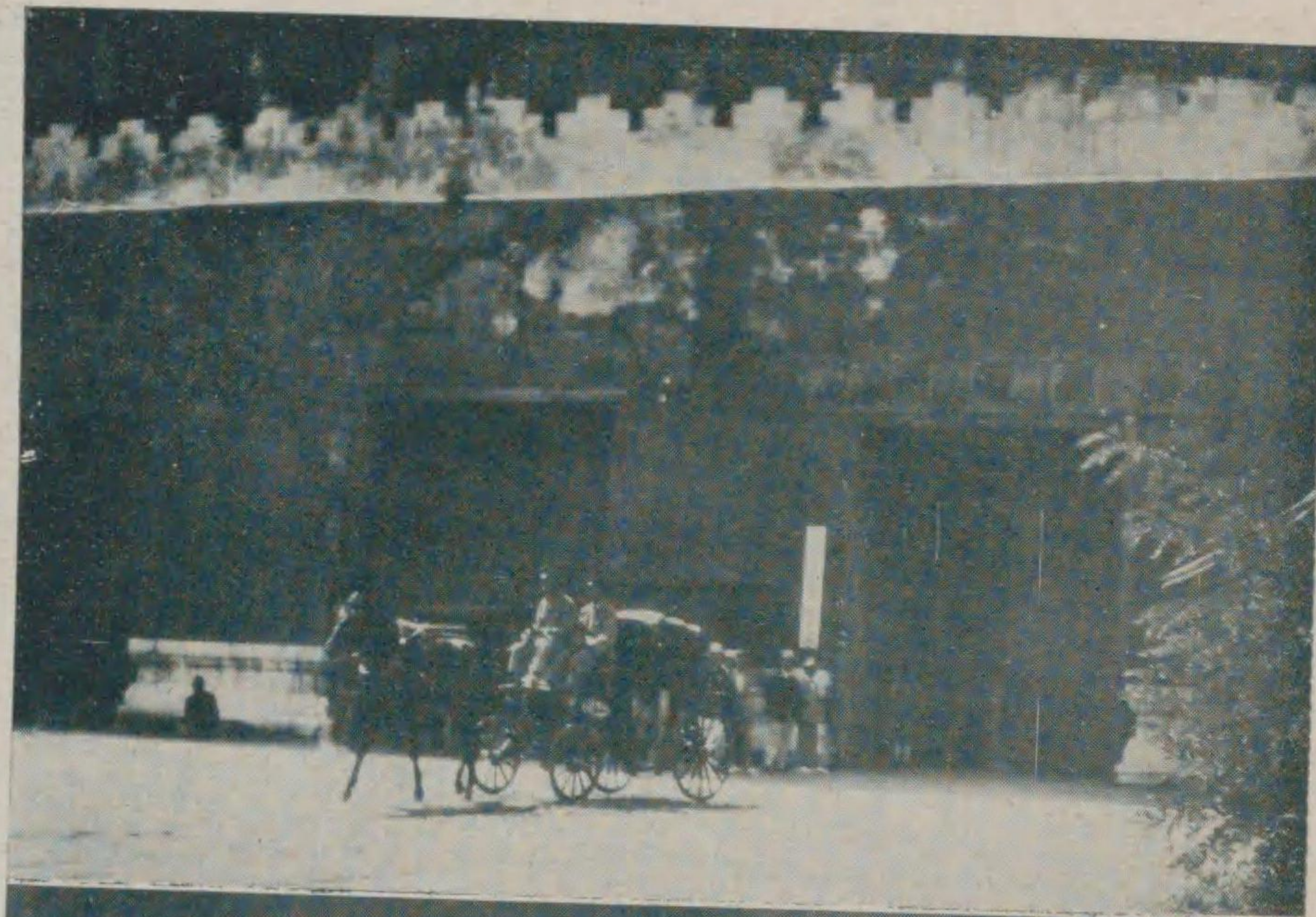


天津(上) 東站驛

北京(下) 驛



頁八二一) 城王舊るれ茂草 京北



(頁七二一) 門華東城禁紫 京北



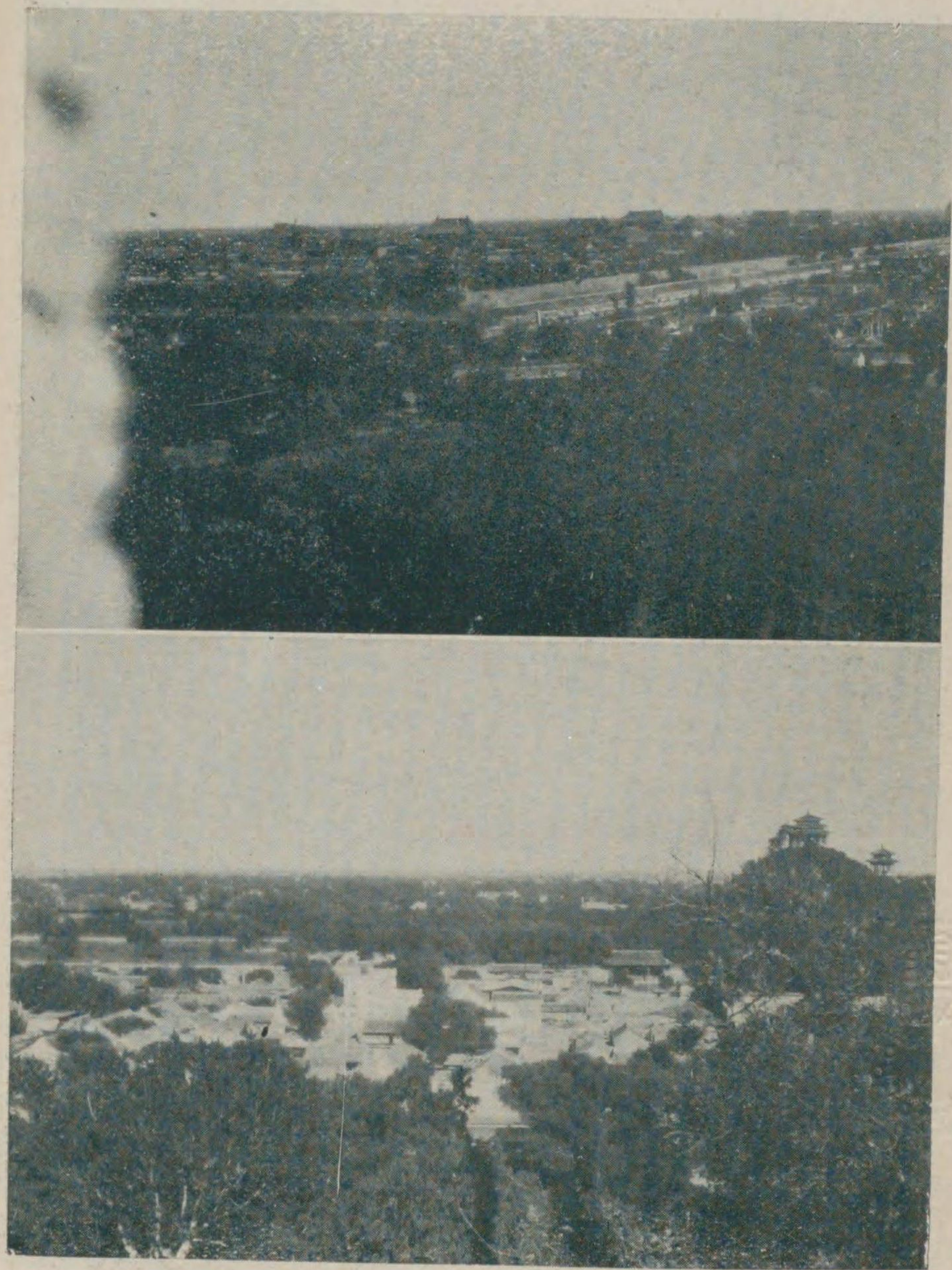
(頁三三一) 海北 京北(上)
(-の共) 景全 京北(下)



(頁〇三一) に共と兵國民(上)
(上同) 人下地る下を楷(下)

い。唯、濁水を汲んで運んで行く姿は數多見受けた。

自動車ははしる。砂ほこりの道は眞白に埃をたて、後に續く自動車をか
くしてしまふ。路面の馬糞からは一時に金蠅が叢立つて自動車の中までも
襲撃して來る。かゝる間に於ても、彼等大衆は平氣なのである。先進國民
としていくらか中華の民を許してゐた頭の中に、今更乍ら、劣等民として
の輕蔑の念がおこる。と同時に五十年前の我國も此様であつたらうと思ふ
ときには、同情の念も禁じ難い。機を得ずして中流以上の家庭を見學する
事が出來ず、唯通りすがりに大衆をながめたのみで、支那はおろか少くも
も天津の總てをさへ斷ずるは輕卒以上の愚論だ。しかし見たまゝを、感じ
たまゝを記録して、將來の參考に供するのも、決して無意味な事ではある
まい。



(二の其) 景全京北(上)

(三の其) 上 同(下)

旅館に歸つた所、一同の姿は土ほこりのために變な態である。互に顔を見合せて笑へば、齒だけは固有の白さに笑つてゐるのも面白い。アンペラの日覆の中につくられた洋風の日本座敷は、周圍より來る支那臭と薄暗さとでおちつきの悪いと此の上もない。夕は足にまかせて言語不通の支那街を探り、人通り淋しい日本街を歩く。

北京

二日。天津東站とか云ふ驛から乗車する。支那北部第一の門戸だけに一個の毛布つゝみに全財産を納めて、頭をテカテカさしてゐる苦力や、灰色の制服に身を固めてゐる軍人で一ぱいである。中には絹衣をまとつた商人風の男や、上流婦人も見える處は中原の商都天津だとうなづかれる。

鋼鐵張りの長い列車には、これらの人々や外國人の旅行者が四等級に分たれて收められてゐる。冬向の窓の小さい客車や、窓全體に金網をはりまわして、夏の蠅除装置のしてある客車等が混然と連結してある。何とはなしに不安な、不統一な國の内部をさらけ出してゐるやうに思はれる。

やがて見送られて亂國の首府北京に向ふ。一等車に收めてもらつたので混然たる状態は停車場以外では見られない。窓は例の金網張なので首はお

ろか、指一本も外へ出す事が出来ない。『窓から顔や手を出すと危険ですから御注意下さい。』といふやうな不體裁な禁札は勿論見られないが、少しものぞけないのはちと不自由だ。併し、一等車に居るのだから軽々しく不平も云へない。加ふるに國際的で支那人の立派な者も同車してゐるのだから。

金網ごしに世のうつりかはる景色をながめるのも一興だ。しかも何も強制的にその刑期を通じてながめるのではなくて、旅行なんだから興味本意とでも云へやう。只カメラの使用が出来ない不自由は何ともいたし方がないが、我慢して只徒らにながめる。はてしのない高粱畑は少し色づいてゐるやうである。トボトボと道行く人馬の面相さへ滿洲よりは引きしまつてゐるやうだ。百姓か旅人か求職人かは知らぬが、畑と同様、誰の姿にも戦争にいためられてゐる様子が更に見えない。戦争職人の軍人の顔にも少し

も緊張味を見られないのだから無理ない事かも知れないが、ひるがへつて、我が國四百年前の昔戰國亂世にも、この様なのんきな姿の戦であつたのではないかと考へ出すと、少年時代に力こぶを入れた英雄豪傑が、弱々しく思はれ出した。

何の變調もない平原を行く内、唯一つ印象につよく燒附けられた事がある。それは日本兵の電柱を立て、ゐる姿だ。

北京天津間に日本の専用電線のある事は聞いてゐた。又軍事上にも重要なもので兵士に守られてゐる事も聞いた。しかし見方によつては、内地に居ても、勿論兵士によつて人々の安寧が保證されてゐるのかも知れないが、直接に兵士の手で電線なり鐵道なりを修理されたり保護されたりしてゐる事は何かの變災の時の外、滅多にない事だ。軍隊は軍隊、地方人は地方人

と、別々に事をなしてゐる。然るに支那に來れば、うまく仲よく互に守り合つてゐるのが、此の一事だけで、も知り得るやうに思はれた。天津北京の在留日本人にとつては、此の二條の針金こそ、生命の綱なのではないか。特に此の頃の様な戦争中に於ては尙更の事である。軍隊と商人との間に於ては、勝手に云はせれば、お互に文句は云つてゐるだらうが、その腹の中をわつて見れば、案外もたれ合つてゐるのではないかと考へてゐるが、事實、天津に於ても北京に於ても又その他の地方に於ても、内心に於てはたしかに仲好くしてゐるやうに思はれた。

柄にない空想に耽つてゐる間も、汽車はだんだんと例の電線をたどりたどり、北京へと走つてゐた。やがて前方に城壁が見え出した。又繪に見るやうな角樓がポツリポツリと立つてゐる。平原の都會として、その保護の唯一のたよりは此の城壁である。我が國の如き山多き島國には此の例を見

ない。假令お城下と云つた所で、山の上とか蔭とかの形勝の地にあつて、お城と町家とは切りはなされて、町人までも壁の中に保護されてゐるやうな事はない。又幸か不幸か四面海を以て圍まれた中で、四階級中の武士階級同志が互に勢力争をしたのみで、戦争によつて蒙つた被害は主として武士の生命、又は農作物で、町民の被害等はあまり重要視されなかつたためでもあらうが、記録に残つて居らぬ。これは一面には同一民族間で覇をあらそふ武士の遊戯的な戦であつた爲ではなからうか。それに反して、大陸には幾多の種族が住んで居る。それが生活に窮するか、又は他の理由より互に覇をあらそふ。その場合は常に遊戯的な戦ではなくて、種族と種族との衝突であり、且つ劣者はそのまゝ滅びるものであるから、云はゞ生存競争的な戦で、眞剣に武士も町人も戦つたやうに思はれる。よつて都市は城壁を廻らして相手を防禦せんとする。その町の頭領は全員を率ゐて同族の

爲に戦ふのである。而してその勝負は全くその町都市一個の消長を決するものである。従つて此の城門こそ同胞の浮沈に關する關門であり、その番人には同族の生命が託されてあるやうなものなのだ。古來大陸には城壁や城内にからまる物語が多く見うけられる。古くはトロヤ物語より、近くは巴里の城壁の如き我々の耳によく聞く名だ。又その開城は民族的敗北を意味し、多くの婦女子等を取られたことは、バビロン以來上代史を彩るものである。

此の様な城壁物語は間々聞く事ではあるが、繪畫や寫眞でなくては見る事が出来なかつたのだ。それを今初めて、實物を見るに及んで、又云ひ知れぬ興味を感じずにはをられぬ。梯がなくとものりこえられる様な壁や、六きいものとはお城の濠より築き上げられた石垣の上にある壁位しか見て居らぬ者には、驚愕の眼を見開くのも無理はない。後日壁上に登つて其

の感を深うしたのだが、塞翁の馬の故事も、これでは可能なわけなのだ。灰色をした大きな煉瓦で實に見事に築き上げられてゐる此の城壁は、往來の人馬より比較して見れば、何丈位あるのか一見して決める事が出来ない。而も奉天の様に半分以上壞されてあるのではなくて、立派にのこされてゐるやうである。

汽車はこの壁にそつて走り前門站驛といふので止つた。出迎へてくれた者としては宿の者以外には同教の士とて數へる程である。支那布教に於ても北京では極く微力な事を感じた。やがて税關検査を受けて、公使館區域の方へ向つた出口より自動車に乗る。

北京第一の印象としては此の税關である。入國する時の關税だけではなくて、都會へ入る毎に課税するとか云ふ話だが、關知した所では支那入口

の天津で一回、今北京入りで一回、二日の内に二回も税關検査を受けた。而して天津で無事通過した物に對しても課税するのだ。殊に目新しいものであれば、且つ相手が外國人であれば、何の理由もなしに課税するらしい。こんな事なら天津の旅館にあづけて置けばよかつた荷物も二三あつた。次に第一に歩を入れたのは公使館區域だつたので、北京とは案外美しい歐風の都會の様に思はれた。日本の町等は遠く及ぶまいとさへ考へられたのだ。が、やがて旅館扶桑館近くなるにつれて、此の見解は見事裏切られてしまつた。

アンペラの日覆ひをしてあるうす暗い部屋が數日間の居城とあてがはれた。何でも先頃何とかいふ日本の役者が泊つたといふ、歴史ある部屋だそうだが、うす暗いので晝でもゴロリとしてゐるより外はない。

一同別の廣間で食事を取つて、見物にと出かける。先づ足は紫禁城へと

向けられた。灰色の汚はしい、且つ喧しい通りを幾つか曲つて、所々はけた朱塗りの東華門より入る。入ると云うても自由に入るのではない。門には引金のない銃を下けた巡査が番してゐる。而して、丁度日本の古社寺を拜觀する様なもので入場料を拂ふ。大洋クイキンや小洋シヤオヤンのある國だから自分達にはいくら拂つたのかわからぬ。何にせよ安からぬ代價を拂つて入つた。

銃を手にした巡査を尻目に、龍宮の門の様な東華門をくぐる。門と云つても仲々巾の廣いもので、十間位は確かにあるだらう。中程はうす暗くて前方の半分開かれた所より美しく光が入つて来る。此の中で兩口を閉められたらどうだらう、と考へると一寸おそろしいが、我々は其の光る處へと大またに進んで行くのだ。云ひ遅れたが此の樓門は三ヶ所の通路となつてゐるが、正面と他の一つとは閉ざされて、我々の通つたのは向つて右の通路であつた。而もその通路も扉は半分だけしか開いてゐない。且つ樓門

の中央部に扉があるのではなくて兩側に二重扉となつてあるのも、日本ではあまり見受けぬ様式だ。

此の樓門の内部は美しい庭だ。樹は青々としてゐる、道は美しい砂がしかれてある。樓門一重の内外は全く別天地の様な氣がする。唯、十五年以前にその主人をなくした宮殿だ。その後は荒れるにまかせて居り、手入れを知らぬ武人の管理になつた爲か、のびるが儘に委されてゐる『蓬の園』だ。數知れず立つてゐる樓門や御殿、さては廻廊に至るまで、昔日は如何に美しかつたやらうと思はしむるのみで、今は淋しい姿をしてゐる。大理石を鋪きつめた紫禁城宮殿の前庭は、夏草のしこるにまかせられ、其中を流れる小河は昔日美姬をしたがへた王者の遊びに威を示したもののらしいが、今はその後かたもなく、欄干はかたむき流水さへ細々とあはれな聲で泣いてゐるやうだ。

その只中に立つ時には、又も時の力と人の力とを自ら比較され、混同されて、頭中は走馬燈のやうだ。この華美をつくせるは人の力である、又この廢墟をさらしてゐるのは時の精である。兩者の關係を考へるよりも、先づ驚きを感じるのみである。

所謂中華の民の智能を絞り粹を集めて造られたのが此の宮殿なのであらう。王侯百官等の貴族が、其時代の文化生活とも云ふべき、詩歌管絃の藝術生活に耽つたのも此處なのだ。而して世界に誇るべき支那文化は、彼等によつて生み出されたもので、彼等の生活を考へる時はお伽噺の國を思はしむ。しかるに今日一般の民の様を見るに、決して十五年以前には立派な中華の民として華かな文化生活をしてゐたものとも思はれない。それを思ひ之れを見ると、人の力と時の力とは混然として分別がなくなると共に、

此の貴族文化の黄金時代には、大衆が如何に冷遇され機械視されたか、思ひやられる。立派な彫刻、鼎又は青銅の大きな獅子等は、その道の人の眼をとらへて垂涎立去るを忘れしむるものである。又あらゆる建物の至る處に施された彫物や粉色も、私は唯美しいと思ふだけで、猫に小判の様なものだが、要するに、大したものだ。今日此の宮殿内を我が物顔に濶歩してゐる武人達にも、恐らく鑑賞慾以上に所有慾のみ刺戟するやうな高價なものばかりなのだらう。

比較的ハイカラな軍人の中に交へて記念寫眞を撮り、振り返れば高い樓門を乗りこえていづくへか出かけて行く兵士を見た。又ヨボヨボした老兵士や、副官をしたがへた十歳未満の現役將校が、時を得顔に太和門の櫓を下つてくるのに出遭つたが、日本では全く考へ及ばぬ恰好である。

石櫓に刻まれた、見事な龍に靈ありとすれば、彼龍は多分、

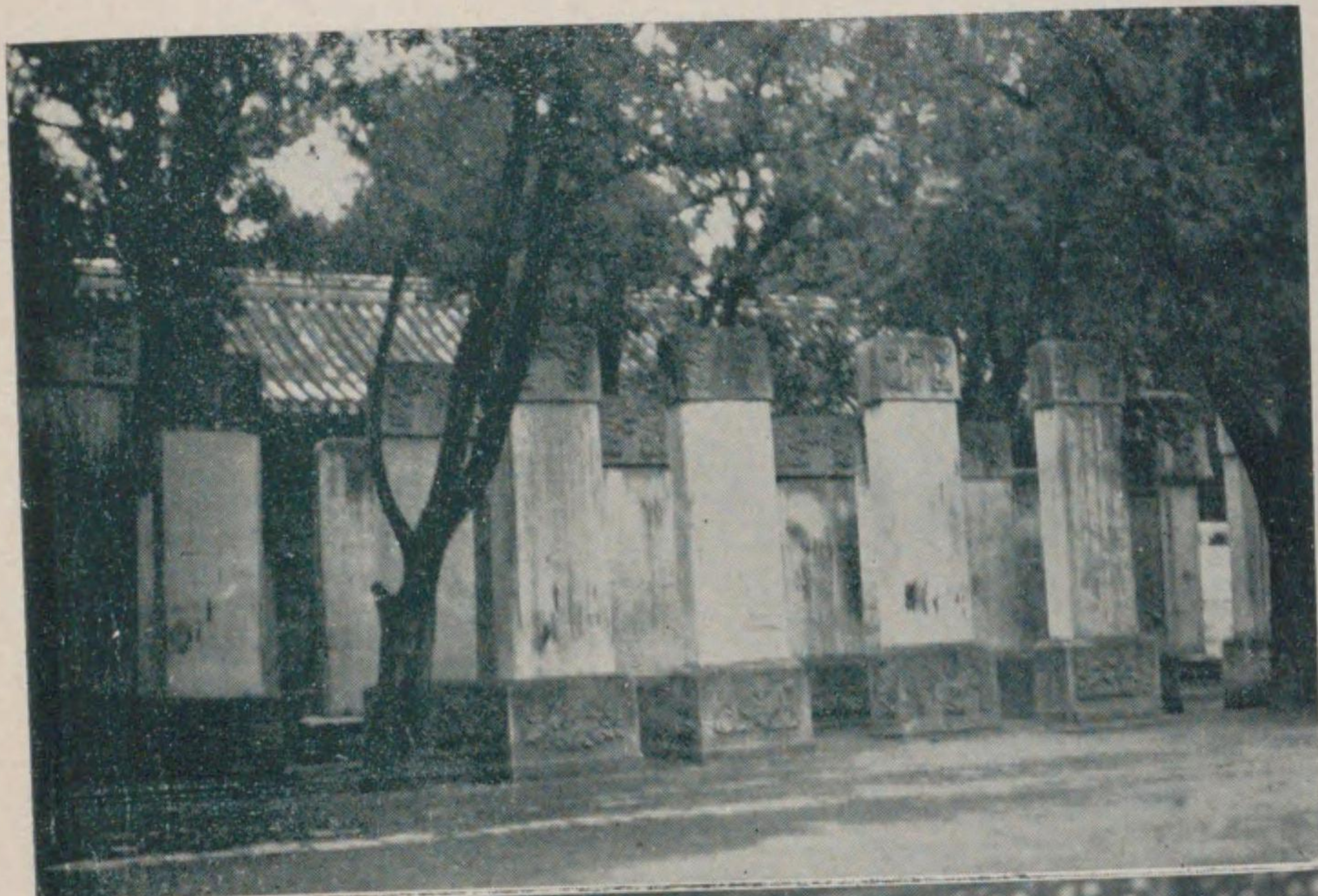
『二十年前までは美姫紳士の外我が眼にふれる事なかりしを、今は何といふ末法の世ぞ。東夷の我が面を汚すさへあるまじきに、地下人奴、誇しげに我が面を土足に踏みぢるとは。あゝ天は我を何と見賜ふらん。』とて、雲を呼び風を起して大粒の涙を流すにちがひない。

宮殿を更に奥へ進むと、美しい廣々した宮殿の幾棟かを博物館の様にして書畫骨董、歴代の調度等を展覽してある。武英殿、文華殿等床しい名であるが、入つて見るとのんきな兵士、看守がウヨウヨと歩き廻り、異様な眼つきで箱の中にある貴重品を見てゐる。名にふさわしい昔の佛は少しもうかゞはれない。上の心下倣ふとでも云ふのであらう。鑑賞眼のありそうに見える者は一人もないが、異様な眼で見つめてゐる。話によると熱河の離宮や、清皇室の寶庫に山積されてあつた珍貴な書畫骨董、其他の貴重品

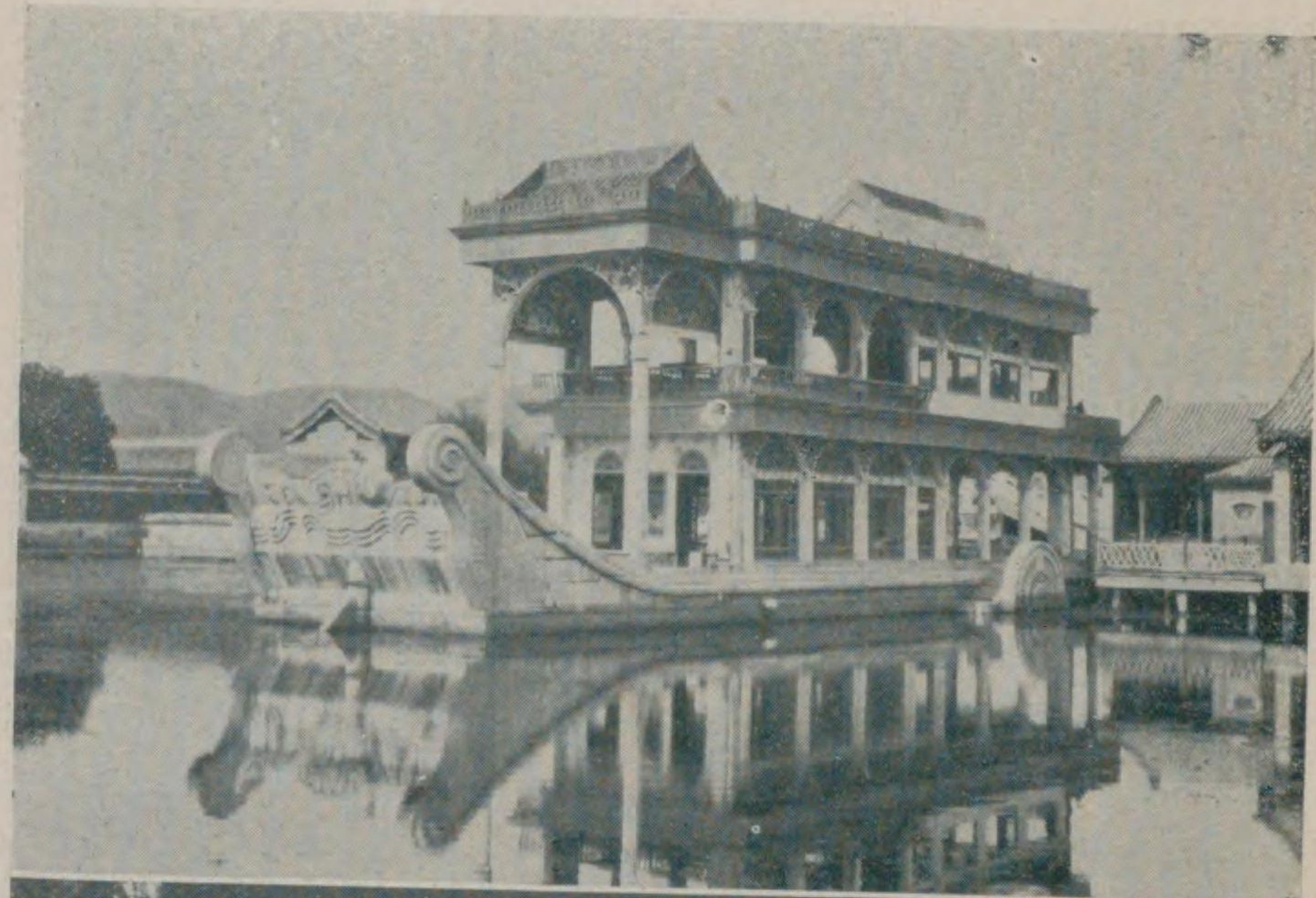
は数へきれぬ程であつたが、革命以來覇をとなへた袁世凱を初め張作霖にいたる武人達が、その内、目星しい物を多かれ少かれ着服してしまひ、今ならんであるのはそのよいかすの残りだと云ふ。しかも好者の垂涎おくあたはざるもの數知れぬといふのだから、昔の事は一寸想像もつかない。若し眞に東洋美術を味はうとでも思ふなら、此等の一棟に一日を費して惜しくないと思ふ。それを一氣呵成に數棟を短時間で見てしまつたので、今から考へるともつとよく見て置けばと後悔するが、その當時、如何に暑さの爲に足を引きづつてゐたかを想像せば、自然苦笑される。たしかに微に入り細にわたつて研究するよりも、勞少くしてアツといふやうなものを欲するといふ、お上り氣分になつてゐた事は事實なのだ。しかも一旦東華門で入場料を出し乍ら、各棟に入るに更に夫々入場料を取られた事のみ、未だ忘れずに居るのは、支那に入つてあの煩はしい貨幣制度と、油斷のならぬ



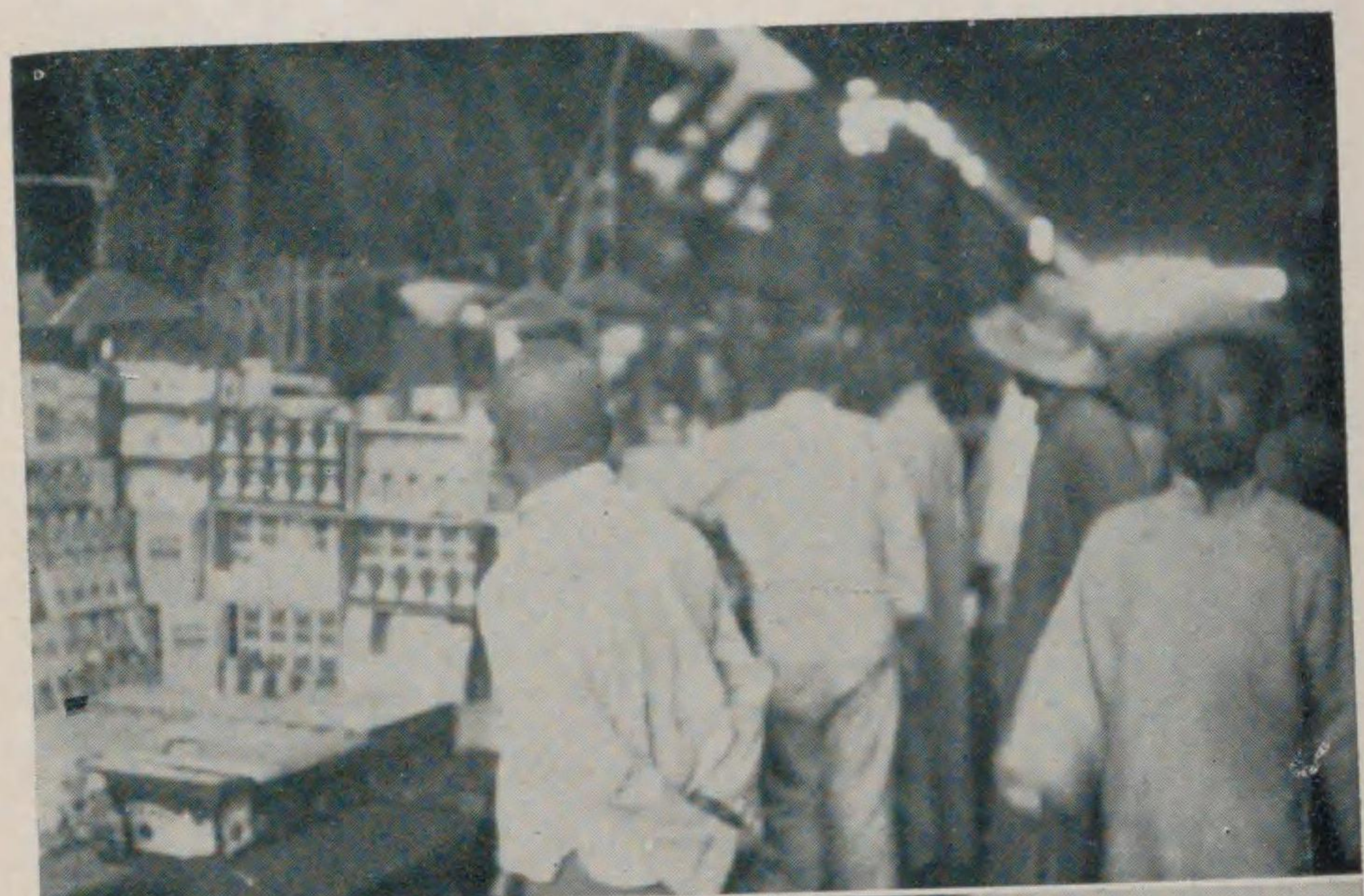
山 壽 萬 京 北



(頁二四一) 廟子孔 京北(上)
 (頁三四一) 宮和雍 京北(下)



(船石)山壽萬 京北(上)
 (廊廻)上 同(下)



場市安東京北



學大京北